

10513

福岡市

片江古墳群

発掘調査報告書

片江区画整理事業地域内第一次調査

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯—

福岡市教育委員会

1973年

福岡市

片江古墳群

発掘調査報告書

片江区画整理事業地域内第一次調査
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯—

福岡市教育委員会

1973年

7201
片江古墳
平成元年

7202
片江古墳

序

福岡市域の開発は年々速度を加えつつあり、それに伴なう埋蔵文化財の発掘調査の件数も増加する傾向にあります。片江区画整理事業も片江地区の再開発をめざして計画されたものですが、広大な面積に及ぶ事業区域には包含地、水田址、古墳群など多くの埋蔵文化財を包蔵しています。

本調査は、区画整理事業に先行して埋蔵文化財の発掘調査により記録保存に努めることをめざし、国庫補助事業として実施されたものです。

本年度の調査対象は古墳群に限定し、予算内でできるだけの記録保存に努めた結果、多くの成果をもたらすことができました。文化財の認識に対する一層の御理解と啓発のため御活用いただければ幸いです。調査にあたっては地元の区画整理組合準備委員会の方々をはじめ多くの協力を受けたことに対し、感謝の意を表します。

古墳群の調査にひき続き次年度は水田址、包含地の調査を継続事業として遂行していく所存であります。

昭和48年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 正木 利輔

例　　言

1. 本書は片江区画整理事業の計画にともない昭和47年度国庫補助事業として行われた同区域内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査の段階から資料整理、報告書の刊行にいたるまで柳田純孝、柳沢一男が協力して行なった。

3. 本書は柳田、柳沢が分担協議して作成した。

IV章の諸問題のうち1・3は柳沢が、2・4・5は柳田が分担執筆した。

4. 実測図の作成、トレースは柳田・柳沢のほか岡本孝之氏の協力によるものがある。

5. 写真は柳田、柳沢のほか後藤直の協力を受けた。

6. 編集は柳出が担当した。

本文目次

第1章	序説	1
I	調査にいたるまで	1
II	発掘調査の経過	1
(1)	調査の目的	1
(2)	発掘区の設定	2
第2章	古墳群の立地と環境(第1~3図)	3
第3章	調査の記録	7
I	片江1号墳(第4図)	8
II	片江2号墳	8
(1)	位置と現状(第5図)	8
(2)	外部施設(第6図)	9
(3)	内部構造(第7図)	11
(4)	出土遺物(第8図)	11
(5)	小結	12
III	片江3号墳	13
(1)	位置と現状(第9図)	13
(2)	外部施設(第10~11図)	13
(3)	内部構造(第12図)	15
(4)	遺物出土状態	16
(5)	出土遺物(第13~14図)	16
(6)	小結	17
IV	第4号墳	19
(1)	位置と現状(第15図)	19
(2)	外部施設(第10~16図)	19
(3)	内部構造(第17図)	20
(4)	遺物出土状態	22
(5)	出土遺物(第18図)	22
(6)	小結	22
V	第5号墳(第19図)	23
VI	第6号墳	24

	(1) 位置と現状 (第20図)	24
	(2) 外部施設	24
	a 馬蹄状溝 (第21図)	25
	b 墳丘および墓塙 (第22図)	26
	c 墳丘裾と裾部を繞る列石 (第21図)	27
	(3) 内部構造 (第23~25図)	28
	(4) 遺物出土状態 (図版10)	30
	(5) 出土遺物 (第26~30図・第1表)	31
	(6) 小結	39
Ⅶ	片江7号墳	40
	(1) 位置と現状 (第31図)	40
	(2) 外部施設	40
	a 馬蹄状溝 (第32図)	40
	b 墳丘および墓塙 (第33図)	42
	c 墳丘裾および裾部をめぐる列石 (第32図)	43
	d 墓道 (第32図)	44
	(3) 内部構造 (第34~35図)	44
	(4) 遺物出土状態 (第36図)	46
	(5) 出土遺物 (第37~41図)	46
	(6) 小結	54
Ⅷ	片江8号墳	55
	(1) 位置と現状 (第42図)	55
	(2) 外部施設	55
	a 馬蹄状溝 (第43図)	55
	b 墳丘および墓塙 (第44図)	56
	c 墳丘裾部と裾を繞る列石 (第43図)	57
	(3) 内部構造 (第45~47図)	58
	(4) 遺物出土状態 (図版18)	60
	(5) 出土遺物 (第48~53図)	61
	(6) 小結	69
IX	第6号~第8号墳 (鳥越C支群) の小結 (第54図)	70
第4章	片江古墳群をめぐる問題点	72
I	古墳の築造について (第55図)	72

II	石室の構造(第2表)	74
III	石室の平面图形の構成について(第56~59図)	75
IV	須恵器一坏にみられる形態的変化(第3表)	81
V	ヘラ記号について(第60図)	82
第5章	総 括	84
	編集後記	86

挿 図 目 次

第1図	片江古墳群遠景	2
第2図	片江古墳群と周辺の遺跡	4
第3図	片江古墳群位置図 (縮尺1/8000)	5
第4図	片江2~4号墳(早苗田C支群) 地形図(縮尺1/1000)	7
第5図	第2号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)	8
第6図	第2号墳墳丘断面実測図 (Bトレンチ)(縮尺1/60)	9
第7図	第2号墳平面実測図 (縮尺1/100)	10
第8図	第2号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	12
第9図	第3号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)	13
第10図	第3号墳・第4号墳墳丘断面実測図(縮尺1/60)	折り込み
第11図	第3号墳墓底実測図 (縮尺1/70)	14
第12図	第3号墳石室実測図 (縮尺1/35)	折り込み
第13図	第3号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	16
第14図	第3号墳出土武具・工具・馬具実測図 (縮尺1/2)	17
第15図	第4号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)	18
第16図	第4号墳墓底実測図 (縮尺1/70)	20
第17図	第4号墳石室実測図 (縮尺1/35)	折り込み
第18図	第4号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	22
第19図	第6号~第8号墳(鳥越B支群) 地形図 (縮尺1/2000)	23
第20図	第6号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)	24
第21図	第6号墳墳丘標・列石及び馬蹄状溝関係図 (縮尺1/100)	25
第22図	第6号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/60)	折り込み

第23図	第6号墳玄室床面下構造	(縮尺1/40)	28
第24図	第6号墳石室実測図	(縮尺1/35)	折り込み
第25図	第6号墳閉塞部実測図	(縮尺1/40)	29
第26図	第6号墳出土須恵器実測図I	(縮尺1/3)	33
第27図	第6号墳出土須恵器実測図II	(縮尺1/4)	35
第28図	第6号墳出土土師器実測図	(縮尺1/3)	37
第29図	第6号墳出土武具・工具実測図	(縮尺1/2)	38
第30図	第6号墳出土装身具実測図	(縮尺1/2)	39
第31図	第7号墳墳丘測量図	(縮尺1/200)	40
第32図	第7号墳馬蹄状溝・墳丘裾及び列石関係図	(縮尺1/100) ··	41
第33図	第7号墳墳丘断面実測図	(縮尺1/60)	折り込み
第34図	第7号墳閉塞部実測図	(縮尺1/40)	折り込み
第35図	第7号墳石室実測図	(縮尺1/35)	折り込み
第36図	第7号墳羨道部遺物出土状態実測図	(縮尺1/20)	45
第37図	第7号墳出土須恵器実測図I	(縮尺1/3)	47
第38図	第7号墳出土須恵器実測図II	(縮尺1/4)	50
第39図	第7号墳出土須恵器実測図III	(縮尺1/4)	51
第40図	第7号墳出土土師器実測図	(縮尺1/3)	53
第41図	第7号墳出土武具・工具・装身具実測図	(縮尺1/2)	54
第42図	第8号墳墳丘測量図	(縮尺1/200)	55
第43図	第8号墳墳丘裾・列石及び馬蹄状溝関係図	(縮尺1/100)	56
第44図	第8号墳墳丘断面実測図	(縮尺1/60)	折り込み
第45図	第8号墳石室床面下構造	(縮尺1/40)	58
第46図	第8号墳石室実測図	(縮尺1/35)	折り込み
第47図	第8号墳閉塞部実測図	(縮尺1/40)	60
第48図	第8号墳出土須恵器実測図I	(縮尺1/3)	63
第49図	第8号墳出土須恵器実測図II	(縮尺1/4)	64
第50図	第8号墳出土須恵器実測図III	(縮尺1/4)	65
第51図	第8号墳出土須恵器実測図IV	(縮尺1/4)	66
第52図	第8号墳出土土師器実測図	(縮尺1/3)	67
第53図	第8号墳出土武具・馬具・農具実測図	(縮尺1/2)	68
第54図	第6号～第8号墳(鳥越C支群)関係図	(縮尺1/300)	71

第55図	墳丘地割図	(縮尺1/200)	73
第56図	第3号墳、第4号墳平面構成図(縮尺1/60)	76	
第57図	第6号～8号墳平面比較図	(縮尺1/60)	77
第58図	第6号墳、第8号墳平面構成図(縮尺1/60)	77	
第59図	第7号墳平面構成図	(縮尺1/60)	79
第60図	片江古墳群出土須恵器ヘラ記号拓影図(縮尺1/3)	83	
第1表	第6号墳出土装身具計測表	38	
第2表	石室各部計測値	74	
第3表	片江古墳群出土須恵器法量表	81	

図 版 目 次

図版 1(1)	片江古墳群遠景	油山中腹(南)から
	(2)第2号墳～第4号墳遠景	(北から)
2(1)	第2号墳遠景	(南から)
	(2)第2号墳全景	(南から)
3(1)	第3号墳近景	(西から)
	(2)第3号墳全景	(西から)
4(1)	第3号墳袖石及び樋石	(西から)
	(2)第3号墳玄室と墓広の関係	(東から)
5(1)	第4号墳近景	(東から)
	(2)第4号墳全景	(南から)
6(1)	第6号墳～第8号墳全景(発掘前)	(北から)
	(2)第6号墳～第8号墳全景(発掘後)	(北から)
7	第6号墳～第8号墳全景(発掘後)	(南から)
8(1)	第6号墳近景	(東南から)
	(2)第6号墳全景	(東から)
9(1)	第6号墳玄室及び羨道部	(西から)
	(2)第6号墳全景(発掘後)	(東から)
10(1)	第6号墳玄室遺物出土状態	
	(2)第6号墳前庭部遺物出土状態	
11(1)	第6号墳墳丘と列石の関係	(西から)

- (2)第6号墳墳丘と列石の関係 (東南から)
- 12(1)第7号墳近景 (東から)
- (2)第7号墳全景 (東から)
- 13(1)第7号墳淡道部 (南から)
- (2)第7号墳玄室及び淡道部 (南から)
- 14(1)第7号墳淡道部遺物出土状態 (玄室から淡道部をみる)
- (2)第7号墳淡道部遺物出土状態 (淡道部から玄室をみる)
- 15(1)第7号墳墳丘と列石の関係 (南から)
- (2)第7号墳墳丘と列石の関係 (北から)
- 16(1)第8号墳近景 (東から)
- 16(2)第8号墳全景 (東から)
- 17(1)第8号墳玄室及び淡道部 (東から)
- (2)第8号墳玄室及び淡道部 (西から)
- 18 第8号墳遺物出土状態
- (1)玄室 (2)(3)前庭部
- 19(1)第8号墳墳丘と列石の関係 (北東から)
- (2)第8号墳墳丘と溝の関係 (南から)
- 20 石室の構造 (I)閉塞石の状態
- 21 石室の構造 (II)奥壁
- 22 石室の構造 (III)側壁
- 23 出土遺物 須恵器(I)
- 24 出土遺物 須恵器(II)
- 25 出土遺物 須恵器(III)
- 26 出土遺物 須恵器(IV)
- 27 出土遺物 須恵器(V)
- 28 出土遺物 土師器
- 29 出土遺物 (1)装身具
(2)馬具及び農具
- 30 出土遺物 (1)武具
(2)馬具及び工具

第一章 序 説

I 調査にいたるまで

片江古墳群の発掘調査は片江地区区画整理事業の実施に先立って行なわれたものである。

片江区画整理事業は南北は神松寺から油山山麓まで、東西は七隈から堤にいたる広大な面積に及び、昭和47年度に区画整理組合を設立して事業に着手する計画といわれ、昭和46年度中に事前調査の対象となった。

市内の分布調査に基づく地名表によれば、片江の丘陵上には片江カメ棺遺跡があり、倉瀬戸から鳥越にいたる山麓部には古墳が群集墳を形成している地域に相当している。

文化課では昭和46年秋三島格主を中心として島津義昭・山崎純男らが分布調査した結果、山麓部の古墳の内約10基が区画整理事業の地域内に含まれていることがわかった。そこで区画整理事業の着手に先立って発掘調査による記録保存に努めることになり、文化課の昭和47年度国庫補助事業として調査が実施されるところとなった。古墳以外にも片江カメ棺遺跡のある包含地等調査の必要な地域が含まれているが、古墳以外の要調査地域については昭和48年度以降継続事業として記録保存に対応する予定である。

調査担当は次のとおりである。

三島 格（文化財主事）
柳田 純季（技術吏員）
柳沢一男（調査員）
福田 一征（事務吏員）

なお8月7日より8月25日迄の間調査補助員として岡本孝之氏（慶應大学大学院生）の協力を得た。

II 発掘調査の経過

(1) 調査の目的

6月上旬、柳田、柳沢は46年秋の事前調査の結果をもとに現地踏査をしたところ、石室が陥没し、墳丘が認められるものは鳥越に3基、早苗田に1基確認された。石材がみられ地形の状態から古墳と考えられるものは鳥越に1基、早苗田に3基あったが、他は自然地形とみられるものであった。

そこで鳥越4基、早苗田4基の古墳8基を調査対象とし、早苗田の最も北側に位置するものを片江1号墳と呼び、南へ順番に7・8号墳とした。1~4号墳は早苗田、5~8号墳は鳥越に立地している。2基分の費用を古墳周辺の伐採にあてることにした。

古墳の周辺の伐採を地元片江地区的区画整理事業準備委員会（広田長登会長）に、6月中旬まで完了するように委託し、6月下旬から発掘作業を開始した。発掘作業員の確保にあたっては準備委員会の全面的な協力を受けて、他に福岡大学学生の参加を得た。

確認された古墳も石室は陥没し、すでに盗掘によりかなり破壊されていると考えられ、遺物の残存状態は期待できなかったので、調査にあたっては古墳の築造、石室の構造の比較検討に重点を置き、墳丘まで発掘することをめざした。また鳥越の3基隣接した古墳については相互の関連性の究明に努めた。

(2)発掘区の設定

外部施設の調査にあたっては古墳の主軸方向と主軸方向に直交する3本のトレントを設け、漢道部から玄室に向って右をAトレント、主軸方向をBトレント、左をCトレントとして墳丘築造状態を調べた。ついで漢道とAトレントの間をI区、A・Bトレント間をII区、B・Cトレント間をIII区、Cトレントと漢道の間をIV区とし、旧地表面を露出させ墳丘の発掘に努めた。

発掘調査は3基群集している地点に重点をおき、最も南側の8号墳から開始した。

8号墳の調査は6月下旬から開始し、8月迄に5～8号墳の調査を終り、9月～10月は1～4号墳へ移行することにした。ところが、8号墳に於て前庭部及び墳丘裾部に列石が発見され、ついで6号墳、7号墳に於ても同様の列石が確認されたことと、雨が多かったことから5～8号墳の調査は9月まで延長し、1～4号墳の調査を完了したのは11月下旬となった。



第1図 片江古墳群遠景

第二章 古墳群の立地と環境

片江古墳群は福岡市西区大字片江に所在し、福岡平野の西南部、油山の南側山麓部に位置している。油山山麓部には古墳が群集墳を形成しているが、片江古墳群もその中の一つである。

油山の中央部に源を発する片江川は油山から北へのびる丘陵の間をぬって友泉で樋井川に合流する。片江川流域の低平な水田地帯に開けた片江の集落は樋井川の西側に位置し、和名抄の早良郡毘伊(樋井)郷に比定される地域と考えられる。

油山山麓部に形成された群集墳の中で、片江古墳群はほぼ中央部に位置している。西側には倉瀬戸、七隈、大谷、駄ノ原、霧ヶ滝、西油山の各古墳群があり、東側には瀬戸口、井手、大平寺、駄ヶ原、荒谷、四十塚、大牟田の各古墳群があり、一大群集墳を形成している。片江から西側の古墳群は早良平野に面しており、東側へ連なる古墳群は福岡平野の中心南部に面する地域にある。これらの群集墳の中で影塚、大谷、七隈、倉瀬戸及び大牟田の各古墳群が発掘調査されているが、報告書が刊行されたものは影塚、大谷古墳群にすぎず、比較検討できる段階に至っていないが、これらの群集墳は2つに大別することができよう。

一つは油山山麓の端縁部及び丘陵先端部に位置するもので、ほぼ標高30~50mの間に占地しており、七隈、倉瀬戸、片江、瀬戸口、井手、大平寺の古墳群はその例である。

他は中部山麓の丘陵鞍部や谷に面して群集するもので、標高50~100mに位置するものが多く、

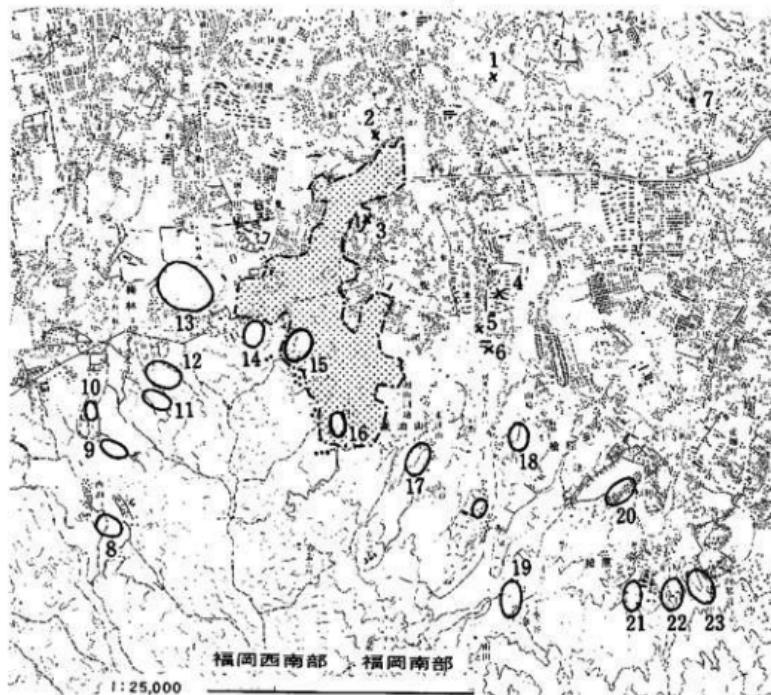


(北から)

中には 150m を越えるものもある。駄ノ原、大谷、大牟田古墳群等はその例である。

片江川の上流域には油山山麓からのびた丘陵が川に平行して南へつづいている。片江古墳群は片江川の西側丘陵に位置しており、西には倉瀬戸古墳群が隣接し、東には瀬戸口古墳群が占地する丘陵と対向している。片江古墳群の立地する丘陵上からは、片江川の西岸に沿って開けた低平な畑地や水田面を東側及び北側に眺むことができる。

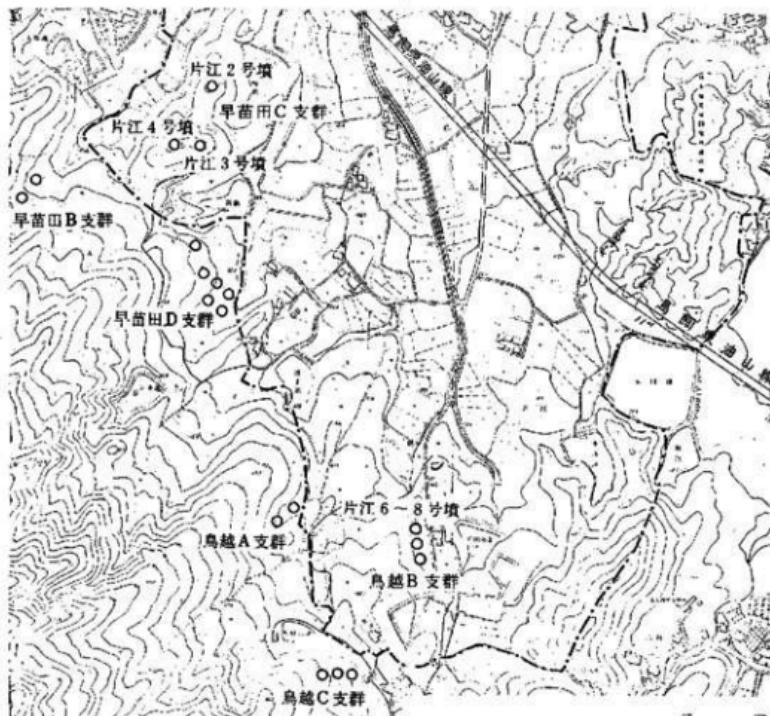
片江1～4号墳は大字片江字早苗田にあり、5～8号墳は字鳥越に所在する。



×	◎	■	□	・	古墳	古墳群	（括弧内は片江古墳管理事業区域）
1. 小菅遺跡					7. 六郷古墳群	13. 七隈古墳群	19. 駄ノ原古墳群
2. 神松寺遺跡					8. 西浦山古墳群	14. 倉瀬戸古墳群	20. 大平寺古墳群
3. 片江カメ柏遺跡					9. 鶴ヶ尾古墳群	15. 片江1～4号墳	21. 大谷古墳群
4. 宮台遺跡					10. 影坂古墳	16. 片江5～8号墳	22. 四十塚古墳群
5. 丸尾台遺跡					11. 駄ノ原古墳群	17. 濱戸口古墳群	23. 大牟田古墳群
6. 佐原遺跡					12. 大谷古墳群	18. 井手古墳群	（太字は測定された遺跡）

第2図 片江古墳群と周辺の遺跡

従来この付近の古墳については、早苗田古墳群、片江古墳群、鳥越古墳群等と呼ばれてきたが、十分に整理されたものとはいえない。本年度調査した古墳については従来の古墳群との混亂をさけるために、片江川に面した丘陵先端に立地する古墳を一括して片江古墳群と総称することとした。片江古墳群の中で1～4号墳は従来の早苗田古墳群に含まれ、5～8号墳に鳥越古墳群中の古墳と思われる。しかし、両古墳群の間（1～4号墳と5～8号墳の間）にはなお数基以上の古墳が分布しておりその類別は判然としていなかった。本年度の調査により2～4号墳及び6～8号墳はそれぞれ3基を一単位とするグループ構成が明らかとなり、支群として類別することができる。両支群の間に分布する古墳の正確な実数を把握するに至っていないが、なおいくつかのグループに類別することが可能であると考えられる。



第3図 片江古墳群位置図(縮尺1/8000)

現段階の資料をもとに概説的に述べれば、片江古墳群は早苗田支群と鳥越支群に大別され、2～4号墳は早苗田C支群、6～8号墳は鳥越B支群に相当する。早苗田A支群は黙恋の家内の古墳（現在2基）で、2～4号墳（C支群）の北西丘陵上にある。C支群と倉渕戸古墳群の立地する丘陵の間の谷には2基の古墳が確認されており、これをB支群とする。更にC支群の南東側に数基の古墳があり、これをリ支群としておく。

鳥越支群は道手池の南側2基をA支群とし、B支群（6～8号墳）へとつづき、更に南側の3基（内1基は消滅）をC支群と類別することができる。

早苗田山支群と鳥越支群は油山から道手池へのびる丘陵をもって二分することができよう。早苗田B支群、鳥越A支群は今後の分布調査により更に確認される可能性があり、早苗田D支群は更に2つに細分されると思われる。

1～4号墳（早苗田C支群）は油山山麓から東へのびる丘陵の頂部に立地し、東部には片江川によって開拓された水田を見下す位置にある。3号墳は最も高い所にあり、標高46mを測る。4号墳は3号墳の西側に隣接する古墳ではほぼ同じ等高線上にある。2号墳は3号墳の北側200mの距離にあり、一段低い標高42mの丘陵頂部にある。いずれも両袖型の横穴式石室を内部主体とする円墳である。

2号墳及び4号墳はほぼ南西へ開口し、3号墳は西側へ開口している。2～4号墳は大部分が破壊され、石材が持出されているため石室はわずかに腰石を残す程度である。2号墳は腰石すら残されておらず、腰石を支える根石を検出するのみという有様であった。従って遺物もほとんど残されておらず、築造時期の決定に苦慮する程である。2号墳の北側丘陵頂部に立地する1号墳は調査の結果古墳ではなく、自然地形であることがわかった。

1～4号墳が丘陵頂部に立地するのに対し、5～8号墳（鳥越B支群）は油山山麓の東側傾斜面上に南北に並列し、標高は36mである。いずれも両袖タイプの横穴式石室を内部主体とする円墳で6号墳・8号墳は東へ開口し、7号墳は南へ開口している。いずれもすでに盗掘を受けている。天井石は残存せず、玄室が陥没した状態で発見されたため、玄室内の遺物は極めて乏しい結果しか得られなかった。6号墳の西側へ隣接すると考えられた5号墳は調査の結果古墳ではなく、自然地形に露頭した石材であることが判明した。

註(1) 1970年福岡市教委が調査（報告書未完）

(2) 1971年冬 別府大学、福岡市教委が調査（報告書近刊）

(3) 1969年冬 調査（三島格による）

(4) 「福岡市影塚1号墳発掘調査報告」 福岡市教委 1972年

(5) 「大谷古墳群Ⅰ発掘調査報告書」 福岡市教委 1972年

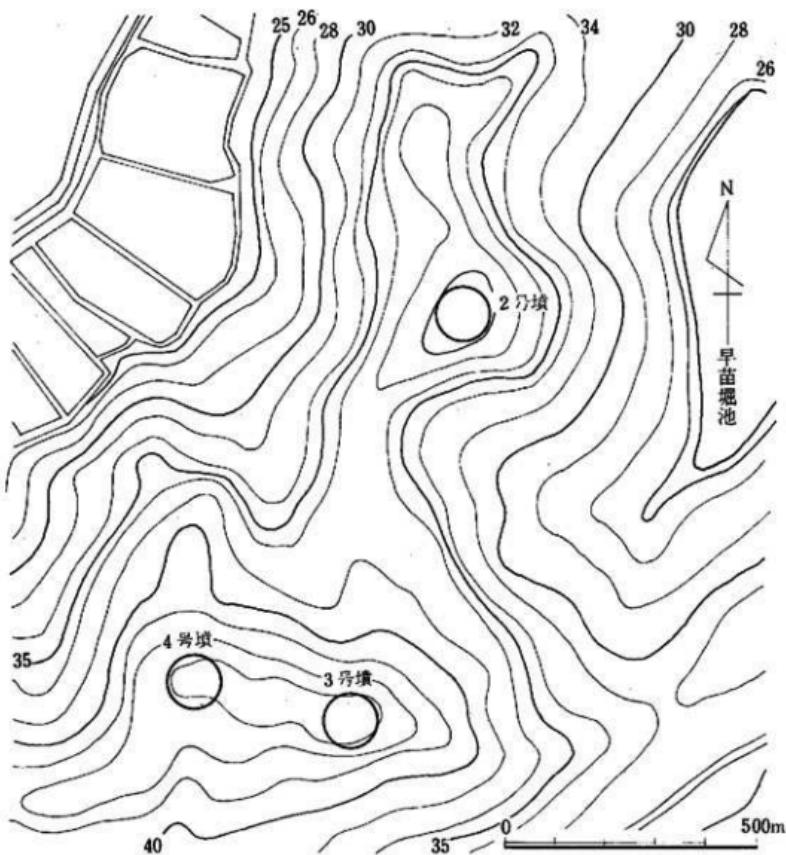
(6) 「福岡市埋蔵文化財追跡地名表第2集」 福岡市教委 1970年

および註(6)ではそれぞれ取扱いが異なっている。

第三章 調査の記録

現地調査は南側の8号墳から順に1号墳へと北へ進めたが、その結果を1号墳から記述する。調査の結果1号墳と5分墳は古墳ではなかったが、資料整理の都合上、古墳の名称はそのまま残して通し番号とした。

古墳の説明にあたってはまず位置と現状を述べ、内部構造に対して外部施設として包括し、



第4図 第2号～4号墳（早苗田C支群）地形図（縮尺1/1000）

墳丘、列石、馬蹄状溝の小項目を設けた。馬蹄状溝とは傾斜面を削り出して墓域を決定する際の傾斜面の上方にみられる溝のことと、この溝は古墳を全周するものではなく、馬蹄状に半周するものである。

内部構造では玄室、羨道部、遺物出土状態の小項目を設けたが、残存状態の不良な古墳については一括して記述した。

1～8号墳は標高40～50mの間に位置する点で共通するが、2～4号墳は丘陵頂部に占地し、6～8号墳は傾斜面丘に立地する点で対象的であり、石室の形態にも相違がみられる。

I 片江1号墳

片江1号墳と呼ぶのは南北にのびる丘陵の最も先端部の頂部である。標高36mの地点で、西側には小さな谷をはさんで早苗田A支群の立地する丘陵が200mの距離にある。早苗田丘陵上の古墳は丘陵頂部に占地しており、外部観察では墳丘か自然地形かの判別が困難な上に石室の用材が確認されたのは3・4号墳のみで、2号墳同様発掘してみると古墳かどうかわからぬ状態であった。丘陵頂部を南北に1m×7mのトレントを設定して発掘した結果、自然堆積の状態しか観察できず、わずかに銃弾が数点みられたのみである。この丘陵一帯は戦時中の射撃訓練の標的とされた地点といわれ、銃弾はその残骸であった。

調査の結果この地点は古墳ではないことがわかったが、整理の都合上、名称のみを片江1号墳として残すこととした。

II 片江2号墳

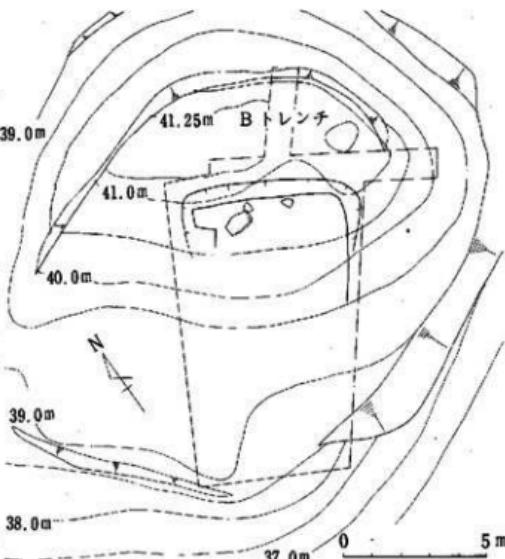
(1) 位置と現状(第5図)

2号墳は油山から北へのびた早苗田丘陵の先端部に近く、3号墳より北へ200mの距離にあり3号墳及び4号墳より一段低い標高42mの丘陵頂部に位置している。

この丘陵は更に北へのびて次第に低平な台地へとつづいている。

42mの最高点より南西側にテラス状のはり出しがみられ、北、東は崖状を呈する。

東側には丘陵にはさまれて早苗田



第5図 第2号墳墳丘測量図(縮尺1/200)

池があり、東側に開かれた水田地帯を潤す灌漑用水となっている。西側には小さな谷をはさんで早苗田A支群の立地する丘陵が対向している。

丘陵頂部は南西側のテラス状の部分がわずかに削平された状態であったが、ほぼ自然地形に近く、石材も認められなかつたので古墳かどうか判別が困難であった。丘陵頂部の中心から南東一北西に1m×10mのトレンチを設定した。その結果トレンチのほぼ中心に掘り込み面が現われたので、これに直交するトレンチを設け、テラス状のはりだし方向へ掘り進めた。

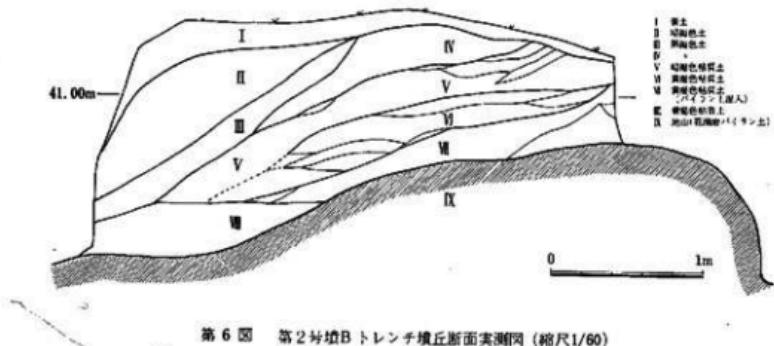
その結果、北側を奥壁とする墓室プランが確認されたが、石室の石材はほとんど持ち出されており、わずかに腰石を支えるこぶし大の根石が転在するのみで、根石の配置及び腰石の掘り込み面によって石室プラン及び狭道部の位置を推定するほかはないほど破壊されていた。

古老の話によれば付近の道路工事等の用材として石室の石材が運び出されたことがあるとのことであった。

(2) 外部施設（第6図）

墳丘 墳丘は玄室のほぼ中心部より狭道部側は削平されており、確認できなかった。主軸方向のBトレンチの観察によれば、墓室上面から3.5mのところで墳丘裾部に達する。玄室中心部から墓室上面までは3.0mであり、玄室中心部から墳丘裾部までは、6.5mとなり、これを半径とすると直径13.0mの円墳と推定できる。

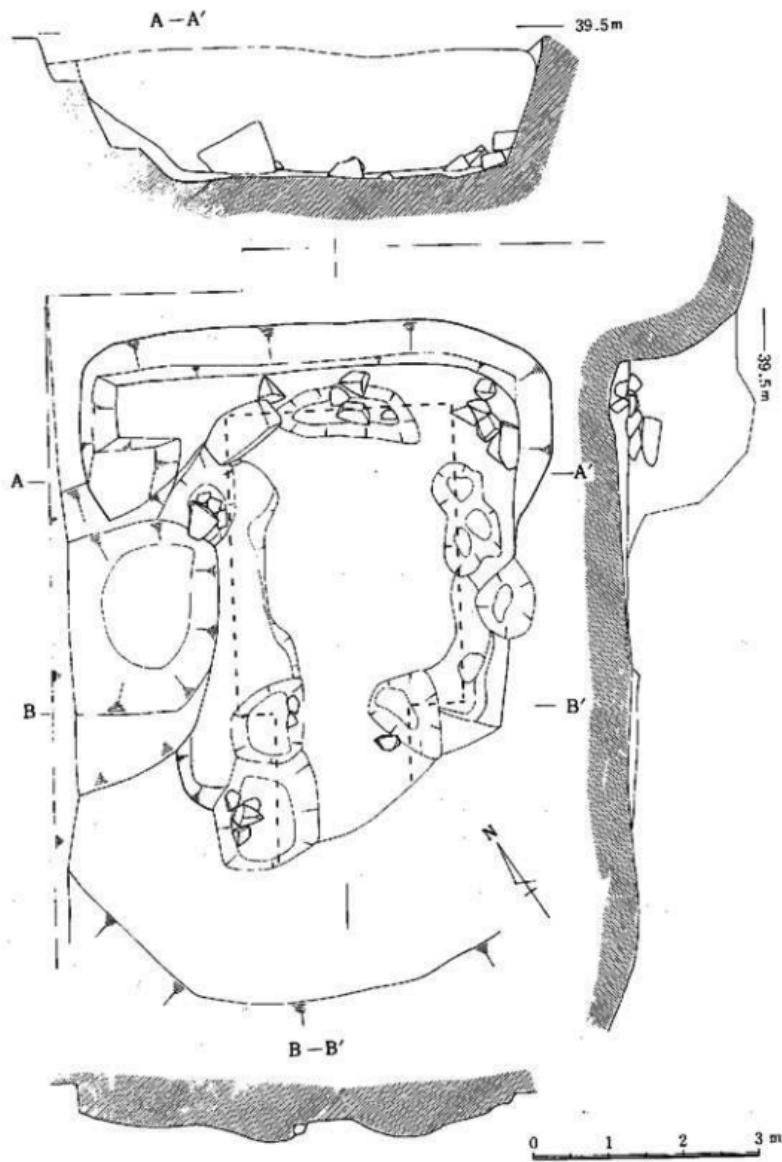
墓塙 墓塙は玄室の奥壁側で確認された。墓塙上面から玄室地山面までの高さは0.80mで、



第6図 第2号墳B トレンチ墳丘断面実測図 (縮尺1/60)

墓塙上面から40cmの深さまでは斜めにカットし、その下はほぼ垂直に近く掘り込んでいる。

玄室東側は隅円プランとなっているが西側ではコ字形プランとなり、特異な形状を呈する。また玄室の両側壁に相当する部分から狭道部にかけては石材の持ち出しの際破壊されている。わず



第7図 第2号墳平面実測図(縮尺1/100)
 (点線は腰石の振り方・根石の配置から腰石の中心点をしめす。
 石室の各壁面はこの中心線より50cm前後内側にあると想定される。)

かに左側奥壁部袖石部分に墓室の先端部がみられる。これをもとに墓室プランを推定すれば、玄室奥壁側では直線上を呈し、奥壁部袖石部分にゆるくカーブしながらすぼまる形となる。奥壁側の墓室下端での最大巾は4.5m、袖石部の最小巾は3.0mである。主軸方向の墓室の長さは5.5mとなっている。

(3) 内部構造（第7図）

石室の石材は残らず持ち出されており、わずかに残された腰石を支えたこぶし大の根石と腰石の掘り込み面の状態から、玄室及び奥壁部の配列を推定するほかはなかった。玄室は平墳で、奥壁、側壁及び奥壁袖石の石材が配置された部分は床面よりわずかに低くなっている。左右両側壁間の石材の中心点の距離は約3.0m、奥壁中心点より奥壁袖石の中心点迄は、約4.0mと推定される。

転在する石材は全て花崗岩で、石室は花崗岩により構築されていたと考えられる。3号墳及び4号墳は花崗岩による石室で、石室の腰石の巾は60cm～100cmであり、約80cmとして玄室のプランを推定すれば、側壁間は2.2m、奥壁から袖石迄は3.0～3.20mと長方形プランを呈することになる。3号墳は2.2×3.00m、4号墳は2.2×2.8mの長方形プランの石室であり、同規模の古墳と推定することができ、3号墳及び4号墳と類似する両袖タイプの横穴式石室とができるよう。奥壁部は袖石部分が推定されるのみである。石材中心点間の巾は1.8mで、奥壁巾はほぼ1.0mと推定される。袖石から前庭部にかけてはしだいに低くなるが、削平されて口状を推定することはできなかった。

(4) 出土遺物（第8図）

石室の石材がほとんど残存しないと同様に遺物は皆無に近い状態であった。わずかに数点の須恵器の破片が玄室や奥壁部及び前庭部に相当する地点から検出された程度である。その中には壺（蓋）、瓶、壺瓶、壺、及び甕がある。他に鉄鏃片が一点あった。

壺(1)口径13.8cmの壺蓋で、天井部から下縁部にかけてゆるやかにつづくもので口縁内側は丸味を持ち、外はカキ目、内面はナデにより仕上げている。焼成は良好で、黒灰色を呈する。天井部にヘラ記号がある。

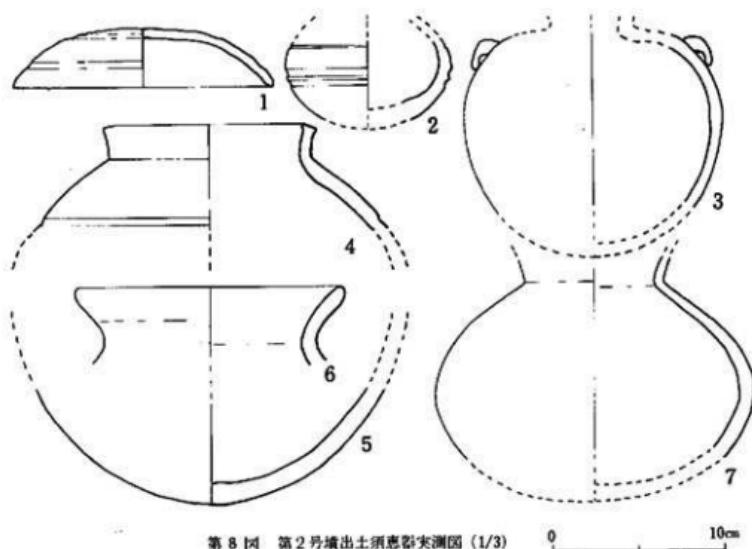
甕(2)甕の球部をなす胴部片で、胴部に二条の沈線がめぐり、その上に更に一条の沈線がめぐっている。胴部最大巾は8.8cmである。

壺瓶(3)壺瓶の耳を持つ破片で、体部最大巾は13.6cmとなる。焼成は良好でなく、青灰色を呈する。

壺(4～7)には口縁がほぼ直立するもの(4・5)と外反するもの(6・7)に分けられる。

4は口径10.0cm、胴部に一条の沈線がめぐり、外側はカキ目、内面はナデにより仕上げている。頭部下半にヘラ記号が施されている。

5は丸底をなす底部片であるが、外側にはカキ目調整が認められ、底部内面に叩目が施さ



第8図 第2号墳出土須恵器実測図 (1/3)

0

10cm

れる。胎土は4同様堅緻で、焼成は良好。4は胴部下半を欠失するが、丸底をなす5と同一個体と推定され、復原すると器高20.0cm、胴部最大巾21.3cmの大形品となる短頸壺であろう。胎土は堅緻で、焼成良好。

6は口径13.8cm、頸部11.2cmを測る。焼成は不良で暗灰色を呈する細頸壺であろう。

7は頸部径7.4cmを測り、口縁は外反する。胴部最大巾17.0cmを測り、外側にカキ目が認められ、器厚のうすい小形の細頸壺であろう。

壺は同心円の卯目を持つ胴部細片、鉄錆は蓋の細片のためいずれも図示できなかった。

(5) 小結

以上述べたように古墳は石材の搬出を目的とした盗掘により著しく破壊され、墓広の一部を確認したにすぎず、石室プランは残された根石や腰石の掘り込みから推定する他はなかつた。標高42mの丘陵頂部に位置する径13m前後の円墳で、横穴式石室を内部主体とすると考えられる。遺物もわずかに散在する程度で、築造年代の決め手は乏しいが、唯一の手がかりとして壺蓋を参考とすれば、Ⅲ-b期に属すると考えられ、6世紀後半に比定されよう。

III 片江3号墳

(1) 位置と現状(第9図)

本墳は4号墳

から30mほど東

にあり、墳頂は

標高47.89mで

ある。4号墳よ

り東に延びる後

線の東端部に築

造されており、

眺望は大きく開

け、旧畦伊郷を

眼下におさめ遠

く博多湾を見る

ことができる。

当初本墳は、墳

丘中を横断する

小径の断面から

は地山の花崗岩

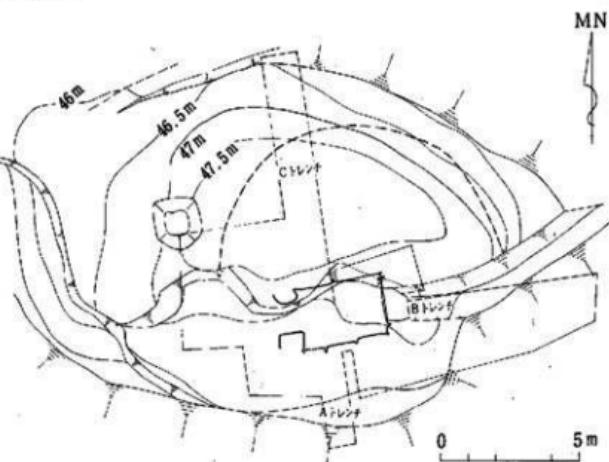
バイラン土が露出し、墳丘封土は認められることから古墳とは認定しえなかった。しかし、頂部より1mほど下ったところに花崗岩の露出が見られることから調査に踏みきった。

墳丘は縱断する小径によって二分され、その南半は削りとられて地山傾斜面に流れている。墳頂は広い平坦面をなし、削平されたことをしめており、また墳丘裾と推定される47.50mの等高線は小径の崖面に沿いつつ北半に孤状にめぐるのみである。

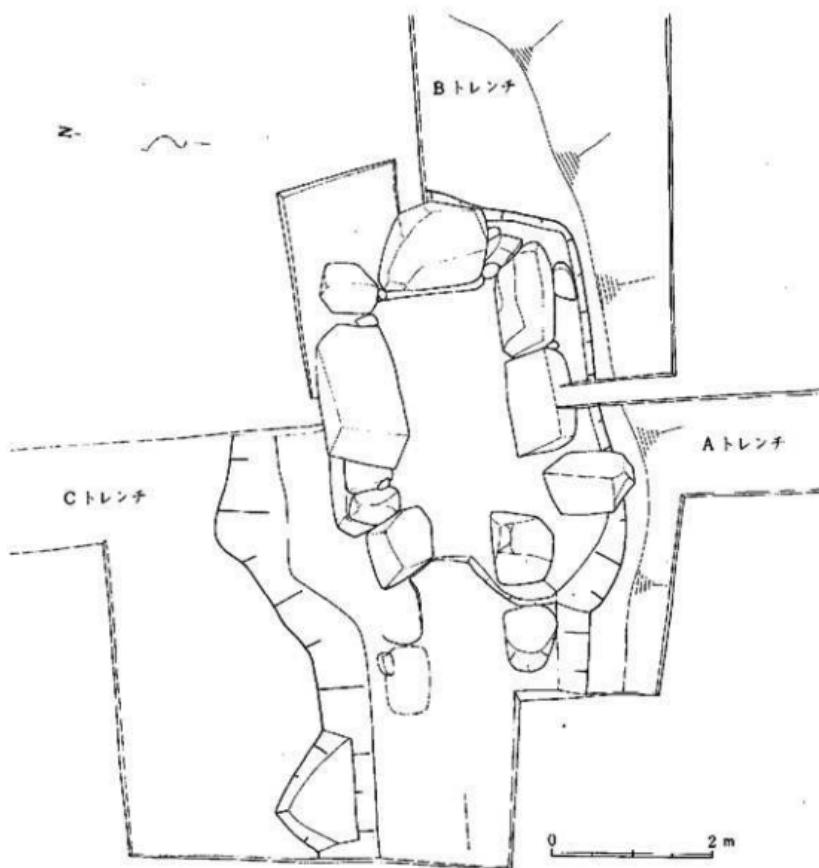
調査は石室内の擾乱土を排除しつつ、A・B・Cの各トレンチを設定し、墳丘規模、封土について追求した。また墓塙プラン及び墓道を可能な限り露出することにつとめた。

(2) 外部施設(第10・11図)

A・Bトレンチでは擾乱および削平が地表面下まで及んでおり、いずれも墳丘裾部を検出できず、わずかにCトレンチにおいて石室主軸より6.41mのところに墳丘封土の裾部を認めることができたのみである。裾部より2.3mで地山傾斜になり、北側墳丘は、その斜面の内側から築造されている。Cトレンチ内での地表面はほぼ平坦であるが、裾部より1.10m内側のところを境にして南北にゆるい傾斜をもち、墓塙上端は南側が-95cmとやや低いものの、

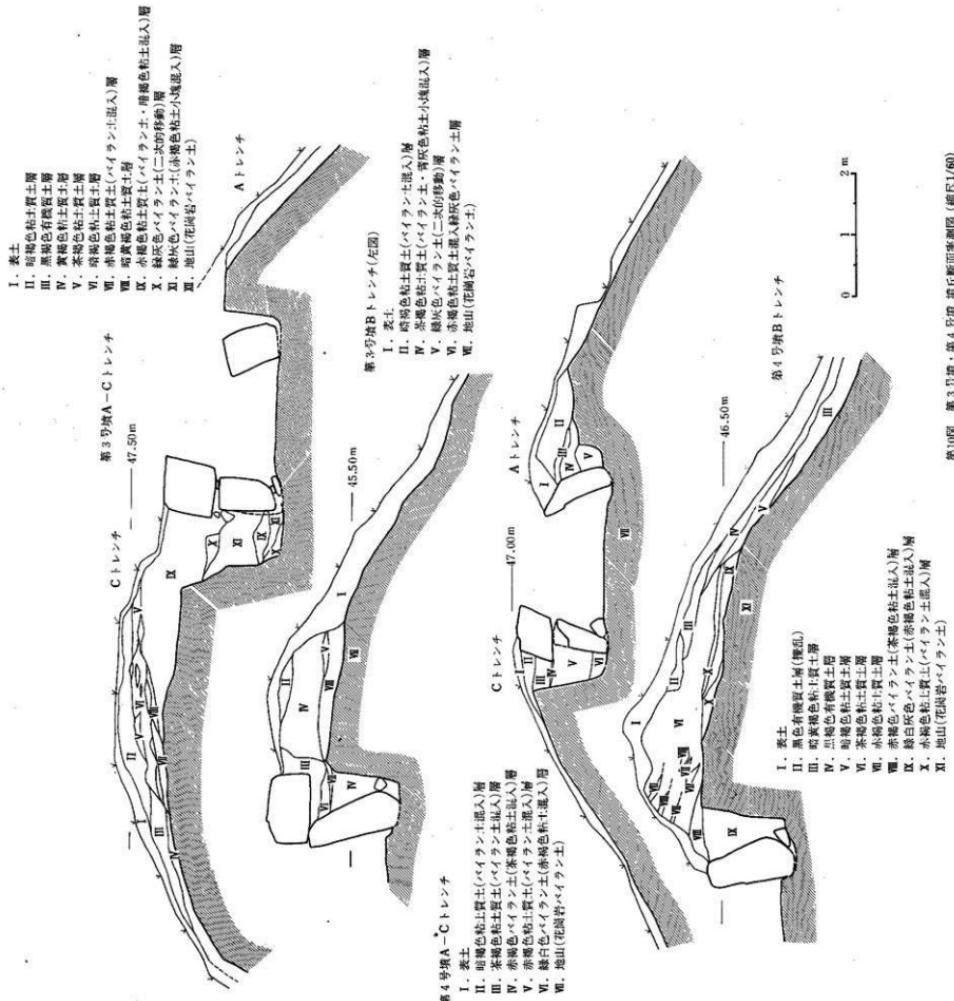


第9図 第3号墳 墳丘測量図(縮尺1/200)



第11図 第3号墳墓地実測図（縮尺1/70）

南斜面の流亡を考えれば本墳は稜線先端の平坦面の広がりをみせるところに、やや北側にゆとりを残しつつも平坦面巾を有効に利用して墳丘封土を架造したものと推定される。またその規模10~12m前後、円あるいは橢円を呈する墳形を考えることができる。現存封土高は削平が著しく墳丘北側部より65cm、玄室床面からは2.30mを測る。その原形は、天井部架構と上部被覆によって、現高に1~1.5mをプラスするものであり、封土盛土は1.5~2m前後



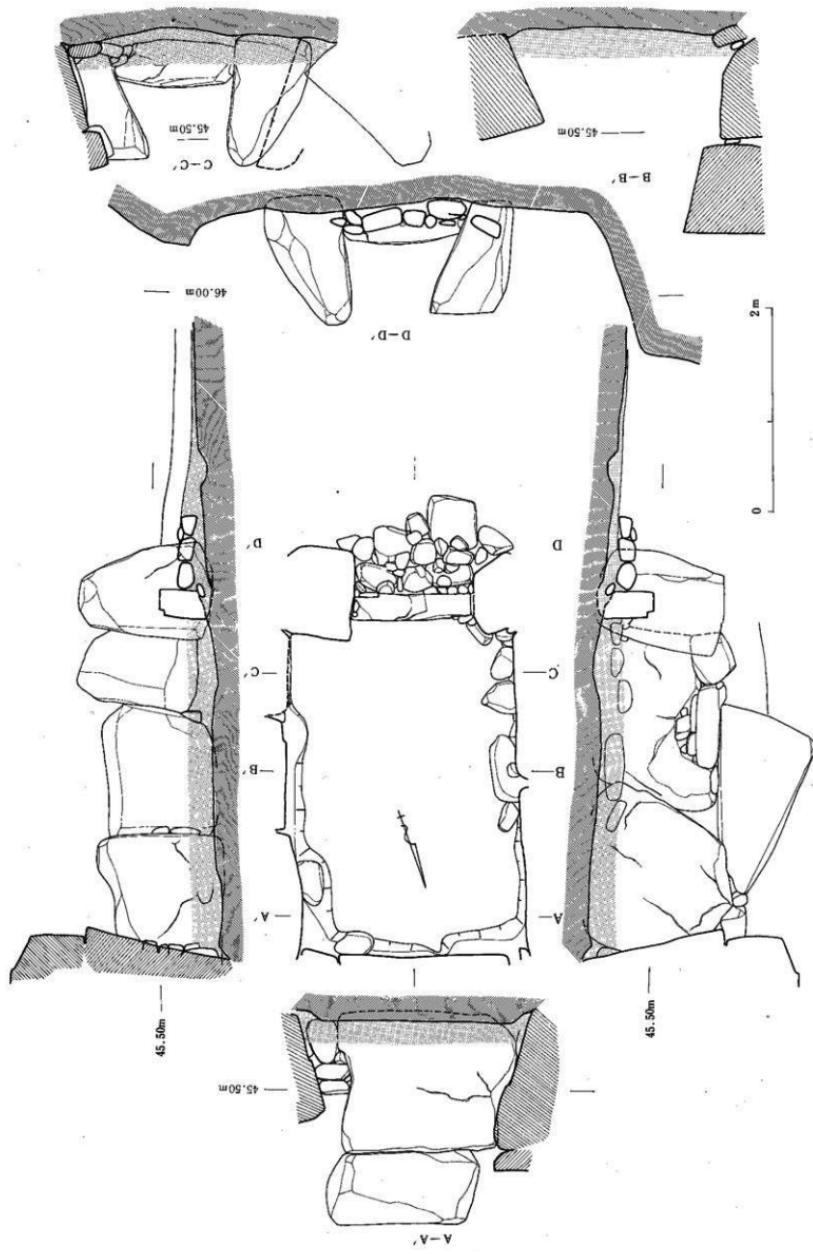


图125 池3号坑岩层剖面图 (放大1/35)

を推定することができる。

墓塚は地山面から垂直に近い角度に掘り込まれており、地山面よりの深さは1~1.6mほどである。底面はほぼ水平位で標高45mを測り、墓道方向にゆるく上る傾斜をとる。墓塚プランは玄室に相似する形をしめし、隅丸の長方形であるが、玄室袖石部を境にゆるくカーブをとりつつ狭まり、墓道に連なっていく。その巾A・Cトレンチ間で4.56m、袖部の狭まったところで3.5mを測る。

(3) 内部構造（第12図）

内部主体は主軸方向S 81° Wをとりほぼ西南に開口する両袖型横穴式石室で、盜掘あるいは石取りのため築造時原形を保っていない。現存する各部は、袖石及び玄室周壁のみで天井部及び羨道部は一石も残されておらず、あたかも袖石が石室入口の如き様相をみせている。

玄室は比較的整った長方形のプランをしめす。奥巾2.15m、中央巾（奥壁より1.50mのところで）2.20mを測る。前巾は右側壁の袖石に接合する腰石が石取りのために玄室外側に向って倒され正確な値は知りえないが、壁面の痕跡がくぼみとして残っており、その間の巾を求めるとき1.20mを測る。左右側壁ともゆがみがなく石室主軸にシンメトリカルな直線を構成する。玄室長は右壁で3.03m、左壁は3.08mを測る。また袖石間にには樋石が配せられ、奥壁より前面まで3.51mを測る。玄室構成は、長：巾は約3：2をとり、その比1.5である。

奥壁は2段の現存をみる。腰石は1.3×1.7mほどの壁面及び上面を平坦に整えた大ぶりの切石を据え、その上面にはやや小ぶりのものを積み上げている。現高は墓底底面より2.0m、推定床面より1.75mである。奥壁・側壁の接合面は各軽びをもち、奥壁13°、左壁18°、右壁17°とそれぞれ内傾しており、左右壁とも奥壁を挟み込むように据えている。

側壁は奥壁同様に大ぶりの加工した花崗岩切石を使用しており、それぞれ壁面、上面は平坦に仕上げている。とりわけ右壁2石目のものは両側面をも平坦に加工し丁寧に仕上げられている。左側壁は二石の腰石で、右壁では三石で構成されるが、3石目すなわち袖石と接合する腰石は、他と異なり縦位に据えられている。腰石上面はおおむね奥壁・袖石の上面レベルに一致するように配され、墓底底面を一段穿ちあるいは薙石を積めることによってその造作を行っている。左壁では奥壁及び袖石との接合において二段目の壁石はそれぞれにまたがるようにブリッジ状に架構せられている。

袖石は現存腰石のみであるが、やや小ぶりの切石を縦位に据えている。袖石の間には樋石が置かれ、玄室、羨道を分けている。中央部巾30cm、高さ45cm、両側面はやや狭まい底面を除いて五面加工の長方形に仕上げられたものである。樋石面での袖部巾1.09m、左袖石25°、右袖石7°の内傾をみせ、上部は狭まり、上端巾73cmを測る。

ついで羨道部は、側壁がすべて取り除かれてその構造は不明である。わずかに樋石前面に

残存する床面敷石と地山面に残る腰石配置によるくぼみ等から、袖石より二石までの壁石の存在を推定することができるが、入口部の構造は不明である。

床面は玄室内は擾乱のため敷石の原位置に留めるものはない。墓塙底面は雑で凹凸が認められ、20~30cmほどの赤褐色粘土質土を突き固めるように敷き上面に敷石を配したものであろう。狭道は櫛石前面に敷石が残存しており、30×40cmほどの扁平な転石を並べ間隙に拳大の転石を充填している。

本石室使用石材は天井石は残存するものがなく不明であるが、すべて花崗岩を使用し、他の石材は混入していない。

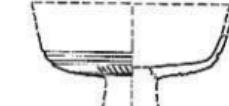
墓道は全掘することができなかったが発掘区内では石室主軸に延びており、このまま7mほど西南に延び自然斜面に出るものと推定される。狭道部構造が明らかでなく、狭道入口部と墓道の接合の仕方については不明である。また閉塞部施設も現存しない。

(4) 遺物出土状態

著しい擾乱のため玄室内からの出土は無い。櫛石前面敷石上より鉄鏃・刀子・馬具の一部の出土をみたが、完形で残るものはなく、いずれも原位置を留めたものとは考えられない。

馬具についても留め金具一点の出土である。須恵器は極めて少なく、壺胴部破片を含め数点を数えるのみである。いずれも狭道部あるいは墓道擾乱層中より採集されたものである。

(5) 出土遺物



第13図 第3号墳出土須恵器(4)

須恵器

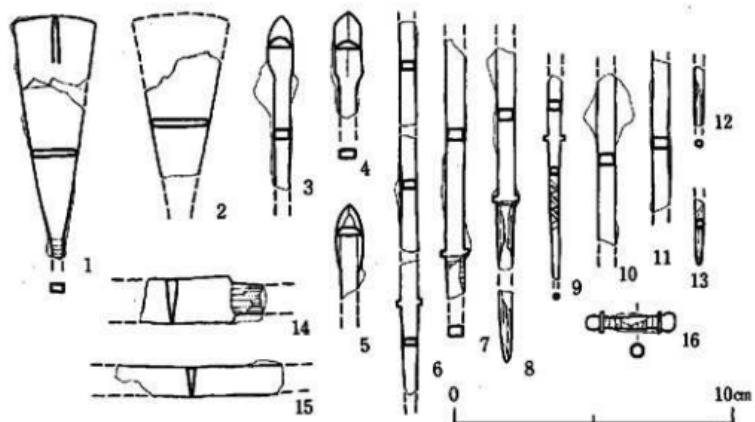
岡示した他に壺胴部および壺身底部の破片を検出したが原形を推定しうるものではない。壺身については底~体部にかけてヘラ割り調整の行なわれているものである。

高壺(第13図)壺上部、脚部を欠失する。推定口径12.5cm前後の無蓋高壺である。体部はゆるいカーブをとりつつ底部につづく。その境に二条の、また底部に二条に沈線を繞らし、間隙にはヘラ状器具による刻み目を施している。色調はねずみ色を呈し、胎土には小砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅緻な焼き上りである。体部は横ナデ、底部内面にはナデ調整が行なわれている。

武具

鐵鏃(第14図1~13)いずれも櫛石前面の床敷石よりの出土である。小片が多く完存するものはないが、形態から四種に分類することができる。

1類(1、2)円頭広根斧箭式である。1は刃巾3.0cm身長8.0cmを測る。身と茎との境は明瞭ではないが、境付近には木質の付着が残る。2は1よりもやや大形品であろうが、大部分を欠失しており、刃部は円形、方形のいずれともいえないが、一応1類に含めた。



第14図 第3号墳出土武具・工具・馬具実測図(分)

II類(3)片小瓜片丸造である。範被の延長部以下を欠くが棘状突起を持つものであろう。

III類(4)片鑄造である。闇の部分はゆるいカーブをとりつつ範被に接続するが、以下を失する。片鑄造範被鑄箭式に属する。

IV類(5)範被以下を失する。身はゆるいカーブで徐々に巾を減じ範被に接続し闇をつくる。片切刃造範被鑄箭式に属する。

6~11は1~5とは異なる個体のものである。12、13の個体関係は明らかにしない。

7~9、12、13の基には木質の付着を見る。9の基上面には施着装前に樹皮の巻き付けが行なわれている。

工具

刀子(第14図14、15)14は鋒、茎先端を失する。背は平造りで両闇をもつ。身巾16mm、身厚4mmである。15は身の一部でやや外反する。鋒方向は明らかでない。身巾10mm、身厚3mm、背は平造り。

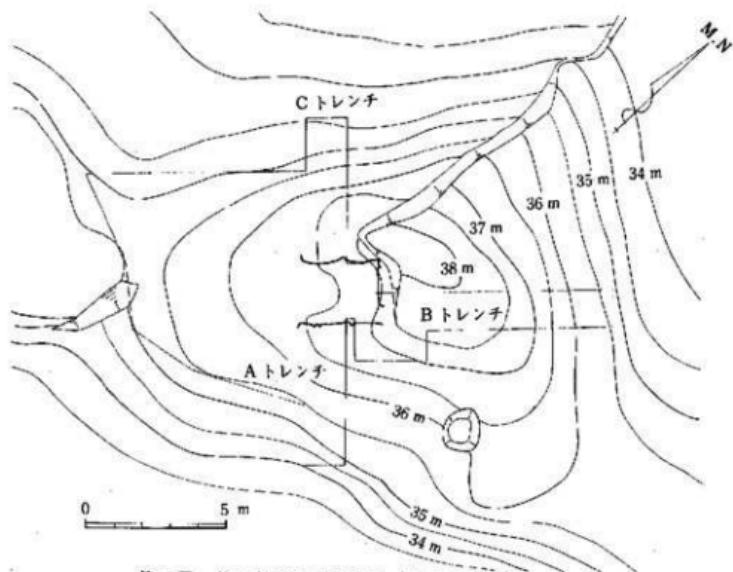
馬具

留金具(第14図16)一点のみの出土である。断面円形、径5mmである。両端は打ち延ばされ丸みをもつ。本質部との間に厚さ1mm程の押え金具が噛まされている。

(6) 小結

本墳は丘陵先端の平坦面の広がりをみせるところに築造せられた。その中央部よりもやや東側に偏したところに墓塙を穿ち石室をおさめ、墳丘封土は1.5~2mほどである。石室主

軸方向は南西にかたより南面する。墳丘および石室の破壊は著しく原形を推定するのは困難であるが、径10~12mほどの円または橢円の墳形と考えられる。石室は緻密な平面图形の企画がみられ、高麗尺の使用が考えられる。すなわち玄室巾6尺、長9尺、袖部巾3尺をとる。使用石材はすべて花崗岩であり、母岩転石のものを含みつつも大半のものは燧面の加工せられたものであるが、その加工度は母岩からの切り出しではなく、転石の使用面剥離による平坦面加工といった程度と推定される。葬道部の構造は明らかにしないが、軸石より接続するきわめて短小なものを推定させる。また本支群中唯一の墓道を付設するものである。著しい擾乱のため副葬品は少なく、ために造営年代は明確にしがたい。図示した須恵器無蓋方舟はⅤ期にあたるものであり、必ずしも造営当初の時期をしめすとはいえないが、おおむね6世紀後半に推定され、本墳の築造もそれに近い時期になされたと考えられる。



第15図 第4号墳墳丘測量図（縮尺1/200）

IV 第4号墳

(1) 位置と現状（第15図）

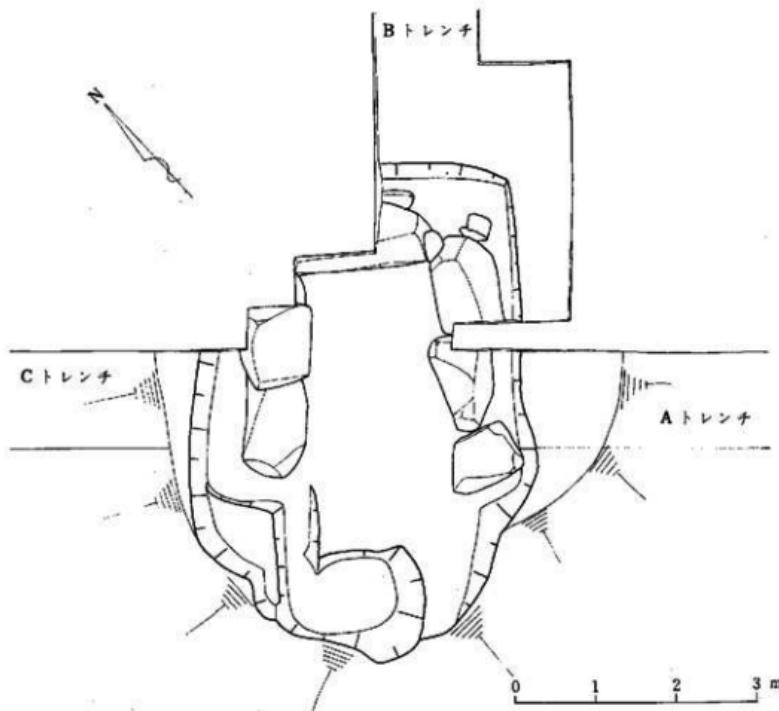
本墳は早苗田C支群の踏査時より一基古墳であることが判明していたものである。サナボリ山と称される油山から派生する低丘陵の頂部稜線上にあり、3号墳とは同一鞍部面に位置する。3号墳より西に約30m程のところにあり、鞍部平垣面が方向を変えるそのやや広まりをみせる位置に、平垣面巾を一杯に利用し墳丘を築造している。伐採後の観察では、墳丘中央部寄りから稜線の延びる西南方向に大きくえぐられた痕跡があり、玄室周壁が露出していた。鞍部斜面から推測して東西の墳丘も変形の著しいことが知られ、わずかに北側墳丘のみ残存する。墳頂は標高48.415mを測り、北側標より2.45m前後の墳丘高を推定しうる。

調査は玄室内擾乱層の排土から取りかかり、墳丘断面観察のためにA・Cトレンチ、ついでBトレンチを設定した。石室内は床面下まで擾乱がおよび、遺物の検出はなかった。玄室周壁は残存するが、袖石及び狭道部は原形を失なっている。また墳丘規模についても、Bトレンチで裾部を確認したが、A・Cトレンチでは一部を残して封土は流亡しており、全容を知りえなかつた。

(2) 外部施設（第10・16図）

Bトレンチにおいて墳丘裾部を検出したのみである。すなわち若干の凹凸をもつ地山面は、墓塚上端より4.50mのところで地山面東の急な斜面に移行するが、その変更線より30cm程内側に封土裾部が認められ、地山面の低い窪みには墳丘築造前の地ならしのために、地山バイラン土を主体に埋土を行ない（第10図参照）、平坦に整えている。VI層中には縞模様にVII・V層が混在し、盛土傾斜を示している。封土盛り上げ後、墳丘築造の最終過程としての裾部調整の際の削りが行なわれたのであろうか、X層の端は墳丘面で中途に切れている。現存封土高は墓塚底面より2.3m、地山面より1mを測るが、天井部架構及びその上面の覆土は、現高よりも少なく見積っても更に0.5m以上の盛土を想定しなければならないであろう。さて墳丘規模はわずかにBトレンチの所見の裾から墓塚前面までは10.40mを測り、このクラスの横穴式石室墳ではやや小形の感を否めない。狭道部入口部に若干の造作を推定すれば2~3mの延長は充分考えられ、主軸方向で12~13m、東西ではそれよりもいくらか狭まった規模をもつものと考えられ、墳形は立地地形に大きく規定された不整形な円形を推定して大過あるまい。

墓塚はすべて地山面から掘り込まれている。地山全面を露出しえなかつたので明確なプランを知りうることはできなかつたが、石室プランに相似形、すなわち長方形を呈しており、袖石のところで丸くカーブしつつ屈折し、袖石より1.5mのところで左右より延びる上端がつながり、全体にはピット状を呈する。主軸方向で6.25m、A・Cトレンチ間でその巾3.98

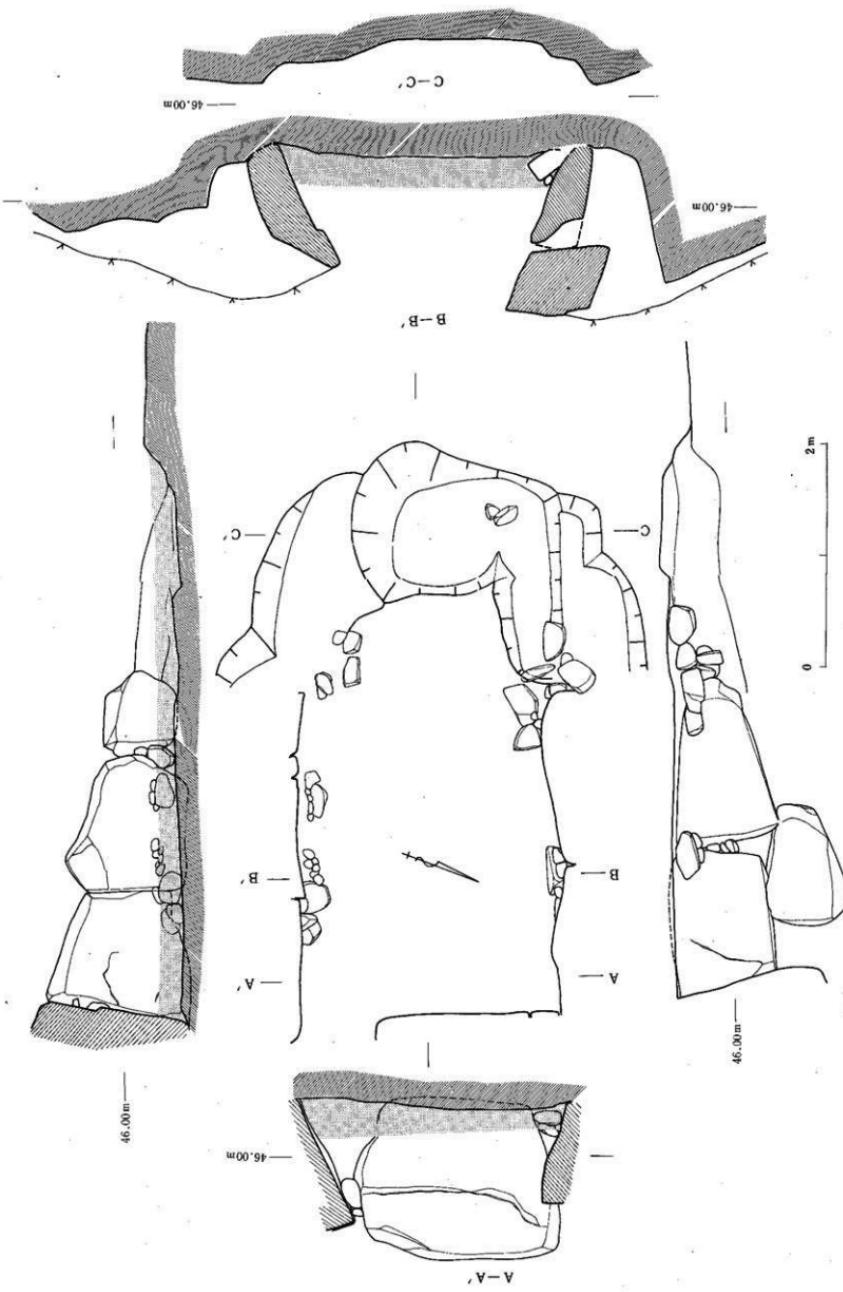


第16図 第4号墳墓塗実測図（縮尺1/70）

mを測る。凹のある地山面に穿っているためAトレンチ 0.4m、Bトレンチ 1.3m、Cトレンチ1.15mの深さをもつ。底面はほぼ水平位にあり、石室開口方向にややゆるい上り傾斜をもつ。墓塗は比較的広めに掘り込まれ石室周縁腰石とは30~40cm程の間隙を有するが、その間には掘り込んだ地山バイラン土をもって充填している。腰石はすべて横位に据えられ、裏面接合部には青灰色粘土を埋め込んでいる。二段目以上は横積みであり、封土と交互にかみ合いつつ構築されている。

(3) 内部構造(第17図)

主体部は南西に開口する横穴式石室であり、主軸はS 43° Wをしめす。石室の破壊状況は著しく、玄室内周壁は一部二段を残す他はすべて腰石のみであり、また袖石も残存せず羨道



第17图 第4号石室实测图 (比例尺1/35)

には一石も無く抜き去られている。ためにその形式を袖石を有する单室あるいは複室等のプランとも決めがたいが、墓址のプラン及び葬道下の地山掘り込み等から、一応両袖型横穴式石室として誤りはないと考える。とすれば問題は袖石の位置であり玄室プランの構成である。左右側壁の長さはそれぞれ2.80m、2.85mを測り、その先端は相対し位置する。また安定した壁体を求めるために用いられた栗石と思われる転石が、側壁の先端部から玄室内側にかけて地山面にいく込むように検出されたことを勘案すれば、袖石は現存する側壁に接合する位置、すなわち奥壁より2.8m前後のところに配されたものと考えられる。したがって玄室のデータは、奥巾2.31m、奥壁より1.40mのところで2.30m、前巾2.17mである。前述の側壁長及び袖石の位置を勘案すれば、やや奥巾の広がるものシメトリカルな直線を呈する壁線をもつ長方形プランの玄室を想定することができよう。

奥壁は腰石一枚の残存であるが、壁面及び上面を平坦に加工した 1.30×1.80 mの大ぶりの花崗岩を10°の転びをもたせ内傾して配置している。奥壁に接合する側壁は左右壁とも挟み込むように据え、壁体には転びをもたせ、左壁12°、右壁にいたっては24°の内傾をしめしており、また直接奥壁側面に接合せず人頭大の転石を噛ませている。ためにこの間に70cm程の空隙が生じており、構築当初は壁石を組み込んでいたと考えられるが、現状では抜きとられ、ボッカリ口を開けている。一般的に壁面に充填される積み石は各方向からの重力によって微動だにしないのであるが、かかる状態に抜きとられることは、この間に充填された壁石が、奥壁に側壁接合した後に生じた間際に挿入する程度のものであったことをしめしている。

かような玄室奥巾の設定は単に奥壁に使用された石材巾に左右されることのない一定の玄室構成の企画性、すなわち尺度の使用を推定させることの根拠となりうる。ちなみに玄室の測定値長：巾は2.85：2.31cmであり、比率は1：1.23である。

側壁については若干前述したが、左右とも加工せられた花崗岩で構成され、その配置に際しては墓址底面を更に一段穿ちあるいは栗石を積み込むことによって安定を計り、更に腰石上面のレベルを一定に求めている。壁面は一石一石を見ればそれぞれ凹凸をもっているが、壁面の突出部を結ぶ線を求めるとき略はその線上に乗るか平行し、まさしく主軸方向線に平行している。

袖石についてはほぼその位置を推定したが、葬道部構成は壁石がすべて失われていることから全く不明である。としても地山に掘り込まれた墓址が残存し、葬道が付設されていたことは、袖石を境にして内側に巾を狭める状態をしめすことからも確実であろう。

しかしその長さも1～2m程と短かいこと以上、入口部の構造はわからない。

床面は玄室、葬道をもすべて破壊され、現位置を留めるところはないが、墓址底面に8～10cm程赤褐色粘土質土が突き固めたように硬く敷かれ、上面に転石が配されていたと考えられる。側壁の隅に寄せられていた数石と思われる転石はほとんど花崗岩であったが、数個の

河原石転石が混入していた。

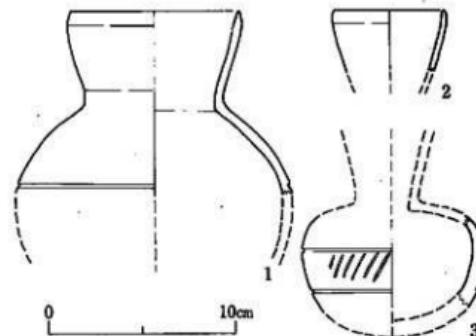
(4) 遺物出土状態

石室内は床面敷石下までの著しい擾乱によって原位置を留める遺物は検出されなかった。擾乱層よりわずかに須恵器大甕胴部の破片数点を採集したのみである。また石室前面の拡張区においても地山削平がひどく、須恵器片を若干採集できただけで、各トレーニチからの出土遺物は皆無である。

(5) 出土遺物

須恵器(第18図)

広口壺(1) 脇下部を欠失する。口径 9.2cm、胴径は沈線のところで 14.2cm を測る。肩部よりゆるいカーブをとりながら折れまがる口縁部は、やや内湾しつつ外反する。先端は横ナデによってやや尖りぎみにおさめられる。胴部内外面も横ナデ調整である。胴中位に沈



第18図 第4号墳出土須恵器実測図(1/3)

線が繞るが、以下を失っているので更に数条付せられたか不明である。灰色を呈し焼成は良好、堅穂な焼きあがりをみせている。

平瓶(2) 口縁部のみである。口径 6.1cm を測り極めてうすでの仕上げである。内湾ぎみに外反する口縁部は内外面ともに横ナデ調整が施され、先端は丸みにおさめられる。色調はねずみ色、胎土に少砂粒を含むが、焼成は良好である。

甕(3) 脇部のみである。最大径 9.8cm、中位及びやや下位に 2 条の沈線を繞らし、その間はクシ状器具による列点文で充填する。灰色を呈するが、器面に黒色自然釉の付着をみると、胎土は細粒を含んでおり、焼成は堅穂である。

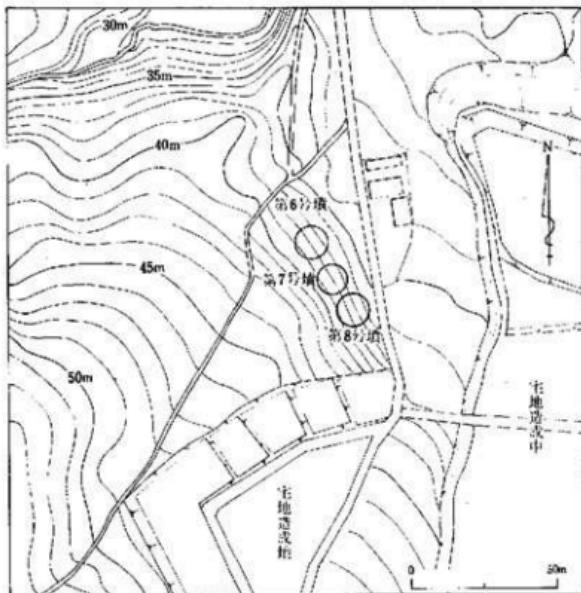
(6) 小結

3号墳と同一稜線上に築造され、構造・規模において類似する横穴式両袖型石室を内部主体にもつ。墳丘・石室の破壊は築造当初の規模を推定するには余りにも大であるが、あえて類推すれば、3号墳同様直径 10~12m 前後の円墳を考えることができよう。石室は墓塚を穿ち、その中におさめられる。墳丘封土盛土は 1.5~2 m 前後を推定されるが、立地の関係上その大きさは封土部以上の規模を見る者の目に訴えよう。石室の構架にあたっては、高麗尺使用が推定され、玄室巾 6 尺、長 8 尺の長方形プランをとるものと思われる。使用石材は腰石に

は大ぶりの転石が用いられ、壁面および上面を平坦に整える加工が認められる。石室裏側にあたる部分にはその痕跡はない。羨道部入口に接続する墓道は認められない。副葬遺物も大半を失ない被葬者数、配置については知りえない。造営年代も明確にしえないが、出土した須恵器はⅢB～Ⅳ期にあたり3号墳とほぼ同時期の6世紀後半代の造営と推定されよう。

V 第5号墳

片江6号墳～8号墳の立地する緩傾斜面には当初4基の古墳があると想定されていた。6号墳～8号墳はいずれも石室中央部が陥没した状態で、墳丘も確認できたが、6号墳の西北部に近接して花崗岩の一部が露出しており、これを第5号墳として調査の対象とした。6号墳の墳丘確認作業にともないBトレンチとⅢ区の調査により、6号墳をめぐる馬蹄状溝上り西側（傾斜の高いところ）には造構は確認されず、地山の中に大小の花崗岩や礫が含まれている状態であった。これらの石材は6号墳～8号墳の石室構築及び墳丘裾部をめぐる列石の石材として利用されたものであると考えられる。従って第5号墳とした地点は自然地形で古墳ではなかったが、資料整理等の都合により第5号墳の呼称はそのまま残した。



第19図 第6号～第8号墳（鳥越B支群）地形図（縮尺1/2000）

VI 第6号墳

(1) 位置と現状（第20図）

6・7・8号

墳は標高37~43

mの西傾斜面の

ちょうど傾斜変

更線に沿いつつ

並列して築造さ

れている。6号

墳はその北端に

位置し、7号墳

と接する。

その巾約2mほ

どである。地形

測量では、南北

10.2m、東西11

.3m 鞍形に墳丘

西側のふくらん

だ橢円の横形を

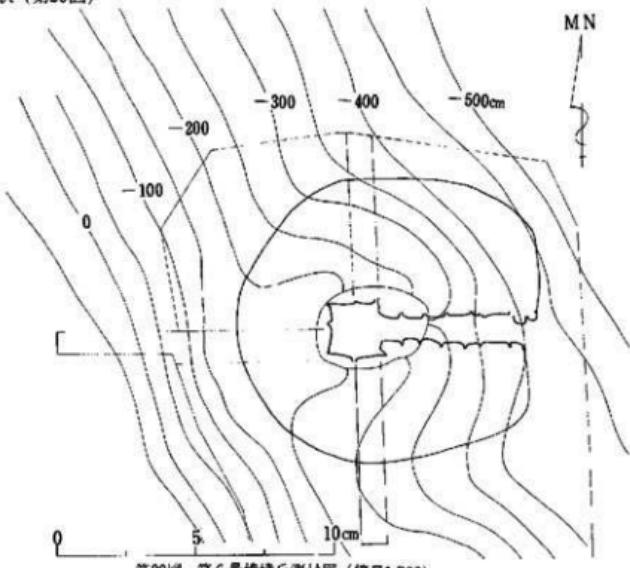
示すことが知ら

れた。墳丘封土は、いわゆる山寄せと呼ばれるものであり、傾斜面にはりつくように盛り上げられている。斜面の高い側縁部にはほぼ半円するようにならみが認められるが東半部ではない。墳丘は多少の削平を考えられ、現存する墳丘高は東側縁より2.5mを測る。

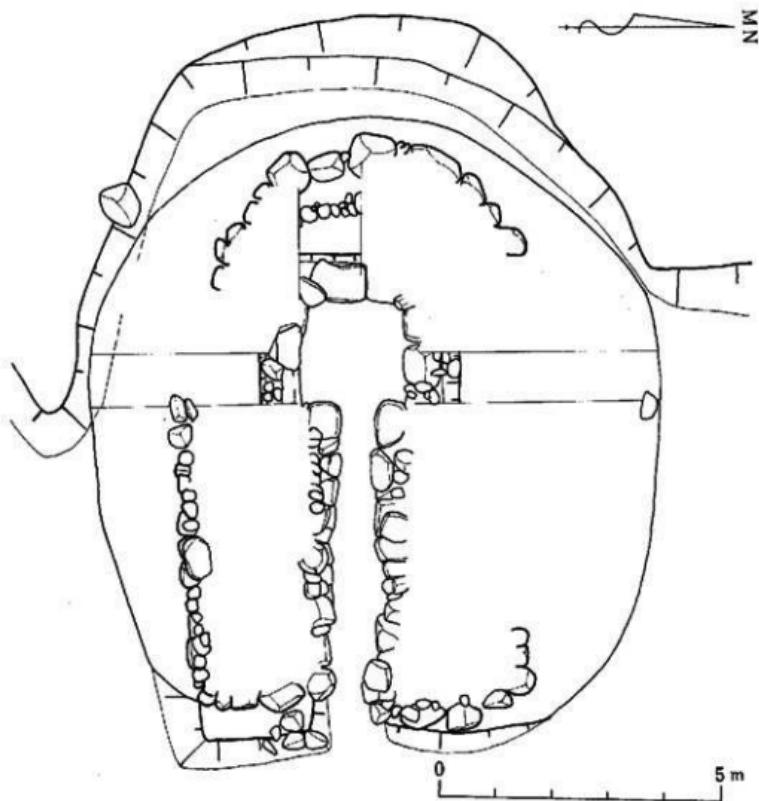
調査は盜掘跡と考えられる窪み内の清掃から着手し、ついで石室主軸の延長線上にBトレンチ、玄室中央部で主軸に直交するA-Cトレンチを設定し、墳丘の各断面、石室墓底、溝の有無等について追求した。更に、主軸-Aトレンチ間をI区、A-Bトレンチ間をII区、B-Cトレンチ間をIII区、Cトレンチ-主軸間をIV区に分け、残存する墳丘面を露出させることによって墳丘プランを求めた。斜面側には地山を削り出した溝状造構が検出されたので裾部に合わせて極力全掘することにした。

(2) 外部施設

外部施設には主体部を覆いつむ盛土封土、墳丘築造過程に配された列石、及び墳丘裾部・中段位を繞る列石がある。また墳丘築造前、古墳構築過程からすれば、第一段階として墳丘地割及び内部主体を埋置する墓壙の掘鑿等の造作がなされるが、これらの諸要素も



第20図 第6号墳墳丘測量図 (縮尺1/200)



第21図 第6号墳墳丘櫛・列石及び馬蹄状溝関係図(縮尺1/100)

一括して外部施設に含め取り扱うこととする。

a. 馬蹄状溝 (第21図)

古墳築造過程の第一工程は、立地の選択に始まり、位置の決定によって立地条件に則した地製作が行なわれる。C支群の如く斜面に構築される場合には、斜面削り出しによる整地、墳形表出が行なわれる。この造作は、斜面側に特に顕著に認められ、その形状は、墳丘全体を囲繞せず、斜面の高い側にのみ馬蹄形を呈しめぐっている。かかる築造工程は、一見無原則の如く現象しているが、削り出された面の大きさは、そのまま墳丘規模を規定する相乗的な関係にあること、またこの工程に前後して右室墓塚の配置を勘案せねばならないこと等か

ら、すでにこれらの作業に一定の企画が行なわれたことを想定しうるかもしれない。

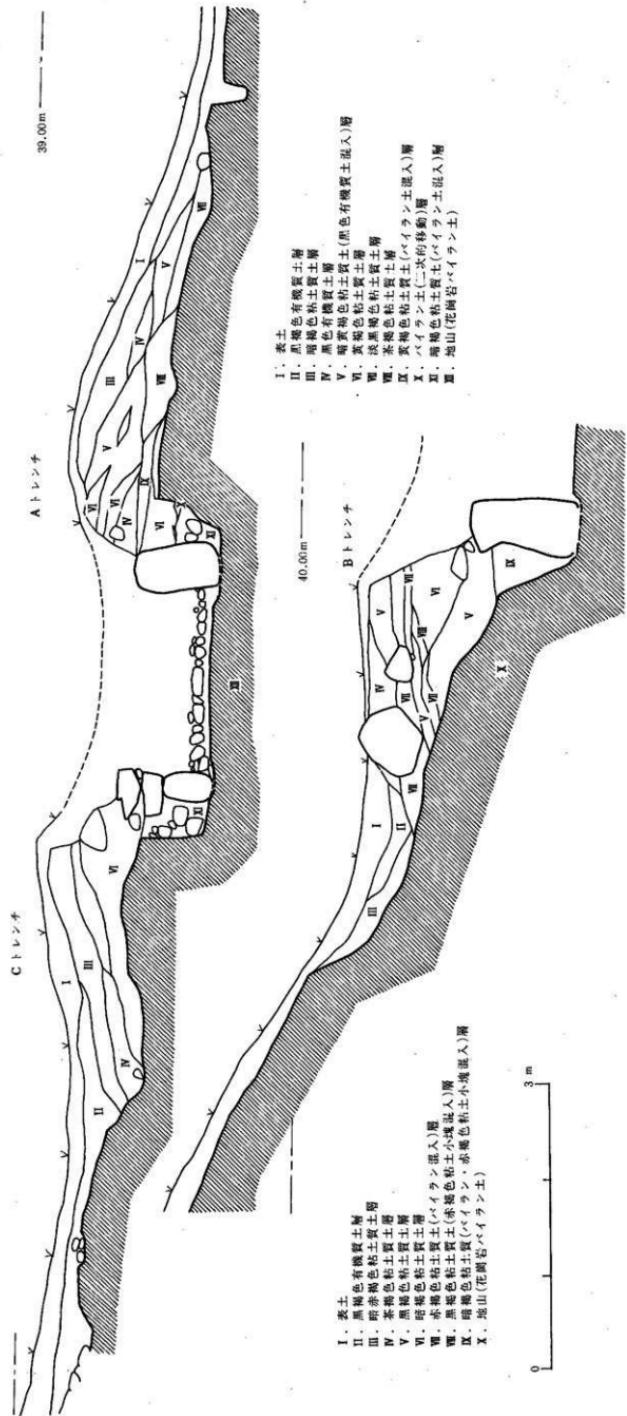
本墳は石室主軸方向を斜面にはほぼ直角にとっており、馬蹄状溝は玄室裏側の墳丘港を半円している。最大巾10.0mを有し、玄室奥壁面の中心点よりの測定値は、北、東西方向ともに5.0mである。としてもプランは5m半径の正円を描いてはいないが、かかる位置に礎を配する事は極めて意識的な配慮が講じられたことを推定させる。馬蹄状溝と墳丘封土との関係についてみると、Bトレンチでは $\frac{47}{100}$ ほどの勾配をもつ地山斜面に奥壁面より5.0~2.90mの間をゆるいカーブをとりつつ40cmほどの深さに削っている。断面は、正確な意味での溝状は示さず、むしろテラス状を呈している。Cトレンチでは7号墳よりからゆるい傾斜をもつ地山面に巾1.62m、深さ30cmの浅皿状の溝が認められる。溝のレベルは水平位に整えられたものでなく、あくまでも斜面勾配に沿いつつ削り出されたものであり、傾斜変更線付近で溝端は八の字に開き自然斜面に流れている。B、Cトレンチの所見から馬蹄状溝は、傾斜勾配の強い所ではテラス状に、また弱い所においては浅皿状に掘り込まれているのであるが、墳丘封土の盛り上げに際して、掘部は溝のほとんど全体（Cトレンチ）あるいは一部（Bトレンチ）を埋めており、溝としての性格を取て強調することはできない。

b. 墳丘および墓塗（第22図）

墓塗の設定及び掘鑿は墳丘築造前であり、墳丘封土の盛り上げ工程とは異なるが、記述の都合上同一項で扱う。

前述した如く、本墳においては封土を削いでの墓塗の全面露出を行っていないために、全容は知りえず、各トレンチの断面及び地山面での観察に限られる。墓塗は地山面（墳丘築造時表上を含む）から掘り込まれている。玄室中央、横断面での墓塗巾は3.55mであり、深さはAトレンチで68cm、Bトレンチ80cm、Cトレンチ65cmをそれぞれ測るが、底面はいずれもほぼ水平位のレベルに整えられている。墓塗玄室部底面は周壁に据えるにあたって更に一段深く寧たれ、低い台状に現象している。玄室右壁面から墓塗上端まで92cm、左壁では69cmであり、側壁腰石の位置は必ずしも墓塗プランに一致してはいない。腰石は横位に据えられるが以上の壁体は横積みである。腰石上面が墓塗上端と大略同レベル位にあり、その間隙には地山バイラン土を混えた黄褐色粘土質土で充填され、その中には人頭大の転石が相当数詰め込まれている。また腰石接石面には青灰色粘土で目張りを施す部分も観察された。しかしながら、かかる造作は墓塗内部だけであり、横積みの壁体の裏面には認められない。

墳丘封土盛り上げは普通の状態である。腰石上の壁体架構と交互に織りかえし行なわれており、各トレンチ断面に見られる石室に向かっての層序傾斜がその過程を示している。奥壁裏面も同様の層序を示すが、地山勾配の関係上、A・Cトレンチに見られるほど傾斜せず、水平位に近い。現存する封土高は墓塗底面より2.30mであるが、天井部架構を推定すれば、大略1mほどプラスした高さを復原でき、当初は墳丘北側掘より2mほどの盛土封土を



有する墳丘を推定しえよう。としても、斜面は削り出しによって低まりを見せていることから、その高さは盛土を上まわる視覚に訴える事が可能であったと思われる。

C. 墳丘裾と裾部を繞る列石（第21図）

一般的に墳丘裾を確認する作業は草石あるいは溝が繞ることがない限り流れた墳丘上砂と残存する墳丘面との区別が容易でなく、ほとんど不可能に近いが、幸い本墳においては裾部に厚く黒色土の地盤が残っており、また列石の繞ることから墳丘プランの全容を知りえた。

墳丘は東西（石室主軸方向）10.5m、南北10.0mを測る。A・Cトレンチより西ではほぼ半円を描くが、東側はやや直線様にすばまりながら、コーナーは隅丸を帯び前面列石に続き不整形な円形プランを示す。墓塚及び石室主軸は墳丘プランの中心線上ではなくやや北寄りに偏している。列石は墳丘全体を囲繞せず、前面及び裏面、更に墳丘南側面中段と大略三ヶ所に配置されている。これら列石は同一時に配されたものではなく墳丘築造の過程とかみあいつつ行なわれたものである。

石室の開口する前面裾部は狭道入口部先端に位置する駆石が、それぞれ南北に延びる列石に接続している。しかし駆石がシムストリーの位置になく左壁は右壁よりも50cmほど短かい。ために前面列石は同一直線上になく互い違いに配せられている。南北とも墳丘封土は列石が土留めの役を担いその内側が盛土である。使用された転石は80×60cmを最大とするが、大ぶりの石を無造作に接合させているだけで、根石上に二段の石組みは現存しないし、当初より積まれなかつたと推定できる。右壁より北に延びる列石は地山削り出し上端面に並列し墳丘裾を形づくるが、2.90mの所で直角に西に折れ封土中に埋没する。南側では削り出しテラス面は壇状に無造作のまま残され内側1mの所に列石が配列され1.95mの所で北側同様直角に折れ西に延びている。この部分の列石は前面列石がいづれも地面上に据えられたものに対し、墳丘中位に直線状に配置されたもので墳丘南側裾の傾斜に平行し列石長4.60mを測る。小ぶりの転石を横積みにした二段積みの石垣状を呈し、黒色土の堆積状態から当初よりこの列石は、墳丘面に露出していたことが知られる。また列石に沿って裾部付近から大甕、杯等の遺物の出土をみており、その数は相当量にのぼっている。

墳丘西侧裾部は、馬蹄状溝を埋めつつほぼ半円を呈する。ちょうど前面と対比する位置に列石の配置がある。またBトレンチ発掘の際この列石より30cm前後墳丘内に人頭大の転石を並べるように置いた石列が直線状に検出された。断面の觀察からすれば、裾部列石と同一の土層上に置かれていることが知られた。したがって内側列石がまづ配置され、それを標式として一定の封土が盛られ（第22図 Bトレンチ裾層）、ついで裾部を形づくるⅣ層を盛り上げた後に裾部列石が据えられ、更に列石そのものを指標としつつ墳丘面の最上層（Ⅳ層）を積み上げたものと考えられる。要約すれば前面、裏面の列石は相対する位置にあり、墳丘盛土の七留め的役割をもつ。南側中段位列石は裾部より1m前後内側にはぼ裾と平行するように

配され、墳丘封土中に没しておらず、封土築造からすれば同様土留めの役割りをもつがいずれにしても、ただ単に土留めを目的とした配置にその性格のすべてを含めてしまうことはできまい。

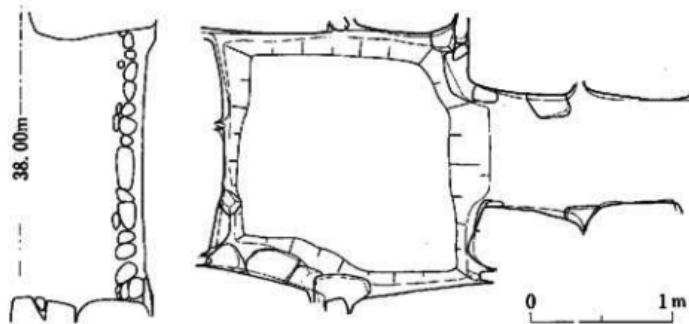
(3) 内部構造（第23図～第25図）

死屍を葬むる内部主体は、ほぼ東に開口する比較的規模の小さい両袖型横穴式石室である。

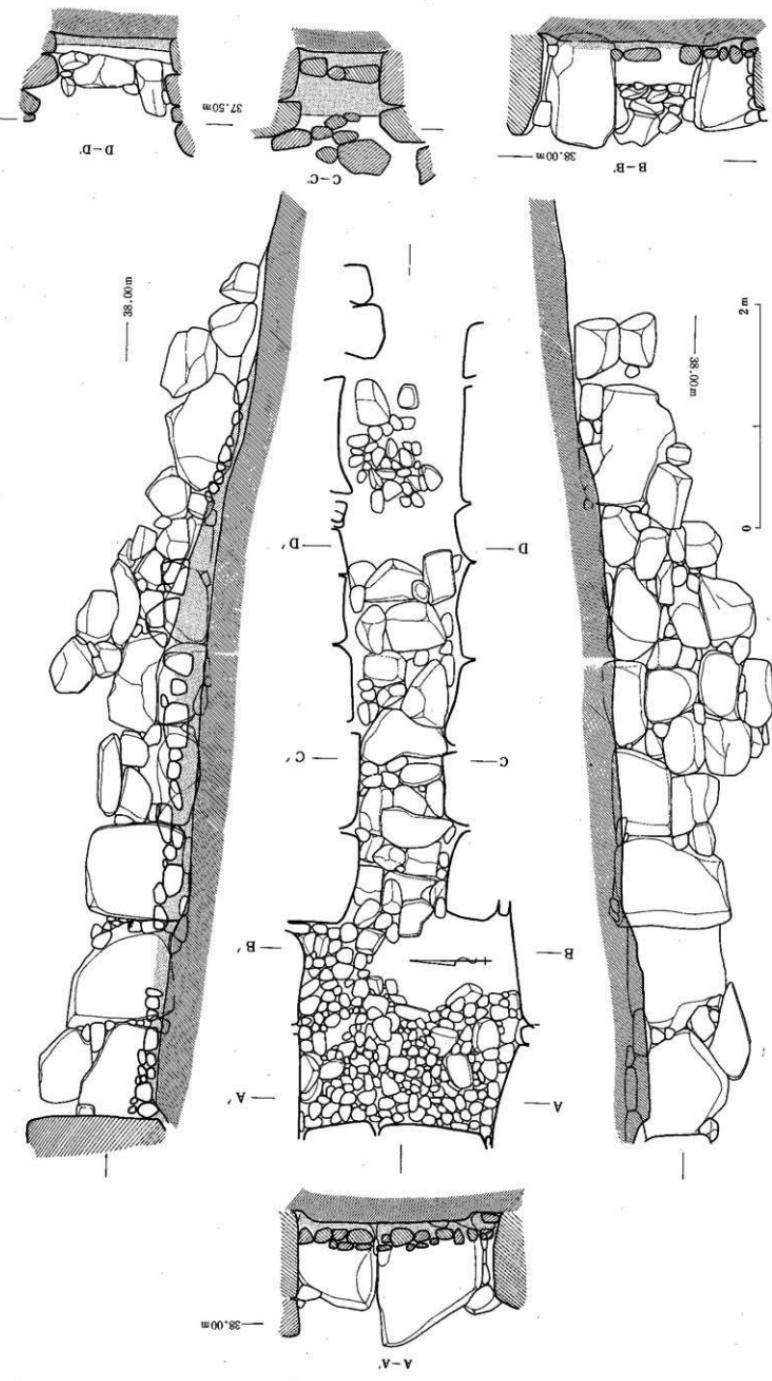
石室主軸方向は南側墳丘の中段位列石と大略平行し、S 88°W を測る。石室全長7.42m（右側壁）、玄室長は主軸で1.75mであり、その比、約1：3という極めて狭長な狭道部を付設している。石室の破壊状況は遺物目的とした盗掘のみならず石材をも抜き取り、天井石はすべて取り除かれている（狭道閉塞部上に2m近い細長い花崗岩が落ち込んでいたが、その形状から天井部の一部を構成した用材と考えられた）。石室を構成する石材は油山を形づくる花崗岩の山石転石を各部にあてており、意識的に加工せられた用材は認められない。

玄室は袖部に若干のずれがあり、右側壁で1.78m、左側壁で1.83mの長さをもつ。巾は奥壁部で1.66m、奥壁より0.83mの所で1.93mと最大値をとり、前巾1.71m、奥壁巾が狭くなるがほぼ正方形プランを示している。

奥壁は腰石のみ現存するが、左右二石で構成される。それぞれ0.9×1.1mほどの転石が横位に配置され、接合面は玄室内部に張りだし壁線は弓状のカーブをもつ。腰石配置に際しては幕庇底面を更に一段穿ち棟石を充填しつつ据えられている。左右側壁は同様の壁面構成を



第23図 第6号墳玄室床面下構造(縮尺1/40)



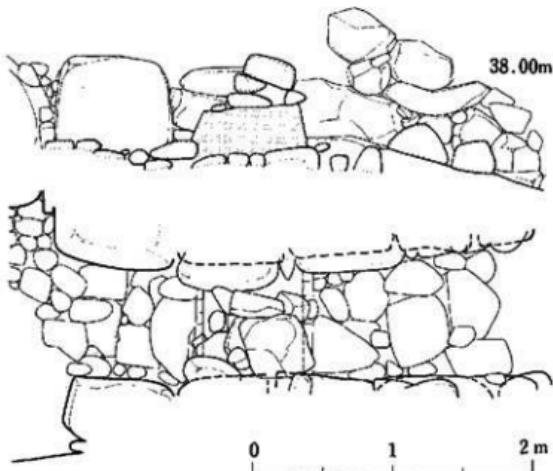
第24图 第5号块石层剖面图 (比例尺1:35)

示す。腰石は奥壁様の大ぶりの転石を横位に据え、それぞれ二石づつ配され間隙には、小ぶりの転石を充填している。右壁面は腰石を直線に描えており、主軸方向に一致するが、左壁面は腰石の接合面が外側に張りだし、くの字状を呈するゆがみをもつ。奥壁との接合においては側壁はそれぞれ挟み込むようにし、奥壁腰石との間にはブリッジ状に側壁一段目を組み込んでいる。床面は左袖石周辺が擾乱を受けていたほかは原形を留めている。墓塚底面上に10cmの間、地山バイラン土と赤褐色粘土質土を混合したものをたたきつめるように敷き、その上面に20×30cmほどの転石を並べている。とりわけ中央部より奥には拳大の転石を更に上面に敷きつめ、一段高くしつらえている。前述した如く玄室周壁腰石はすべてが墓塚底面を一段深く穿ち据えられている（第23図参照）。かかる造作は腰石の安定を図るのみでなく腰石上面レベルを描える配慮も勘案されている。そのプランは玄室に相似形を呈するが、腰石一石一石づつの形にあわせて掘り込まれたものではない。また袖石部で20cmほどの段になり玄室内はあたかも低い基段を付した如き様相をみせており、通常見うけられる腰石ごとの掘り込みとは若干異なるものであろう。

袖石は周壁同様未加工転石を縦位に据え配されている。そのため巾は一定しておらず突出した面で、75cm。

玄室側の腰角間では100cmを測り、正確にシンメトリーの位置はない。

羨道部は入口部の壁体構築が粗雑であり左右壁面は長さを異にしている。右壁長5.71m、左壁では5.15mを測り50cmほどの違いがあり、入口部より前面墻丘幅を繰る列石にもその長さの違いが現象



第25図 第6号墳出塞部実測図(縮尺1/40)

している。壁体構築は玄室に比して小ぶりの石材を用いており壁面も粗雑であるが、壁面の構成については左右壁はおおむねシンメトリカルである。袖より3.80mの所まで4石の腰石を配し、その先には他よりも一まわり大ぶりの転石を底面20cmばかり下げ相対する位置に配

置している。この腰石より先は左壁一石、右壁二石で入口部に至るが、これらの根石はいつも腰石には接合せず若干の間隙を生じている。この間には詰石を充填することなく、壁体は不安定であり、右壁の入口部は内側に壁線よりも40cmばかり入り込んでおり、原位置を保つものではないようである。

左壁は保存状態が良く現存床面より1.2mまで残し、4段の石組が認められ、壁面の構成は、左右とも上下方向に目を通った、いわゆる通目積みの傾向が顕著である。床面は袖より3.15mのところまで敷石をもって整えている。玄室と境をなす櫛あるいは仕切石等の設備はみられず玄室床面とほぼ水平位を保ち先端まで続く。しかし床面敷石に用いられた転石は玄室が小石使用に対し狭道部は40×50cm前後の転石を間隙なく並べ、ちょうど、袖石間に形の整った転石を二石配列し玄室床面と区切っており、その前面までは奥壁より2.16cmを測る。敷石は地山上に直接配されたものではなく、玄室同様20~30cmほどの埋土を行いその上面に置かれている。敷石先端部は60×30cmの転石を横に据え、前面床のレベルに30cmの段をつくりあげ上り棚状を呈している。

閉塞部は狭長な狭道の奥寄り、袖から0.95~1.75mの間に残存し(第25図)、現存高は床面より68cmほどである。床面上より石を積み上げたものではなく、まず左右壁間に厚さ30cmにわたって黒褐色粘土を縦断面台形に盛り上げ、その上に30×40cm前後の転石を積むことによってその用をはたさせている。石組みの状態からしてさほどどの高さの原形を考えることは難かしく、天井石との間には若干の空隙をみざるをえないであろう。とまれ、床面上から石を組み上げず、間に土砂を埋ませる造作は最終閉塞部構築にあたって簡略に済ませた結果と解され、かかる造作に特別な意味を考え合わせる必要はないであろう。

(4) 遺物出土状態(図版10)

石室内擾乱は床面敷石上まで及んでおり、玄室内副葬遺物の大半は既に失なわれている。幸い右袖石周辺の狭い範囲から裝身具・工具・武具・容器の出土があり、副葬品の性格の一部を知りえた。そこからは須恵器环蓋・身(第26図15・19~21)が重なるように、また上師器蓋(第28図-3)は口縁を下にして出土した。裝身具玉類は20×30cmの範囲に出土したことから、当初の位置をかなり良くしめしていると考えられる。須恵器は型式的に新しいもので裝身具玉類を含めてこの範囲より出土した各種遺物は追葬時のものかと思われる。また玄室床敷石中より耳環の出土が4点あるが、対になるものも50cm以上も飛び離れており、遺体の配置・人數については知りえない。玄室擾乱層中には須恵器・土師器の破片を認めた。

狭道閉塞部前面には黒色有機質上の堆積がみられ、その上より条切底をもつ土師器环(第28図15・16)が、またその中よりは数点の須恵器环片が出土した。

墳丘西南隅の列石下方には厚い黑色土の堆積があるが、この中より須恵器・土師器が多数混在して出土した。かかる現象は狭道人口部から西南隅にいたる列石周辺のみに認められ、他

の部分にはない。また墳丘南側中段列石の横には須恵器大型が折り重なるように出土し(図版10-2)、自然的な壊れかたよりもむしろ意識的な破片を推定できよう。墳丘各トレンチからは封土盛土中に須恵器の破片が出上しておらず、細片であるため詳細は知りえないが、おおむね墳丘裾黒色土中より出土した最も古い様相をもつ須恵器と同時期のものと考えられる。

(5) 出土遺物

出土した遺物を列記するところのとおりである。(なお遺物名後の括弧内のナンバーは石室内部より出土したものと示す。なお第26図30、第28図1、2、15、16は閉塞部前面から出土したもので、その他は石室外の出土遺物である。)

容器	須恵器(第26図-15、19~21、26、27、)
	上師器(第28図-3、5、7、)
武具	鉄 錐(第29図-2、3)
工具	刀 子(第29図-1)
装身具	耳 環(1~4) 管 玉(第30図-6、7) 丸 玉(第30図-8~11) 切子玉(第30図-5) 壱 玉(第30図-10)
須恵器	(第26図・第27図)

坏蓋 I類(1) 口縁部のみの小破片である。復原口径15.5cm、口縁部は端より2.3cmのところに棱線が入り外反し、天井部との境を形づくる。口唇部は外方に引き延ばされ突きである。口縁内外面は横ナデ調整。色調淡青灰色であり、焼成は充分である。

IIa類(4、5) 口縁外面8~10mmの高さのところに棱をもち口縁部を形づくる。天井部まで凹凸をもちらがらも全体的に移行はなめらかである。天井部はヘラ切り離し後のヘラ調整を行なっている。底部内面はナデ調整が、口縁部内外面は横ナデ調整が施される。口径13.2~12.5cm、器高3.7~3.5cmを測る。4は灰褐色で焼成は不充分、5はねずみ色を呈し焼成は充分である。胎土には小砂粒を含む。なお4は天井部にヘラ記号をもつ。

IIb類(14、16、17) 口径10.8~11.4cm、器高3.5~4.4cmを測る。器面全体に凹凸をもち塊をふせた如き形を示す。天井部はヘラ調整が行なわれているが体部との境は明瞭でない。口縁部と体部はゆるい棱で区別される程度で、口縁部はやや外反しつつ直立する。その高さ10~14mmであり、16の口唇部は内側がそがれたように先端を尖らせている。口縁部は横ナデ調整が行なわれ、16を除いて先端は丸みを帯びおさめられる。底部はヘラ切り離しのまま本調整(14、16)と、ヘラ調整の加えられたもの(17)がある。底部内面にはナデ、口縁部内外面には横ナデ調整が行なわれる。14、17は灰色を呈し焼成充分であるが、16は灰褐色を示し甘い焼き上がりである。胎土はいずれも小砂粒を含む。17は天井部にヘラ記号をもつ。

IIc類(15、18、19) 体部と天井部、口縁部の境にそれぞれ段をもつことが特徴である。口縁部は1.7~1.5cmの高さに棱をつくり、直立する(15、18)ものと外反する(19)もの

がある。19は体部を示す部分はわずかで、器高のほぼ1/4ぐらいのところに境をつくり天井部に移行する。天井部はすべて丁寧なヘラ整形によって丸みを呈する。口縁部内外部は横ナデ、天井部内面にはナデ調整が施される。口径 9.8~11.0cm、器高 3.1~3.6cm である。色調は灰色であり、焼成は良好、堅緻な焼き上がりである。胎土に砂粒および小石を多く含み、天井部ヘラ調整によって小石が器面に表出しザラザラした感じを与えている。

II d 類 (20) II a 類に近いが天井部はヘラ切り離し後未調整で平坦面をなす。口径 9.9cm と小さいが器高は 3.4cm を測る。低い口縁部は外反し横ナデ調整によって先端はやや尖りぎみにおさめられる。色調は灰色であり器面には黒色の自然釉の付着をみる。胎土は小砂粒、小石を含む。天井部にはヘラ記号をもつが、环身 21 と同じであり、自然釉の付着から同一窯の製作と考えられる。

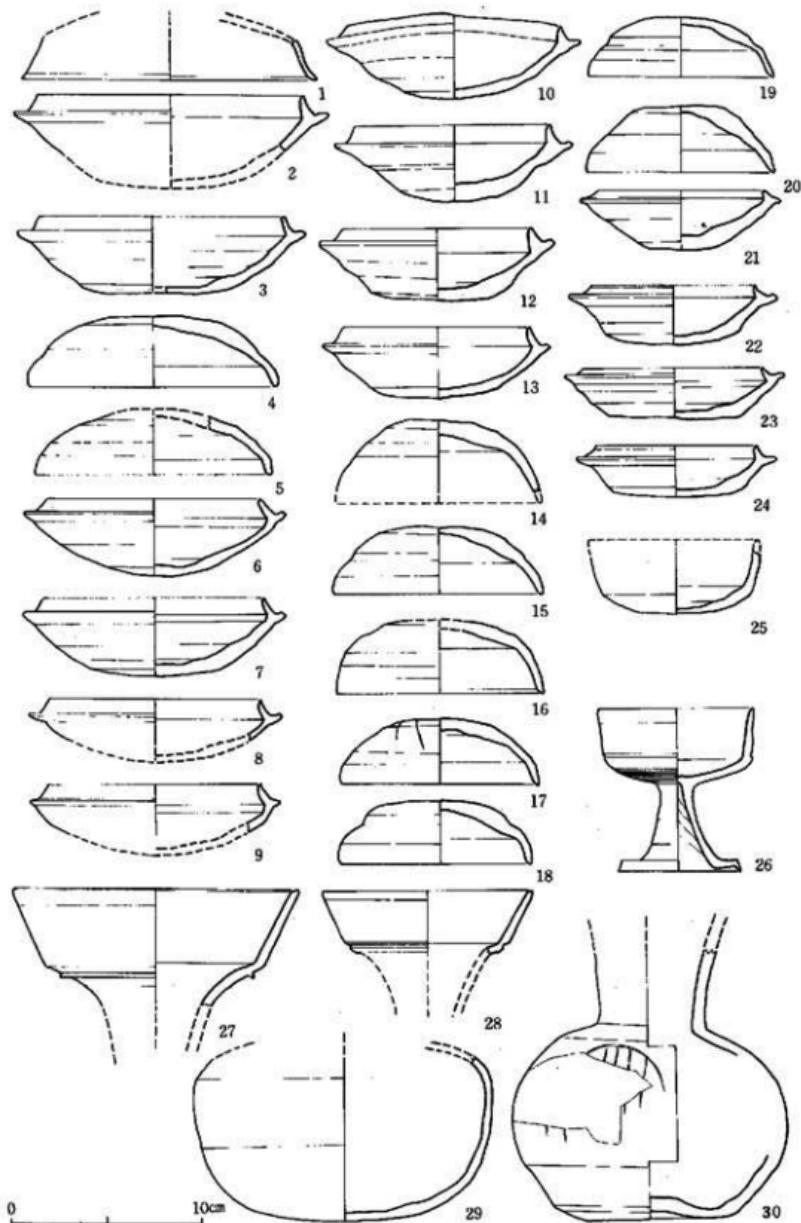
环身 I a 類 (2) 口縁部の小破片であり全体を窺いることはできない。復原最大径 16.6cm、口径 14cm と大形品である。たちあがりは 1.2cm で内傾し、基部はゆるくカーブし稜線は入らない。蓋受け部に沈線が入る。口縁部内外面は横ナデ調整が行なわれ、全体にシャープな感を与える。色調は淡青灰色であり焼成は充分である。口径、成形からして环蓋 1 とセットをなすものと考えられる。

I b 類 (3) たちあがりは 1.1cm であり、やや内傾する。基部は太いが先端は細くなり丸くおさめられる。全体に薄手の仕上げである。底部はヘラ削り、口縁部は横ナデ調整である。復原最大径 15.1cm、器高 4.2cm を測る。色調は灰色であり、焼成は良好である。胎土には小石が含まれている。底部にヘラ記号をもつ。

II a 類 (6、7、9) たちあがりは 1.0~1.1cm であり強い内傾を示す。たちあがり基部下に 3~4cm 程度の凹部があり稜線の入るのが特徴である。7 は蓋受け部に沈線が入るが、9 の蓋受け部は外下方に向いている。最大径 13.4~13.8cm、器高 3.4~4.1cm を測る。底部はヘラ削り調整が行なわれ丸みをもつ。6 のヘラ削り方向は逆時計まわりの方向を示している。底部内面はナデ、II 縁部内外面は横ナデ調整が行なわれる。色調はいずれも灰色、胎土は小砂粒を含み焼成は充分である。7 は底部にヘラ記号をもつ。

II b 類 (8、13) たちあがり高は 1.1cm を測る。細身で内湾する基部にするぞい稜線が入り、下方は凹凸が少ない。最大径 12.0~13.0cm、器高 3.5~3.8cm、口径 9.5~11.0cm である。13 の底部は未調整、8 はヘラ調整が施される。色調は灰色を呈し、焼成は充分である。全体に薄手の仕上げである。

II c 類 (10~12) 10 は II 縁部から体部にかけて焼きゆがみがあり、II 径 13.3×12cm の橢円形である。たちあがりは 1.0~1.5cm であり、基部は太いが先端は細く尖りやや外反する。11、12 は蓋受け部に沈線が入る。底部調整は 12 が丁寧なヘラ調整で丸みをもつが、10、11 は未調整である。10 はヘラ切り離し痕の観察から、ロクロ回転方向は逆時計まわりである。



第26圖 第6号填出土須恵器実測図 I (縮尺1/3)

最大径12.3～13.3cmであり器高3.7～4.5cmを測る。11、12は全体に厚手である。色調は灰色を呈し、胎土は小砂粒を含む。焼成は良好、堅緻な焼き上がりを示す。またそれぞれ底部にヘラ記号をもつが、一致するものはない。

II d 類 (21) 最大径10.5cm、器高3.2cmを測る。たちあがりは4mm程で内傾する。蓋受け部は外下方を向く。底部は未調整であり、底面の狭いことから器高は若干高い感を与える。底部内面はナデ、口縁部は横ナデ調整が行なわれている。灰色を呈し焼成は充分である。蓋受け部には焼成中に蓋が接着したのであろうか、蓋口唇部端が割れて団続している。底部にはヘラ記号をもつ。蓋II C 類とはセットになるが、身・蓋の関係を逆転して考えることも形態上不可能ではない。

III 類 (25) 口縁端部を欠失する。蓋受け部をもたないもので、推定口径9.0cm、器高3.8cmである。底部・体部の境はゆるくカーブし丸みをもち、口縁部はやや外反する。底部の調整はなくヘラ切り離しままであり、底部内面はナデ、口縁部は横ナデ調整が施される。乳白色を呈し焼成は不充分である。胎土は小砂粒を含み器面がザラついている。

高 坏 (26) 环部口径8.3cm、脚端径6.4cm、器高8.6cmを測る。环部は体部・底部の境に一条の沈線を繞らし、底部にはカキ目調整が行なわれる。口縁部はやや外反し、横ナデ調整によって端を丸くおさめる。脚部は細く外開し、端部は外上外に跳ね上がりぎみに観る折れ曲がる。脚柱内外面にはしづり痕が認められる。裾部および口縁部は内外面とも横ナデ調整が施される。色調はねずみ色であり焼成は充分である。

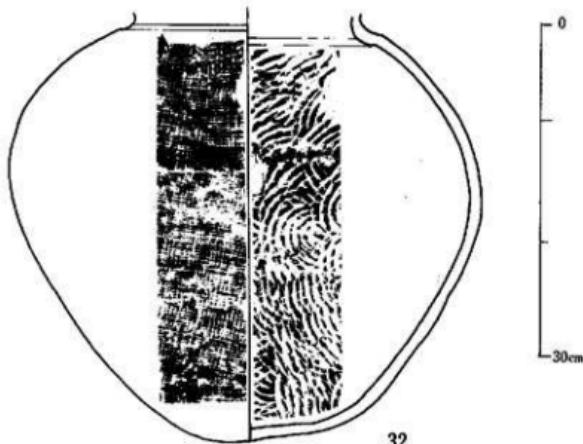
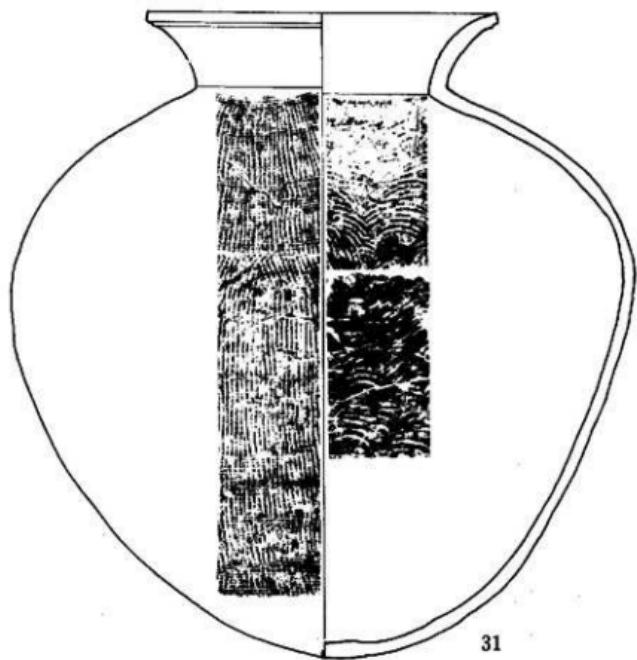
醜 I 類 (27) 頭部以下を欠失する。復原口径14.9cmを測る。頭部上端は内面にゆるいくぼみをみせるが、外面は強い折れ曲がりを示し腰下部にするどい突起を繞らせる。口縁部は直線状に外反する。口縁部および頭部には櫛状器具による縦位の浅い櫛目文が施されるが、それぞれ上端は横ナデによって磨り消されている。全体に薄手仕上げで、シャープなつくりである。色調は淡青灰色を呈し焼成は充分である。胎土は良選され砂粒含有量は少ない。

II 類 (28) 27同様頭部以下を欠失する。口径11.0cm、頭部の折れ曲がった境に一条の沈線を繞らす。口縁部は内溝ぎみに外反し、内外面とも横ナデ調整が施される。ねずみ色を呈し胎土は小砂粒を含む。焼成は充分である。

長頸壺 (29、30) 30は頭部上半を欠失するがほぼ全形を知りうる。胴部最大径14.4cm、現高14cmを測る。ゆるく外反する頭部はカーブをとりつ胴部に接続する。底部は内側にへこんでおり、ヘラ調整が行なわれている。胴下部は横位のヘラ調整、上部から頭部は横ナデ調整である。胴肩部から中位にかけてヘラ記号をもつ。29は最大径15.6cm、全体に薄手である。

肩部より上部を失っていることから必ずしも長頸壺に限ることはできない。灰褐色を呈し焼成は不充分である。胎土に小砂粒を含む。

甕 (第27図-31・32) いづれも墳丘西南隅の裾部黒色土中よりの出土である。31口径24.8



第27图 第6号撿出土須恵器実測図Ⅱ(1/4)

cm、胴部最大径44.5cm、器高46cmを測る大形品である。口縁部は大きく外反し端部は外方に突きだす。その下に純い突帯を繞らし頸部につづく。頸部と肩部の境は強くしまっており、なだらかなカーブをとりつつ球形の胴部を形づくる。肩部から胴部にかけて叩目の土面にカキ目調整が、また胴部から下位にかけて一定の間隔をおいてカキ目に入るぶ部にはカキ目ではなく縦位の横目が施されている。内面叩目は密であり、その単位をつかめないほどである。肩部、胴部の境で叩目の密度は異なり接合部を知ることができる。口・頸部は外面とも横ナデ調整が行なわれ内面叩目の上部は磨り消されている。胎土は小砂粒を含み焼成は充分である。色調はねずみである。32は口縁部上半を失する。頸部径16cm、胴部最大径33.6cmである。肩部から胴部にかけてはカキ目調整、中位は間隔をおいてカキ目を施す。下方は斜行するカキ目が入るが底部には認められない。内面叩目は胴中位で密度が異なる。灰色を呈し焼成は良好、堅緻な焼き上りである。胎土には小砂粒を含む。

土師器（第28図）

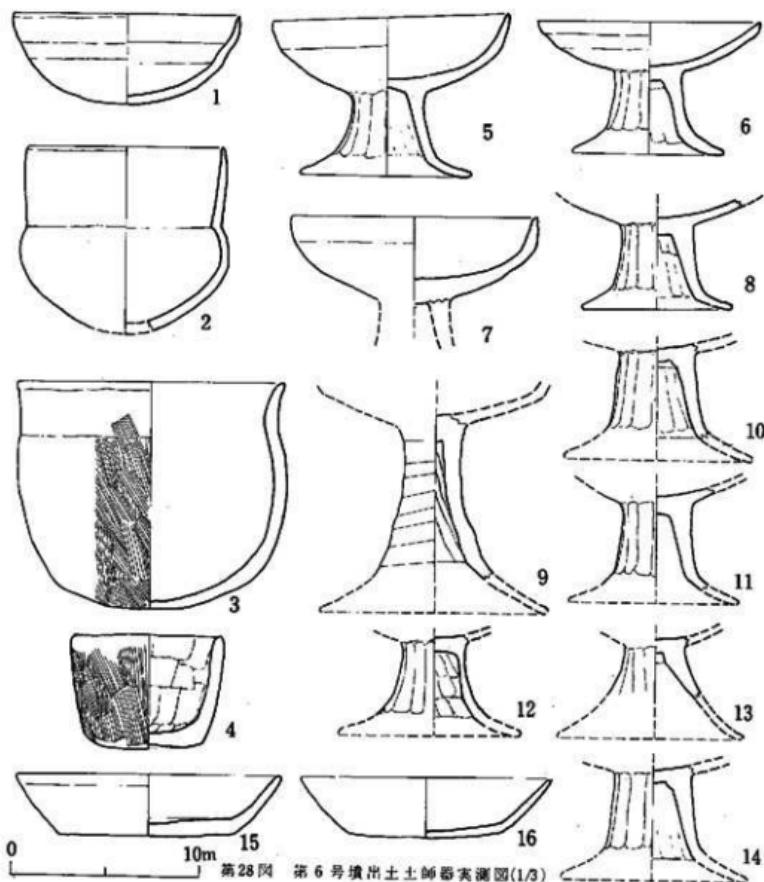
塊（1）口徑12.0cm、器高4.9cmを測る。器内外面ともヘラ研磨による調整を行ない器面を整えている。口縁部は内湾ぎみに直立し、その下部にヘラを横位に施しゆるい段をつくる。赤褐色を呈し、胎土は緻密、焼成は良好である。

塊（2）口径10.7cm、器高は10cm前後であろう。口縁部は内湾ぎみにやや外反する。器内外ともヘラ研磨による仕上げであり、外面ヘラ移動方向はほとんど横位（右→左）に一定している。口縁部、胴部の接合部は内面に強い棱を残す。赤褐色を呈し焼成は充分である。胎土には小砂粒を含む。

塊（3）口径14.1cm、器高12.1cmであり、胴部最大径は中位にあるが、口径と一致しているためざんぐりした形態である。外面は巾1.2cmと2.6cmほどの異った2種類のハケ状器具による器面調整が施される。口縁部は約3cmの巾で内外面とも横ナデが行なわれておらず、ハケ目は磨り消されている。胴部内面は斜めのヘラ削りが行なわれ器壁の凹凸が著しい。部分的にその上面をナデ調整している。茶褐色を呈し焼成は良好、堅緻で、胎土に小石を含む。

鉢（4）あまり類例のない器形であるが本墳以外からの埴人とは考えられない。口径8.3cm、器高6cmの厚手の土器である。口縁端は平折でなくやや波打つ。器外面は荒いハケ目整形で胎土の移動がみられ、ハケ目端には粘土の盛り上がりが残る。内面は斜めの荒いヘラ削りである。手捏ねとはいがたいがそれに近い性格をもつものと考えられる。茶褐色を呈し胎土は荒く小石を多量に含む。焼成は充分である。

高 坯 I 類（5～8、10～14）ぶ部の形態は5・7と6とに2分される。若干大小あるもののおおむね口徑12～13cm、器高7～9cm、脚端・径8～9cm前後を測る。5・7のぶ部は外開する中位にゆるい棱をもち、カーブを変えて厚さを減じつつ内湾ぎみに直立する。



第28図 第6号墳出土土師器実測図(1/3)

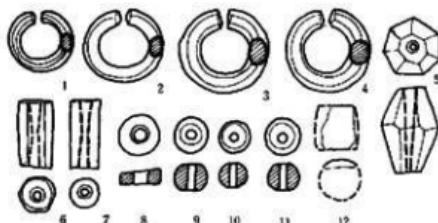
6は口縁部にかかる造作はなく大きく外開し浅い環部を形づくっている。5・6・7の环部はいずれもヘラ研磨による器面調整が行なわれる。脚部は短いが、大きく外開するもの(13)は少なく、全体に外反する程度で脚船にカーブを変えて斜め下方に折れ曲がる。脚柱内外面ともヘラ削りがなされるが内面は斜めに、外面は縱位方向である。裾部は横ナデである。色調は赤褐色ないし黄褐色を呈し、焼成は大略良好である。5・6・7・8・14は全面に丹塗りを、12には脚内面を除く全面に丹塗りを行なっている。

円塗りを施されたものの胎土は緻密な傾向をしめすが、そうでないものは砂粒の含有が多めであり、断面観察から容易に知りうる。

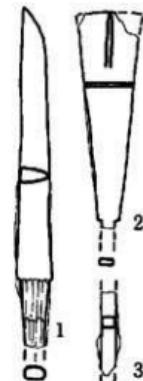
Ⅱ類(9)脚柱部のみの破片である。内面はしづり手法による胎土圧縮移動痕が顕著である。外面はロクロを回転させながら櫛状器具によるカキ口調整を据部のカーブの変れるところまで一気に行ない、器面の凹凸は螺旋状に周縁する。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は充分である。

坏(15・16)ともに底部に糸切り離し痕を残すものである。15は口径14cm、器高3.3cm、底部径8.7cmを測り、厚手の仕上げである。口縁部は内湾ぎみに外反し先端は丸くおさめられる。16はまわり小さめで、口径13.4cm、器高3.1cmで薄手の仕上げである。底部には糸切り痕と板目痕と呼ばれる圧痕が残る。口縁部は横ナデ調整である。

いずれも焼成は甘く器面の剥離が著しい。15は赤褐色、16は黄褐色であり、胎土中の砂粒の含有は多めである。



第30図 第6号墳出土装身具実測図(1/2大)



第29図 武具・工具
実測図(1/2)

武具(第29図2・3)

鉄鎌 2は茎を失しているが現長7.7cm、刃巾2.3cmを測り円頭広根斧鎌式である。身と茎の境は間をもつ。3は麓皮の延長部にあたるが断面形からみて、2とは別の個体である。

工具 (第28図1)

刀子 一本の出土のみである。基の中ほどから末端を欠く全長は12.0cmほどである。刃巾は1.5cm、刃長9.5cmを測り細身である。背はやや丸味をおびる。基の断面は隅丸方形、刃部との境は間をつくる。

装身具 (第29図)

耳環 (1~4) 金環である。3種類4個体を検出した。3と4は対になり、銅芯は中空でその上に金箔をおいたもの、1・2は中空の銅胎である。

切子玉 (5) 水晶製である。7面につくられ穿孔は片面からである。

管玉 (6・7) 6は硬石製、断面は円をとらず鈍い稜を持つ七面形である。緑色。7は碧玉製、淡青緑色を呈する。ともに両面からの穿孔である。

平玉 (8) 滑玉製である。完全に平坦ではなく、厚みは一定しない。両面穿孔。

丸玉 (9~11) ガラス製で直径10mm前後のものである。表面の風化が著しく乳白色を呈し、原色を知ることはできない。

棗玉 (12) 琥珀製であるが小片のため原形を知ることはできない。

(6) 小結

本墳は、C支群の北端に位置し径10.5mほどの不整形な円墳である。内部主体は東に開口する両袖型横穴式石室で、小規模とはいえその平面図形は整然としており、金函にあたっては高麗尺使用が考えられる。玄室は巾・長とも5尺の矩形で、羨道部入り巾3尺・袖巾2尺長さは玄室長の3倍の15尺をとるようである。墳丘の築造も石室同様に高麗尺使用による企画が求められるかもしれない。

出土遺物は石室内と墳丘西南コーナーに集中していた。玄室内は擾乱を受けているため大半を失ない、わずかに右袖部からの装身具等の一括出土が一追葬時の副葬品のあり方をしめすものと考えられよう。武器は数点の鉄鎌のみで直刀類も、馬具も認められない。玄室内からは他に耳環が4個出土しているが、対になるもの一組、他は別個のセットのものと考えると、被葬者は3体以上を推定できるが、配置状態は明らかでない。

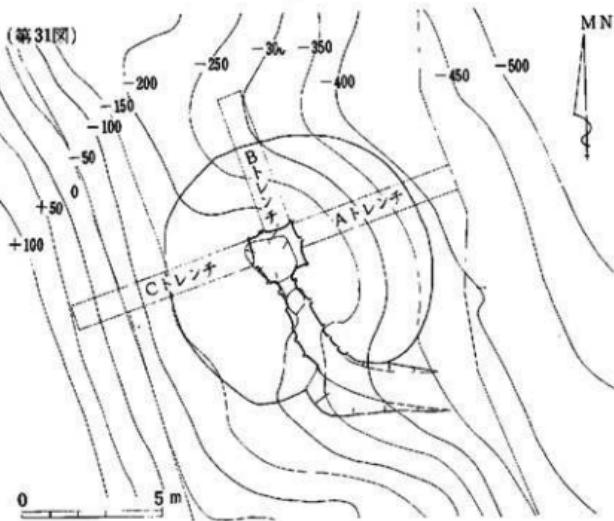
須恵器壺は3類に大別され、それぞれⅠ類はⅢB期、Ⅱ類はⅢB~Ⅳ期、Ⅲ類はⅤ期に比定される。従って本墳の造営はⅢB期、大略6世紀の後半代に求められ、Ⅴ期7世紀前半代に至るまで、数次の追葬などに使用されたと考えられる。また羨道部閉塞部の前面より出土した糸切底の土師器壺は13世紀頃のものとみられ、中世の豪族による埋納と考えられる。
(註1)

[註1] 繩年は小田富士氏案によった。 [註2] 「捕城跡」福岡県教育委員会 1969

Ⅶ 片江7号墳

(1) 位置と現状(第31図)

本墳は6号～8号墳の真中に
ある。北側は7号墳に接し、南
側は8号墳と近接して築造され
ており、墳丘部の調査により
両墳との関係を
追求することに
興味が持たれた。
墳頂部はすでに
陥没していたが、
その南側には狭
道部の天井石と
考えられる花崗



第31図 第7号墳墳丘測量図(縮尺1/200)

岩が露出していた。墳頂部の西側には半円状の窪地があり、馬蹄状の溝が認められた。西から東へ傾斜する地形に占地しているため、馬蹄状溝から墳頂部にかけてはわずかな高まりをみせる程度であるが、東側裾部と墳頂部との比高差は約2mほどであった。墳頂部の標高は6号墳、8号墳は大差ない。

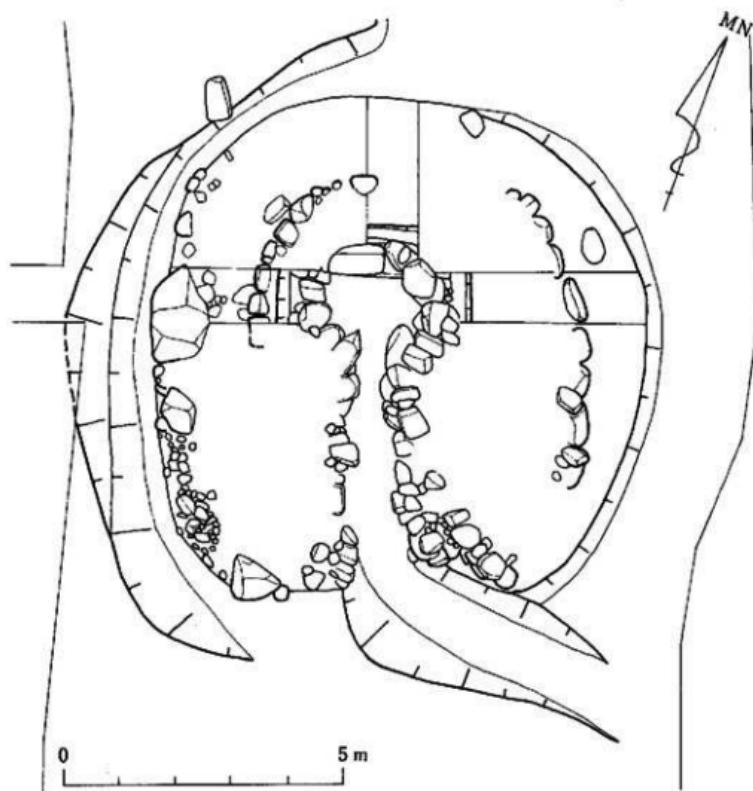
調査は石室の排土作業から始め、狭道部においては副葬品の良好な残存状態をとどめていた。ついでA・B・Cの各トレンチを設け盛土封土の状態及び墳丘裾を確認することにつづめ、更にI区～IV区の旧地表面を露出させることにより墳丘裾と列石との関係を明らかにし、全掘することをめざした。

(2) 外部施設

a. 馬蹄状溝(第32図)

溝は狭道部からBトレンチにいたる西側墳丘に沿って半円状にめぐる。石室の中心部に対応するCトレンチ南壁を中心として南北にそれぞれ3.5m巾にわたりもう一段の掘り込みがあり、全体としては二段の掘り込みにより溝を形成する。

Cトレンチ断面の観察によれば、東から西へ傾斜する自然地形の地山面から巾77cmにわたり30°の緩い勾配で深さ48cmまで掘り下げ、そこから更に60cmの深さまでは60°と急角度



第32図 第7号墳馬蹄状溝・埴丘裾及び列石関係図 (縮尺1/100)

に掘り下げている。溝の上面から下端までの比高差は 118cmで、巾は 112cmにおよぶ。溝の内側は古墳が築造される墓域であるが、C トレンチにおける埴丘裾は主軸より 3.85m 西にあり、溝の下端より埴丘裾までの巾は 55cm である。

上段の掘り込みは C トレンチ南壁を最大巾とし、羨道部および B トレンチ側へ各 3.5m のところで下段の掘り込み上面に達する。下段の掘り込みは C トレンチが最も深く、C トレンチから羨道部にかけては傾斜面の低い方向へ半円状にめぐるため次第に浅くなり、溝の断面は浅皿状を呈する。羨道人口西壁で地山面に達し、8 号墳の埴丘に沿ってつくられる墓道の上端へとつなげている。

一方CトレンチからBトレンチにかけても同様で、溝は次第に浅くなり、Bトレンチでは地山面に達し、主軸線より東側へのはびていない。6号墳、8号墳では主軸が地形の傾斜方向と平行するため、溝は玄室をとりまく馬蹄状を呈するのにに対し、7号墳では主軸は地形の傾斜方向に直交する関係にあり、主軸に平行する石室西側壁を取り巻く形状を呈している。しかし、傾斜度の高い部分の地山面を削り出して馬蹄状溝をめぐらし、墓域および墳丘裾部の位置を決定する点では古墳の築造上3基とも共通している。

b. 墳丘および墓塗 (第33図)

A・B・Cの各トレンチを設定し更にI区～IV区の発掘作業により墓塗と石室の関係及び墳丘の築造を調べた。

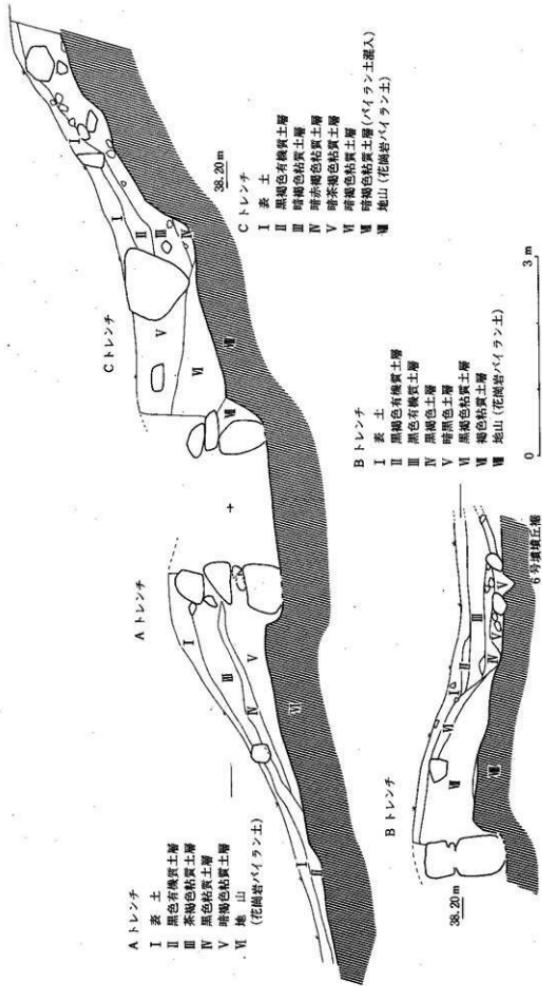
Aトレンチの地山は東側側壁裏側の墓塗上面から墳丘裾部にかけて10～20°の勾配で東へ傾斜しており、墓塗上面から2.83mで封土の先端に達する。玄軸線から封土先端までの距離は4.50mである。地面上は封土先端との接点から更に東へ45mまで同勾配でつづき、そこから巾30cmにわたり地山面を削り出して整形している。封土は地山の傾斜に沿って何段にも築造されているが、層の識別はむつかしく西側壁では地山から1.30mの高さまでしか残っていないなった。

Cトレンチは、墳丘裾部に溝がある。西側側壁側に掘り込まれた墓塗上面から墳丘裾部まで2.05m、主軸線から3.85mを測る。地山の傾斜は墓塗上面から西へ1.43mまでの勾配は15～20°でAトレンチとほぼ同様である。そこから溝の下端まで(1.17m)は更にゆるやかな地山面がある。溝は墓塗上面から西へ3.75mの地点から掘り込まれており、溝の下端から墳丘裾まで55cmを測る。

主軸に直交するA-Cトレンチについてみれば、まず主軸より西へ5.52mが溝の上端となる。これより二段の掘り込みにより溝の下端に達する。溝の下端より東へ1.17mまではゆるやかな削り出しがあり、そこから東へ8.18mは10～20°の勾配をとる。即ち溝の下端から東へ9.35mの間には緩傾斜を持つ削り出した地山面を墓域としており、西側には溝をつくり、東側はテラス状に整形することにより自然地形と墓域を明瞭に区画している。墳丘裾部はこの中に収まり、玄室は墓域のほぼ中心部に位置している。

墓塗の上面巾は3.47mで、下端巾は3.10mを測る。玄室の最大巾は1.90mであるが、側壁の腰石は55cm～75cmの厚さを持つ花崗岩で、側壁裏側での最大巾は3.10mとなっているため腰石は墓塗いっぱいに沿って配置し、石室を構築している。一方墓域面は西から東へ傾斜しているため、西側の墓塗は45cm掘り下げるのに対し、東側では18cmしか掘り下げていない。が、玄室下の地山面は水平位とはなっておらず、両壁腰石下の比高差は25cmある。玄室床面も水平位ではなく、西から東へわずかに傾斜している。

Bトレンチは主軸方向へ延長したトレンチで、6号墳のCトレンチへつなぐ。旧地表面は



第33図 第7号地 塙丘断面実測図(縮尺1/60)

玄室奥壁裏側の墓塚上面から6号墳の方向へゆるやかに傾斜しているが、2.35mで墳丘裾へ達する。玄室の中心的からの距離は3.95mである。更に北へ1.35mで6号墳の墳丘裾に達する。両墳の墳丘裾との間には黒色土が20cm~30cm堆積している。封土はレンズ状となって区別できるところもあり地山の傾斜に沿って何段にも築造されていると考えられるが、細かい層序の識別は困難で、褐色土として一括した。

Bトレンチでの墓塚は50cm下まで掘り下げており、奥壁の腰石は墓塚いっぱいに据えている。A~Cトレンチで検出された墓塚は玄室に沿ってめぐり、側壁から羨道部方向へのびているが、全体のプランを調べることはできなかった。墳丘の高さはAトレンチの1.30mに対し、Bトレンチでは0.70m、Cトレンチでも1.30mの高さまでしか残存せず、玄室同様築造時の高さを知ることはできなかった。

C. 墳丘裾と裾部をめぐる列石（第32図）

Aトレンチでは主軸より東へ4.95mで墳丘裾に達し、Cトレンチでは西へ3.85mに墳丘部がある。溝の下端から東へ4.40mで主軸に達し、主軸より4.95mでテラス状に削り出した上面にいたるので、玄室の主軸はや・西へ偏するもののは・中心部に位置している。A~Cトレンチと主軸線を結ぶ点からBトレンチの墳丘裾までは3.95m、羨道入口の先端までは4.85mを測る。B・Cトレンチでの墳丘裾までの長さははゞ一致し、Aトレンチ及び羨道部方向の墳丘裾までの長さははゞ一致している。そのため主軸と直交するA~Cトレンチより北側の墳丘裾ははゞ円形を呈するが、南側墳丘裾は隅円方形に近く、全体としては楔円形に近いプランとなっている。

主軸より西側には馬蹄状溝がみられるが、墳丘裾は溝の下端より削り出して作られた旧地表面上にある。東側は台状を呈する旧地表面の先端より内側に墳丘裾があり、自然地形面より一段高くなっていることから、墳丘裾部の位置の決定にあたって意図的な企画性を窺い知ることができる。羨道入口西壁からCトレンチにいたる墳丘裾には10×30cm前後の割石が数多く並べられ、部分的に40~70cm大の花崗岩の転石が配置されている。Cトレンチの墳丘裾部には100×150cmの巨岩がみられるが、墳丘や溝との関係から後に流れ込んだものではなく、墳丘築造の際に配置された列石の一とと考えられる。列石はB・Cトレンチの中程まで墳丘裾に沿ってみられるが、Bトレンチから東側へはのびていない。

羨道部入口の東壁は西壁より50cm短く、東へ幅広がりとなっているが、東側先端より東南へ西壁の長さと同位置までつゞいて墳丘裾部へ達する。Aトレンチでは墳丘裾より玄室側へ90cm、旧地表面より30cm高い封土中に30×50cm大の丸味を帯びた花崗岩があり、羨道部東壁からのびる列石へつづいている。Bトレンチでは墳丘裾から玄室側へ150cm、旧地表面より50cm高い封土中にあり、Cトレンチでは墳丘裾より玄室側へ170cm、旧地表面より90cmの位置にある。羨道東壁からつゞく列石は一端墳丘裾へ達し、A・B・Cの各トレンチ断面で観

察された石へつながっている。いずれも30×50cm大の花崗岩で、A→C トレンチに至るに従って墳丘裾から遠くなり、封土中に配置される位置も高くなってしまい、全体としては石室を囲繞する中段位の列石を構成している。

西側墳丘裾に沿ってつづく列石は小さな割石が多いのに対し、石室を圍繞する中段位の列石は大きな転石であり、対照的である。主軸の東側墳丘裾をめぐる列石はみられず、中段位の列石は封土の流れを防ぐ役目を果している。石材は全て花崗岩である。

d. 墓道（第32図）

7号墳の石室は南側に開口しているが、西側狭道部側壁の先端から8号墳Aトレンチの墳丘裾までわずか2.70mの近距離にあるため、7号墳の墓道は8号墳I区の墳丘に沿って狭道部から南東側へ屈曲している。

これに対し東側では狭道側壁の先端から墳丘に沿った列石に平行して南東側へ直線上にのびている。墓道の上面巾は2.00m、下面では1.00mとなっており、断面は台形状を呈し、狭道先端から4mのところまで明瞭に観察される。

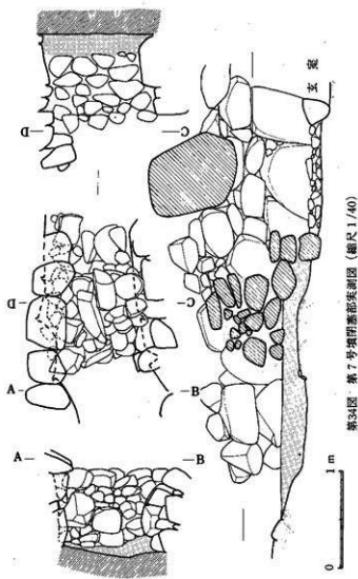
(3) 内部構造（第34・35図）

本墳は主軸をS 16° Wにとる両袖型横穴式石室である。石室はやや東へ偏するもののほぼ南へ開口している。玄室の奥壁での巾は1.65cm、袖石部の巾1.60m、中央部の最大巾1.90mを測る。玄室長は右側壁で1.55m、左側壁で1.67m、主軸での袖から奥壁までの長さは1.60mである。

奥壁は2石を並列して腰石とする。狭道部から奥壁をみると右側の腰石が大きく、巾98cmである。奥壁は直線状ではなく、右の腰石は内側へやや張り出している。腰石から二段、床面より高さ1.05mまでしか残存していない。腰石は2石とも地山面に据え、まわりにこぶし大の糠を根石として安定させている。

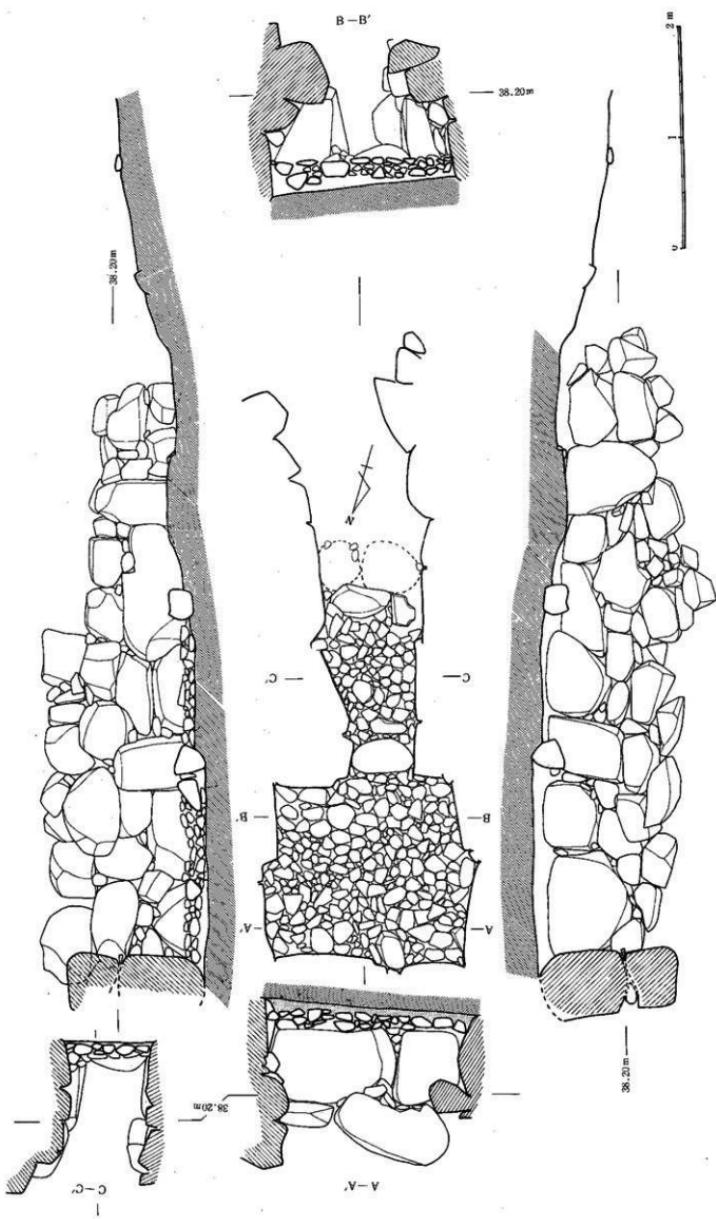
側壁の腰石は両壁とも2石である。右側壁の腰石と奥壁及び袖石との接点は主軸よりも70cmと平行しているが、中央部は10cm程外側へ張り出している。左側壁の腰石は袖石との接点から奥壁方向へ外開きとなり、中央部は外側へ張り出すため、直線状とはならず、歪みを生じている。袖石の玄室側の巾は右側が70cm、左側は30cmと著しく異なるため、狭道部は主軸より西側へ偏しており、全体としてはやや歪みを持った正方形に近いプランを構成する。袖石間の狭道巾は55cmである。玄室は敷石をもって床面としている。地山より10~20cmまで埋土をし、その上に10×30cm前後の礫を2~3重に重ね、その上面をそろえて床面としている。床面は主軸方向は水平位にあるが、左側壁から右側壁にかけては、地形の側斜の方向へわずかに傾斜しており、水位ではない。

狭道の長さは左壁が袖より4.85m、右壁は4.35mである。狭道部の左側壁は4.85mで墳丘裾に達し、西側墳丘裾部をめぐる列石につづいている。右側壁は袖より4.35mと短かく、それより先端は東へ屈曲して墳丘裾に達し、東墳丘に沿ってめぐる中段位の列石につづく。



第34图 第7号堆积剖面示意图 (比例尺1/40)

第四层 岩7号剖面示意图(图7/35)



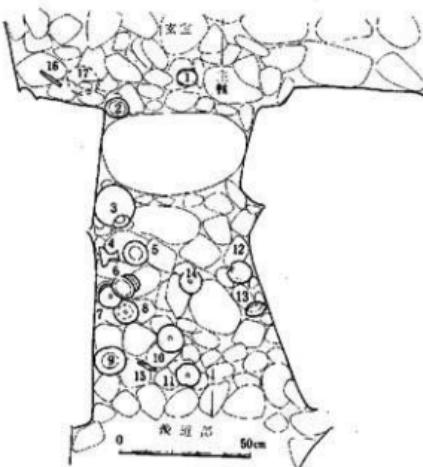
左側壁の腰石は袖石より4石（袖より2.35m）までは直線に主軸に平行して配列し、5石目は袖石同様立てている。右側壁は袖より2.30mまでの間に3石を配列するが次第に外開きとなり、4石目を立石としており、立石間（袖より2.50m）の腰道巾は0.90mである。

側壁の積み方は立石を境として異なる。袖石より立石の間は石材の横の面をそろえながらていねいに積み上げているが、先端部は規則性がみられない乱雑な積み方となり、高さも2～3段までしか積み上げていないようである。腰道部の天井石は袖石から立石までの間までしか付設されていなかったと想定される。袖石より2石目には80×90cmの天井石が腰道部にや、ずり落ちた形で残存していたが、腰道床面より140cmの高さの左側壁は、石室構築時の状態をとどめていると考えられる。

玄室と腰道部は袖石部の樋石によって区画されている。樋石の断面は逆三角形を呈し、先端を地山に埋め込んで安定させている。腰道部の地山面は玄室より10cm高く袖より1.35m～1.60mの間に40×50cm大の花崗岩を横に2石並列し腰道を二分する位置にあり、閉塞の根石としている。樋石と閉塞下端にあたる根石との間には埋土をせず地山面の上に玄室と同じ大きさの礫を直接重ねて床面を構成することにより、その上面は玄室の床面の高さにそろえている。閉塞下端の根石を境としてそれより先端は地山面が一段高くなり、袖より2.70mから腰道へつなぎいている。

閉塞は、地山の上に10～20cmの埋土をして水平位とし、下端の巾1.20m～1.40mにわたり、40～50cm前後の転石を積み上げている。上端での巾は0.75mである。

石室の平面構成についてみると玄室山を奥壁の165cmとし、腰道巾を袖石部の55cmとすれば3対1の割合となる。玄室長を主軸の160cmに求め、腰道長を左側壁の480cmとすれば1対3の割合となっている。本墳は垂みを持つ正方形ブ



ランに近い玄室に狭長な幅広がりとなる羨道部が付設される両袖型横穴式石室であるが、石室の構築にあたっては古代バドによる企画性を指摘することができるかも知れない。石室の石材は全て花崗岩である。

(4) 遺物出土状態 (第36図)

玄室は天井石が持ち去られ、遺物はほとんど残存しない。側壁寄りにわずかに遺存する程度であった。右側壁の奥壁側に壺と金環が、櫛石の玄室側に壺、左側壁の袖石寄りに刀子・鉄鎌が残存していた。羨道は閉塞石及び袖石間に天井石が残っていたことから、破壊からまぬがれ、遺物の副葬状態をとどめていた。須恵器は平瓶1、高壺1、柑2、壺には身と蓋がセットになったものが3点あり、他に壺身2、蓋2がある。壺蓋は擬宝珠形のつまみを持つもので、10・11と12・13は30cm程離れているが10は12と、11は13とセットになると考えられる。須恵器以外では9と11の間に刀子1があった。

石室外では羨道部右側壁の先端部根石の埴丘櫛に上師器がまとまって出土した。口徑の広いカメ形を呈するもので、2~3個体分が含まれている。I区埴丘櫛から1m東に寄った地点には土器溜りがあり、須恵器の壺、蓋の他、台付壺3個体分と擬宝珠形のつまみを持つ壺が含まれていた。III区埴丘櫛の溝に壺があったが、これは6号墳の流れ込みとも考えられる。Cトレンチ埴丘櫛部には手すくね土器一個(完形品)と瓶の把手の破片があった。

全体に羨道部を除けば遺物は少量であるが、羨道部の壺とI区の壺には時期差が認められる。出土遺物を整理すれば次のとおりである。(遺物の後に付した括弧内のナンバーは石室内出土をしめし、第41図11は閉塞部前面より出土した。括弧内にしめされていない遺物は石室外出土のものである)

容器 須恵器 (第37図8~21・27・29~31)

武具 鉄 鎌 (第41図1~7)

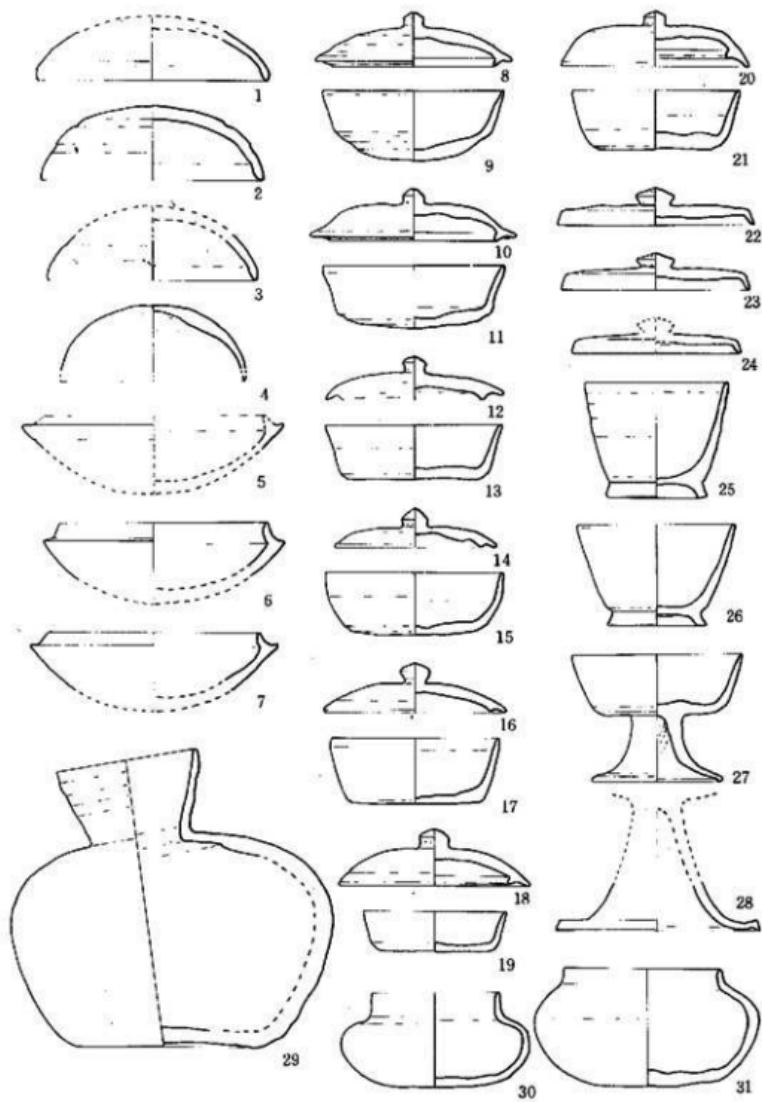
工具 刀 子 (第41図8・9)

装身具 壺環 (第41図10)

(5) 出土遺物

須恵器 壺(身・蓋)、台付壺、高壺、平瓶、柑と蓋がある。大部分は羨道から一括して出土したもので、他に羨道、I区およびIII区の石室外から出土したもののが少量ある。

壺(第37図1~26) 身と蓋がある。蓋受けの立ちあがりを有する身(5~7)とそれに対応すると考えられる蓋(1~4)をI類、無高台の身と擬宝珠形のつまみを持ち返りを有する蓋をII類(8~21)、高台付の身(25~26)と返りを有しない蓋(22~24)をIII類とする。I類はI区、III区および羨道から出土したもので、石室から出土したものは含まれていない。II類は羨道と玄室から出土したものに限られる。III類はI区から出土した。I~III類はそれぞれセット関係をしめすと考えられるものである。



第37圖 第7號填出土須惠器實測圖 I (縮尺 1/3) 0 10cm

I類の坪身(5~7)はいずれも破片であるが、復原口径13.2cm~13.9cm、蓋受けの立ちあがりは1.0cm以下のもので、内傾度は大きく、高さは4.0cm前後になると思われる。6は胎土に砂粒を含み、5~7とも焼成は普通で色調は灰色を呈する。蓋のうち1~3は口径11.2cm~12.2cm、高さ3.5cm~4.0cmと考えられるもので、5~7に対応するものであろう。天井部からゆるやかにカーブし、口縁内側は丸味をもつ。2は天井部はヘラ削りし、ナデにより整形している。胎土に砂粒を含み、体部は黒灰色を呈するが内面は赤味を帯び、焼成は良好でない。内面はナデにより仕上げている。1・3は胎土は堅緻で、青灰色を呈し焼成は良好である。3は胎土に砂粒を含む。4は口径が10.0cmと他に比べ著しく小形化するもので、体部は内面にふくらみを持ち、淡灰色を呈し軟質で焼成は良好でない。

II類は狭道および玄室から出土したもので、12と13、16と17、18と19はセットになって出土した。他は出土状態、胎土や焼成などからセットになると考えられるものである。

身は蓋受けの立ちあがりがみられない無高台のもので、底部が丸味を持つ9・11と平坦な底部をなす13~21に分けられる。9・11は底部をヘラ削りし、その上からカキ目調整するもので、胎土に砂粒を含み、色調は赤褐色を呈するものである。内面はナデにより仕上げる。8・10は天井部から体部にかけてヘラ削りがみられ、ナデにより整形し小さなつまみを持つ。胎土には9・11と同様砂粒を含み赤褐色を呈するものである。8~10は狭道から出土し、11は玄室に残存していた。8~11は同一ヘラ記号を有し、胎土、焼成とも共通の特徴を持ち、セット関係を示すと考えられるものである。13~21の身は口径8.8cm~9.4cmと10cm以下のものである。ヘラ削りにより平坦な底部を形成し、内外ともナデにより仕上げている。全て胎土に砂粒を含む。19は口径7.6cmと著しく小形化したものであるが、13、15、17、21は胎土に砂粒を含み、焼成はもろく、軟質で淡灰色を呈するものである。蓋はすべて内面にかえりを有するもので、かえりが口縁より外にできたもの(8・10・12)と退化して口縁内側になるもの(16・18・20)に分けられる。口径は10.4cm~9.4cmを測る。14はかえりが口縁と同一線上にあり、口径8.6cmと著しく小形で扁平である。胎土に砂粒を含むが堅緻で青灰色を呈し、焼成は良好である。口径や胎土、焼成からみて19とセットになると考えた方が理解できるものである。12は扁平で焼きゆがみがみられる。16は体部をカキ目で整形し内面はナデにより仕上げる。18はゆがみが生じ、正円とならず、つまみも中心から端部へ偏してつけられている。18・20は胎土に砂粒を含んでもろく、焼成は軟質で淡灰色を呈する。20は天井部をヘラ削りし、カキ目整形し、体部にかけてゆるやかにカーブするもので内面のかえりは著しく内側にある。内面はナデにより仕上げている。胎土に砂粒を含み、器形はゆがみを生じている。12~21の中で、12と13、16と17、18と19はそれぞれセットになって出土した。20と21は玄室袖石付近から出土したものでセットになると考えられる。胎土、焼成および色調から12と13、16と17、20と21はそれぞれセットとして理解して不自然でない。ところが18

と19は19が18の蓋の中にすっぽり収まる形で出土したのであるが、18の蓋はもろく淡灰色を呈するのに対し、19の身は堅緻で黒灰色～青灰色に近い焼成良好なものである。口径も著しく異なる。一方14は胎土は堅緻で青灰色を呈する焼成良好な蓋であるが、15の身はもろく淡灰色を呈する。II類の身の中で14は特に小形で、蓋のうち14だけが小形である。以上の点から14と19は共通する特徴を有しており、これがセットになると考えた方が自然であり、15は18と共に持つ所を付記しておく。

III類はI区埴丘塚から出土したものである。22～24はかえりを有しない蓋で、擬宝珠形のつまみを持つ。口径10.4～9.0cm、高さ20cm前後のもので、天井部から体部にかけてゆるやかなカーブはみられず平坦となり、肩部から口縁にかけて外反し、口縁端は丸味を持つ。擬宝珠形のつまみは巾2.0cm、高さ1cm内外で、II類より端正でII類の蓋とは区別されるものである。内外ともナデにより仕上げている。胎土に砂粒を含むが堅緻で、青灰色を呈する焼成良好なものである。25・26は高台付の坏身で、いわゆる台付坏として分類されているものである。高台は短かく、26は端部に丸味を持たず、体部はゆるやかに外反し口径8.4cm、高さ5.4cmを測る。25は高台の端部が丸味を持ち、外反度は小さくなり、口径5.2cm、高さ7.6cmとなっている。26が短く開いた形に対し、25は器高が高くなり、II径は小さくなっている。体部はカキ目、内面はナデにより仕上げている。底部はヘラで削り出し、ナデにより整形している。胎土に砂粒を含むが堅緻で青灰色を呈し、焼成は良好である。他に復原できない同様な口縁部片が一点あり、22～24の蓋とセットになると考えられる。

高坏(27・28) 高坏には渡道部から出土した完形品とI区から出土した脚部の破片がある。27は脚の短いもので、II径8.4cm～8.9cmで坏部にゆがみがみられる。体部から脚部にかけてはヘラ調整し、その上からカキ目整形している。内面はナデにより仕上げている。脚部にはひねりが認められ、端部は丸く内側におさめている。高さ6.8cmを測る。胎土に砂粒を含むが堅緻で、黒灰色を呈する焼成良好な小形品である。28は端部が断面三角形を呈する脚部片で、内側にカキ目整形がみられる。胎土は軟質で砂粒を含み、淡灰色を呈し焼成はもろい。

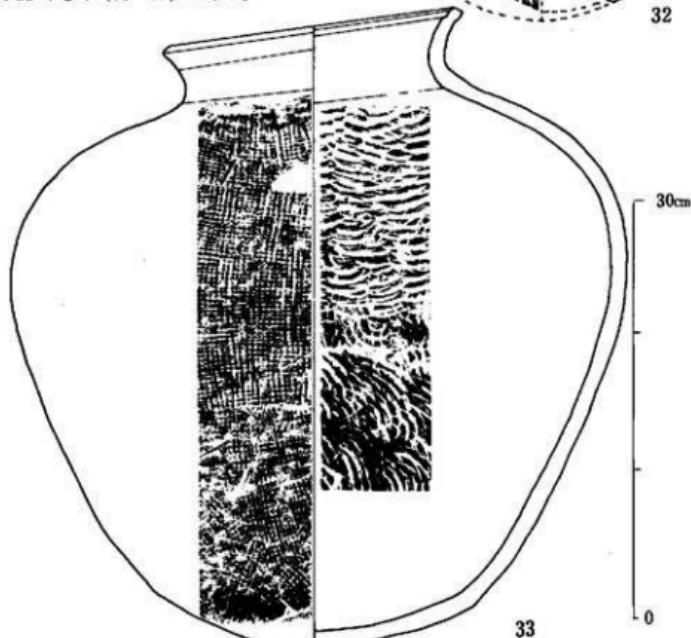
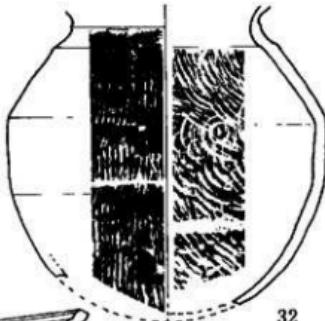
平瓶(29) 口径7.4cm、体部最大径17.1cm、器高15.7cmを測る。体部にはカキ目がみられ、内縁内面もカキ目整形されている。頸部から体部にかけてX印のヘラ記号が施されている。底部はヘラ削りされやや上げ底となる。底部と体部は外面から指頭でおさえながら接合している。胎土に砂粒を含むが堅緻で、黒灰色を呈する焼成良好なものである。

椎(30・31) 口縁が立ちあがるもの(30)と内傾するもの(31)がある。30は口径6.8cm、高さ5.0cm、体部最大巾10.0cmを測る。頸部から口縁部にかけて直立するもので口縁端部は丸味を持つ。口縁から体部にかけてカキ目がみられ、平底に近い丸味をもった底部はヘラ削りされ、ナデにより仕上げている。26は頸部から口縁にかけての立ちあがりが短かく、内傾

する。口径 8.4cm、体部最大巾 12.0cm、器高 6.4cm を測る。体部は丸味を持ち、底部から体部にかけてヘラ削りされ、ナデにより仕上げている。

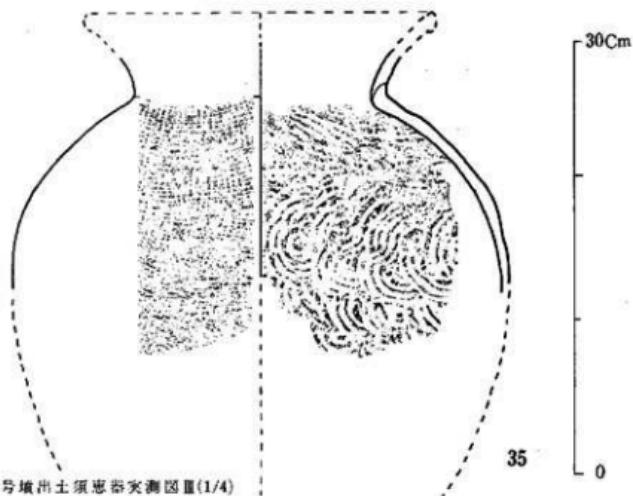
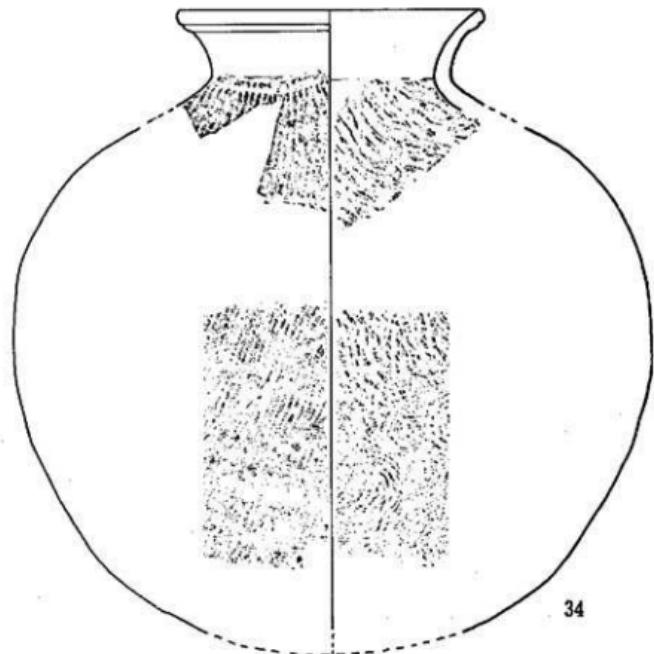
口縁から体部にかけてはカキ目、内面はナデにより仕上げている。30・31とも胎土に砂粒を含むが、堅緻で焼成は普通で灰色を呈する頸部から体部にかけてともにヘラ記号を有する。

図 (第38図32・33、第39図34・35) 小形のもの (32) と大形のもの (33~35) がある。



第38図 第7号墳出土須恵器実測図 II(1/4)

32は口縁部を失するが、頸部の外径 12.0cm、体部最大径 22.7cm、頸部までの器高約 21.0cm を測る。肩の張る体部には平行叩目の上にカキ目調整が施される。内面は同心円状の叩目を有する。底部は径 15.0cm の円形状に失するが、内面から打撃が加えられており、底部穿孔の可能性もある。胎土に砂粒を含むが堅緻で、黒灰色を呈する焼成良好なものである。



第39圖 第7号墳出土須恵器実測図面(1/4)

33は口径20.0cm、体部最大巾43.7cm、器高45.5cmを測る大形品で、口縁は丸味を持ち内側に段を有する。頸部が短く、体部は丸味を持ち胴長である。体部は柑子状の叩目、内面は同心円状及び波状文の叩目がみられる。頸部から口縁にかけてはナデにより仕上げる。灰色を呈し、焼成は堅緻、器形にゆがみがみられる。

34は口縁部及び胴部の破片で底部を欠く。口径21.6cmを測る。口縁端部は丸味を持ち、一条の鈍い沈線を繞らす。体部は平行叩目の上にカキ目調整が施される。球状を呈し、体部最大径45.8cmを測る。器高は約46.0cmと推定される。内面は同心円状の叩目、淡灰色の焼成不良なもので軟質である。

35は口縁部を欠く胴部片で、頸部の外径17.8cm、体部最大径35.4cmを測る大形のもので、2角部から底部にかけてゆるやかに下降するカーブを描き、器形は2に類似すると考えられる。頸部から口縁部にかけて外変するが、頸部は短く、口縁端部は丸味を持つものであろう。

復原口径約25.0cm前後、器高約42.0cm前後になると推定される。体部は柑子状の叩目が施され、内面は同心円状の叩目を施す。頸部内面はナデにより仕上げる。胎土に砂粒を含むが堅緻で焼成は普通である。甕(1~4)は全てI区から出土したものである。

土師器(第40図)

壺形土器(1・2)1は口径29.6cmの大形品で、最大径は口縁部にあり、体部はややふくらみを持ち、胴長の器形になると思われる。体部は櫛状の刷毛目が施され、内面はナデにより仕上げる。赤褐色を呈する焼成良好なものである。壺形土器は1と同様な器形を呈する口縁部の小片が他に2~3個体分ある。

2は丸底を呈する底部片で、体部には櫛状の刷毛目を有し、底部はナデにより仕上げている。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する焼成良好なもので、1と同類の壺形土器の底部になると思われる。

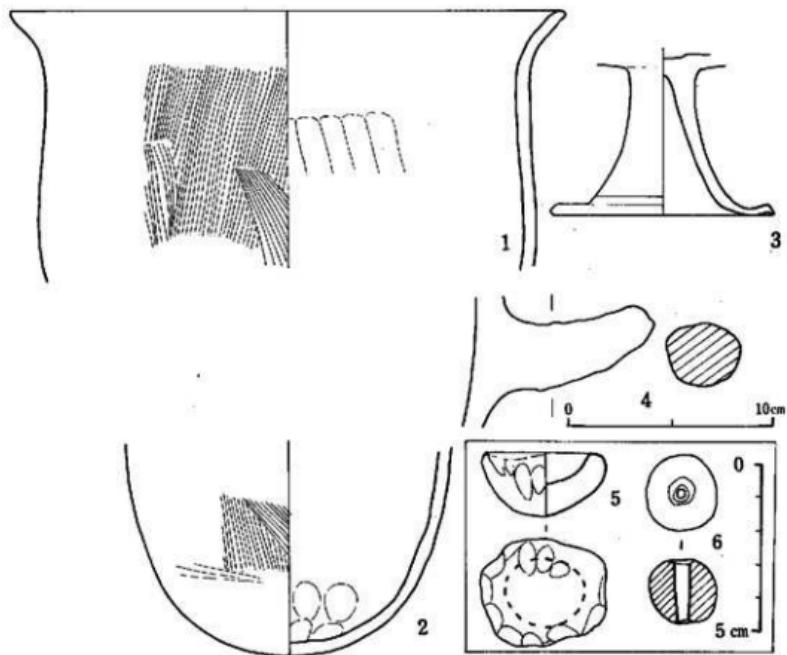
高杯(3)高杯の脚部で、脚部が外反し、断面三角形を呈する端部は丸味を持つ。

外径は12.0cmを測り、脚部の高さは8.4cmである。整形は須恵器と酷似し、内外ともナデにより仕上げる。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。I区出土。

瓶(4)把手のみの破片で全形を知りえない。長さ8.0cmの把手の断面は丸みを持ち、上方に湾曲する。把手の下半から体部にかけて櫛状の刷毛目が施されている。胎土に砂粒を含み淡褐色を呈する。墓道出土。

手づくね土器(5)最大径3.6cm、高さ1.9cmのミニチュア土器で、内径2.8cm、深さ0.9cmを測る。体部口縁部を指によりつまみあげて整形している。淡褐色を呈する。Cトレンド溝中の黒色土より出土。

土製丸玉(6)径2.3cmの球状のもので、一方から穿孔している。I区出土。



第40図 第7号墳出土土師器実測図(1/3)

武具

鉄鎌 (第41図1~7) 平根式に属するもので、鋒は両刃で先端は丸味を持つ。関部はやや広がって最大巾となり。全長約14cm前後になると思われる。茎は長いものと短小な二種類がある。1はほぼ完形品で関部の0.95mmを最大巾とし、先端に向って小さくなり、鋒は最大巾 0.9mmを測る。茎には樹皮の巻きつけがみられる。2はやや巾の厚いものであるが茎は短かい。

3、4は湾曲する破片である。5~7は茎の部分で、樹皮の巻きつけがみられる。

工具

刀子 (第41図8・9) 両関(矛)と片関(矛)のものがある。8は茎の長さ 4.9cmで木質が付着している。両関で全長は不明である。9は片関のもので、茎に木質が付着しており、先端を失するが、ほぼ完形に近く、長さ 5.2cm前後と思われ、よりやや大きくなるものであろう。1は狭部、2は玄室西袖石近くの敷石面に残存していたものである。

装身具 (第41図8・9) 銀環(10)と金環(11)がある。

銀環（10）は玄室の奥壁に近い右側壁側の敷石間に残存していた。径 2.3cm の銅芯銀張りの耳環で、切れ目 2.0mm、断面は 0.5×0.8 cm の橢円状を呈する。

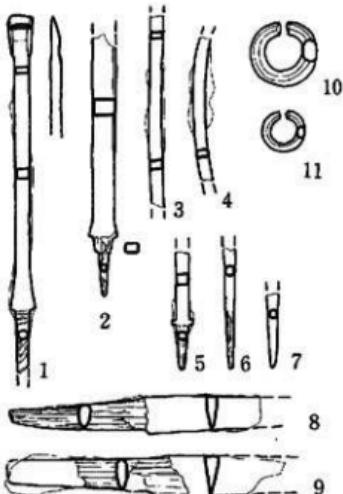
金環（11）は狭道部閉塞石前面の床面から出土した。銅芯金張りの耳環で径 1.6cm の小形品である。

切れ目は 1.5mm、断面 3.0×4.0 mm のものであり、破損が著しい。

（6）小結

7号墳は径 9 m の円墳で横穴式石室を内部主体とする。6号墳、8号墳に比べやや小形であり、石室は本墳のみ南へ開口する。玄室はゆがみを生じ、不正な正方形に近いプランを呈し、狭道部が主軸より西側へ偏し、先端は裾広がりとなるなど、6号墳、8号墳とは石室構造の上から異質な要素を持っている。更に墓道は狭道部先端より 8号墳の墳丘裾に沿って屈曲しており、6号墳、8号墳の古墳築造時期より後出の古墳であると考えられる。

一方残存した出土遺物についてみると、年代の示標とされる坏はⅢ類に分類される。Ⅰ類は径 12.0cm 内外のもので、蓋受けの立ちあがりの内傾度は大きくなり、Ⅲ期 B 類に属するものではなく、Ⅲ期終末からⅣ期に比定されるものであろう。玄室及び狭道からまとめて出土した須恵器はいずれも胎土に砂粒を含み、整形が荒くなり様も一段と小形化する。無高台の蓋受けを持たない环身と擬宝珠形のつまみを持ち内側に短いかえりを有する蓋がセットになり、Ⅴ期に比定されるものである。Ⅲ類は有高台の环身と擬宝珠形のつまみを有するが、体部は扁平となり、かえりがみられないもので、Ⅵ期に属すると考えられる。このことから、7号墳は 7世紀初頭前半に築造され、7世紀中葉及び 7世紀後半までの少くとも 3 時期にわたり追葬が行なわれており、それ以後のものは出土していない。玄室敷石間より銀環が出土したが、玉類はみられなかった。鉄器では鉄鎌、刀子に限られ、刀、馬具等は認められなかった。全体に副葬品は乏しかったと想定される。



第41図 武具・工具・装身具実測図 (1/2)

■ 片江8号墳

(1) 位置と現状

本墳は鳥越C支群の南端、7号墳の南側に占地し墳丘裾を接している。その巾2m前後と推定される。斜面に構築せられた墳丘のためか墳丘測量では確実な墳形は認められない。墳丘頂部に3.5×3.2mの陥没がありそこから西側にかけて削平された跡があって等高線がみだれぎみである。

西側斜面と墳丘との間に半円する窪地が認められ、墳丘裾部との境は明瞭に区分される。大略10.5×11.5mほどの椭円の墳形をもつことが推定された。現存墳頂部の標高は41.14mであり、墳丘東側裾部より3.50mほどの高さである。西側裾部には前述のように窪みが半円し、その底面から墳頂部までは0.3mほどの比高差があり、わずかではあるが高まりをみせいわゆる山寄せと呼ばれる斜面に築造されたものである。

調査は陥没内の流入出を排除して石室を清掃し、主軸延長線上墳丘西側にBトレンチを、玄室中部を直交するA・Cトレンチを設定し、墳丘封土断面、裾部および溝について追求した。また墓塙についてはトレンチ内の平面と断面の観察にとどめざるをえなかつた。

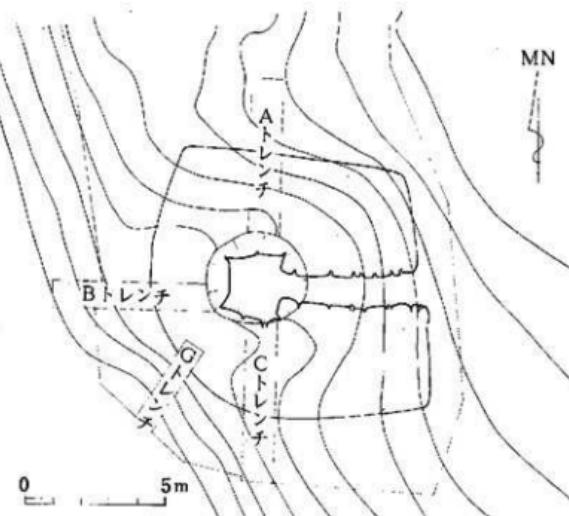
さらに各トレンチ間をI~IV区に分け、残存墳丘面および裾部を露出させ、あわせて馬蹄状溝についても極力全面発掘に努めた。

(2) 外部施設

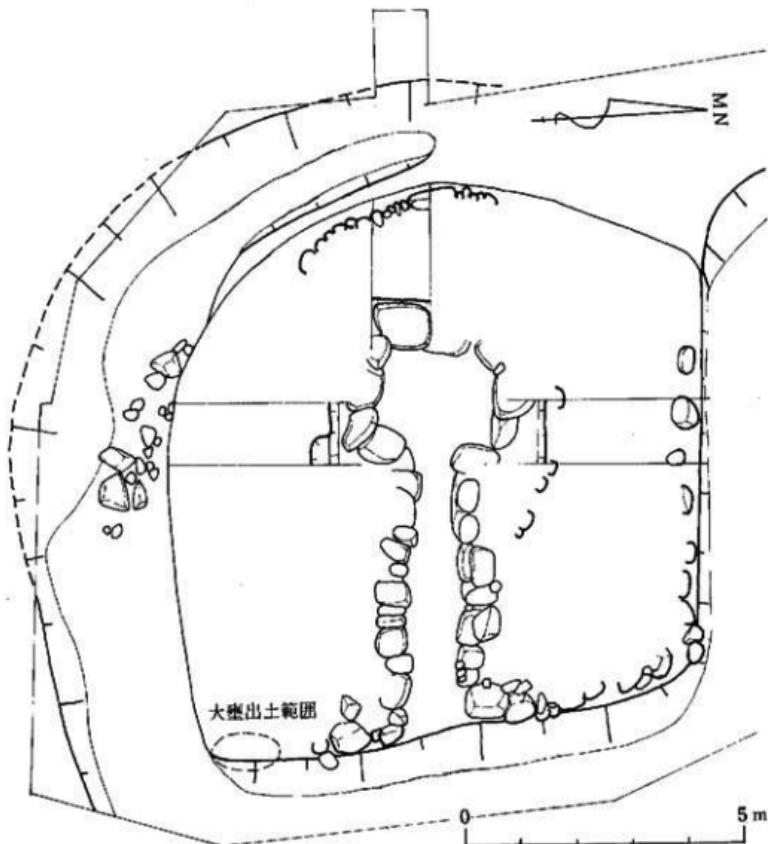
a 馬蹄状溝(第43図)

石室主軸は西面する斜面に偏しているがほぼ直交する位置に設定され、墳丘の築造にあたっては斜面上部に接する側、すなわち墳丘西側の地表面を削りとる造作を行なっている。

かような地割造作は6・7号墳とその方法を一にしているが、本墳の場合は斜面上部のみでなく斜面の傾斜に沿いつつ墳丘南側にも行なわれ、この部分では浅い溝状をしめしていく



第42図 第8号墳墳丘測量図(縮尺1/200)

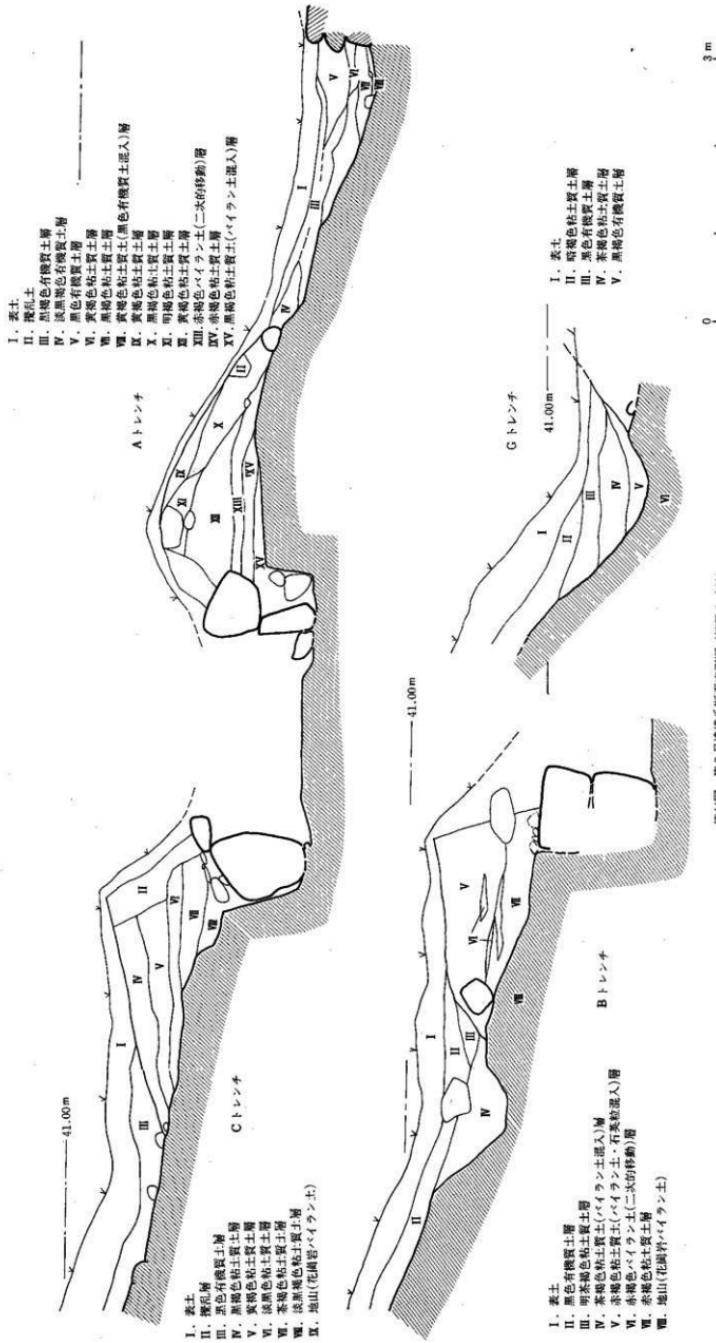


第43図 第8号墳埴丘裾・列石及び馬蹄状溝関係図(縮尺1/100)

る。北側には溝状造構は認められないが、7号の馬蹄状溝の南端が本墳の埴丘北西コーナーに接続し、また墓道が幅から1.2~1.5mのところを平行しているため、後出の7号埴築造にあたって削除されたことも予想される。断面形はB・Cトレンチにおいては浅皿状をしめすが、Cトレンチではテラス状を呈し溝というよりも削り出し的な手法である。

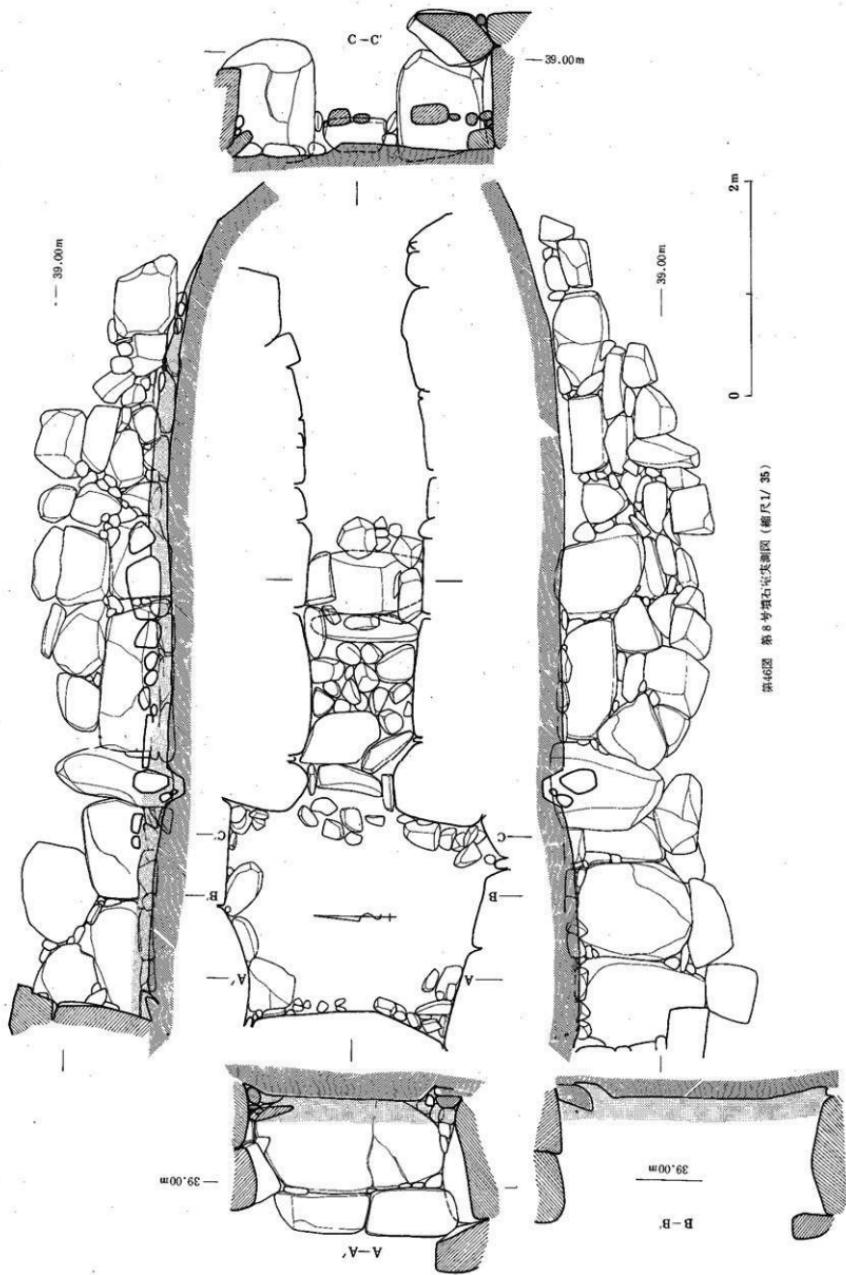
b. 墓丘および墓壇（第43・44図）

I~IV区を完掘し、墳丘裾部プランを明らかにした。墳丘南・北側埴丘裾は直線状を呈し東部裾部と隈丸をとりつつほぼ直角に交じわるが、西側裾部は半円形をしめす。つまり西



第44図 第8号煤礦丘断面実測図 (縮尺 1 / 80)

第46图 第6号块石层剖面图(比例尺1/35)



側を除いては直線のプランをしめし、方形墳状をしめすようでもある。東および北側裾部は、地山面を削りとった斜面上端より封土盛土が行なわれている。後述するようにこの部分には大ぶりの転石を利用した列石が土留め様に配置されているところである。東側巾で8.80m、A・Cトレンチ間では9.40mを測りやや膨むが、これは南側裾部の張り出しのためである。東西径は主軸線上で9.90m、南・北側裾とのコーナーは丸みをおびて一定しない。墳形は発掘調査前の観察とは異なり、不整な四辺形とでもいった形狀をしめしている。

墳丘封土の盛り上げ方は一般的な構築方法である。すなわち墓塙内の石室壁体は墓塙との間に埋土を行ない安定を計り、上面に表出する壁体とは盛土を行ないつつ交差に行なわれている。A・Cトレンチにおける層序の傾斜はかかる造作をしめしていると考えられる。Bトレンチも同様であるが、地山傾斜の関係上層序角度は水平位に近い。

現存する墳丘は墓塙底面より3.40mを測り、盛土部分は1m前後にすぎないが、築造原形は天井石の架構を含め、更に1mほどの盛土高を推定せねばなるまい。とすれば盛土高はおおむね2m前後、石室の開口する墳丘東側の裾よりは4m近い比高を有することになり、盛土部分以上に視覚に訴えるところは強い。

墓塙はすべて地山面上よりの掘り込みである。トレンチのみの観察で全体のプランを知りうることはできないが、大略石室プランに相似することは多くの類例から推定しえよう。A・Cトレンチで4.90mの巾をもつ。地山傾斜のため掘り込む深さは一定せず、Bトレンチで1.20m前後を推定し、またA・Cトレンチでは0.5~0.8mを測る。底面は石室開口方向にゆるく傾斜するが、おおむね水平位である。玄室内および通道中ほどまでは腰石の配置にあたって底面を更に一段穿っていることから断面形は低い台形状を呈している。石室壁体との間隙は密着するほどでもないが比較的狭い。

c. 墳丘裾部と裾を繞る列石（第43図）

石室の開口する墳丘東側裾部および北側さらに西側裾部に転石を配した列石が存在する。東側と北側の列石は直角に折れ曲がり接続するが、西側の部分は4mほどの部分的なものにすぎず南側には全く存しない。この部分は調査中の観察から攪乱を受けて失なわれた痕跡はなく、当初から配置をみなかったものであり、裾部列石は6・7号墳同様全体を囲繞するものではない。

東側列石は通道入口部壁面に接続し南北に延び、南側は二石の配置をみるとその先はない。北側は50×60cmの不整形の転石を地割様の地山削り出し上端部に沿いつつ配貯しているものの面をそろえるような造作ではなく、その接合も雑である。北側裾部は北東隅付近では接するように配置され、2mばかり先では点々と配される程度で北西隅部ではなくなる。

西側裾部列石は正確にいえば裾に配されたものではなく、墳丘封土中に没している。先述のようにこの部分は4mほどの長さに中央よりやや南に偏している。使用された転石も人頭

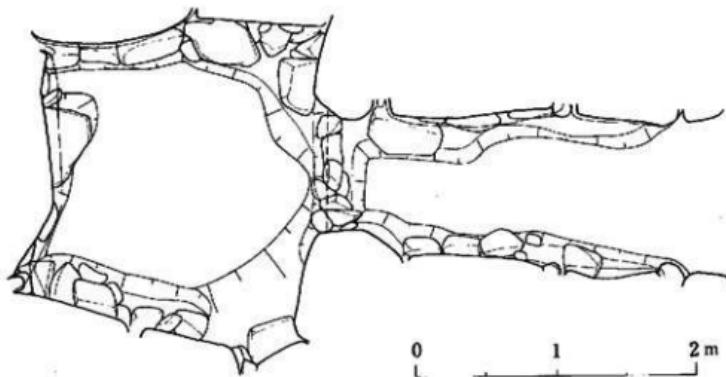
大様の小ぶりのものを密に配列されており、一石のみちょうど石室主軸の延長線上に40×90cmの大ぶりの石を据えている。Bトレンチの観察から列石上の埴封土は薄く覆う程度にすぎない。また東・北裾部の列石が削り出し上端に配置せられるが、西側はやや内側である。

・(3) 内部構造(第45~47図)

内部主体は実測主軸S 88° E、ほぼ東に開口する両袖型横穴式石室である。玄室面積は4m²に満たない程度の小規模のものであるが、袖部より5m以上の狭長な狭道部を付設し、石室全体の構成は特異な平面四角をしめしている。石室の現状は破損度著るしく、玄室は周壁腰石及び2段目までの石積みが残り現存高は床面より1m前後である。狭道部は側壁が比較的良く残り、また閉塞施設も原状近く残存している。天井部は玄室、狭道とともに一石の架構も残っていない。床面についても狭道部は仕切石より先端部まで大半が閉塞施設下ということで敷石が残存するが、玄室内は各隅角にあたる位置に数個の敷石を残すのみである。

玄室プランは奥壁使用石材に規定された如く奥壁部巾よりも前巾が広くとられ、また玄室長は前巾より小さく台形状を呈している。奥巾1.76m、中央巾(奥壁より1mのところで)2.30m、前巾2.23mを測る。奥壁腰石が未加工転石のため左隅角が相当外側に張りだしており、左右側壁はその長さを違えている。左壁2.15m右壁では1.95mを測る。袖石の間には60×20cmほどの細長い転石をもって仕切りをなし、奥壁よりその前面まで2.17mである。

級上奥壁腰石は一石の配置であり2段目には45×80cmほどの長方形の整った転石を二石積み上げ、隙間に小形の転石をもって充填し安定を計っている。側壁との接合には用材の傾角をそれぞれ合わせるように接合しており、奥壁で14°、左壁12°、右壁8°の転びをもたらせ内傾をしめしている。左壁2段目は奥壁腰石とブリッジ状に架構せられている。



第45図 第8号墳石室床面下構造(縮尺1/40)

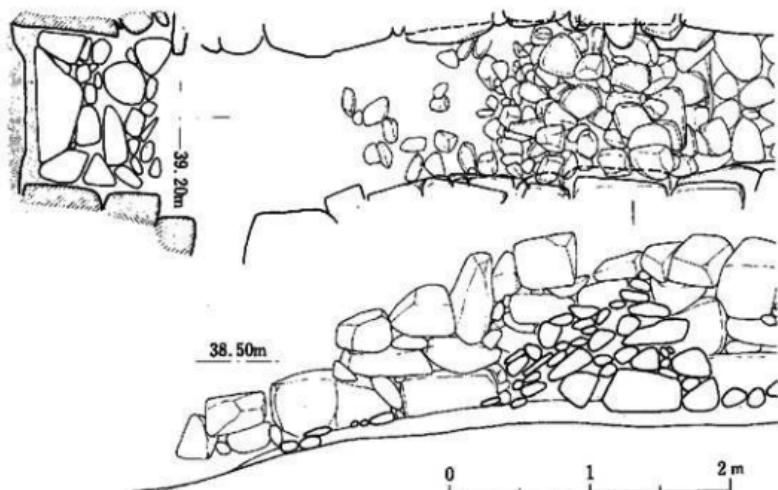
側壁は壁面構成において左右に若干の違いをみせる。すなわち左壁腰石はいづれも $0.9 \times 1.1m$ ほどの転石を縦位に据え三石構成をとるに比し、右壁は同様の転石を横位に据え二石構成をしめしている。ために腰石高は左壁が高いが、右壁では腰石上2段目積石高がちょうど左壁高に一致する如く造作されている。

袖は左右とも未加工転石の半坦面を利用し配置される。その位置は必ずしも主軸にシンメトリーではなく、やや左壁よりに偏している。巾は自然石使用の限界から一定せず、壁面突出間で73cm、玄室寄りの稜角間では97cmを測る。前述した如くこの袖石間に仕切石の配置がみられるが、床面下諸造作に関連してきわめて企画性に富んだ位置にある。すなわち、玄室周壁は腰石の配置にあたって墓底底面を一段穿ちその安定および腰石上面のレベルの一定を計り、更に仕切石の下部には袖石間をつなぐように上端巾35cm、深さ15cmの溝を穿っている。

溝中は20~30cm前後の転石を配列し、その上に仕切石が配置されている。この仕切石の位置は、床面造作前、石室構築過程のうちに孕まれ企画されたものと考えられる。

藻道部は入口部壁体構成が左右異なり、ために右壁4.83m、左壁5.05mとその長さを違えている。とりわけ右壁入口部腰石は小ぶりの転石を壁面に合わせることなく斜めに据えているほどである。さて壁面の構成は右壁に比して大略左壁は雑である。また左右壁とも袖石より腰石二石およびその前面に配された三角形状の根石を境にして前後二分された壁体構成を認めることができる。この三角形状の根石は左右対称する位置にあり、またともに腰石底面よりも15cmほど高い位置に据えられており、意識的な配置をみせている。袖石よりそれぞれ2.65mのところであり、その巾1.05mを測る。右壁腰石1石は、底面に大きめの栗石を配することによって上面レベルを一定にし、壁面は上下方向にUの通った通目積みの傾向が強く認められ左壁とは異なっている。藻道壁線は継上のように三角形状の根石まではシンメトリカルな直線をしめすが、その前面から入口部にかけて壁線はほぼ平行しつつも北側へのカーブをとつてゆるく方向を変えている。腰石も大ぶりの整った転石を使用せず雑な構成であり、床面も入口部に向つて徐々に傾斜している。つまり三角状の根石をメルクマールとして壁面構成は雑に、壁線の方向は北にカーブし、また床面も傾斜するという変化をしめしている。かかる藻道中における壁体構成の変化は天井部架構に対する重力にみあつた技術的配慮にその要因を求むるべきであろうか。したがつて、天井石の架構は三角形状の根石を指標としてその位置は既に藻道腰石配置の企画中に孕まれていたと推定され、天井石先端は藻道入口部とは一致せず藻道中ほどにあり、入口部付近は野外に露出することになろう。こうした推定はまた残存する閉塞施設の位置からも裏付けられる。

閉塞部は袖より1.55mから2.6mの位置、ほぼ1mの間に人頭大の転石をもつて積み上げられている（第47図）。玄室方向の裏側は大ぶりの転石を石垣状に組み上げているが、入口部方向は粗雑でありその境を明瞭に区分してはいない。現存高は床敷石面から55cmほど



第47図 第8分塊閉塞部実測図(縮尺1/40)

であり、当初は更に20~30cmぐらいの高さをなしていたものと考えられる。

羨道部床面は仕切石によって境をなすが玄室部よりも大ぶりの偏平な転石を敷き詰め間隙には拳大の転石を充填する。その先端はちょうど閉塞部下に埋没しているが、左右側壁間に $0.6 \times 1.0\text{m}$ の大ぶりの転石を配置し、前面床面とは20cmほどの段をなし上り棚状を呈している。奥壁よりその前面まで4.20mを測り、企画性をもつ位置にある。

(4) 遺物出土上状態(図版18)

前述の如く石室内の擾乱が著しいために、副葬遺物も当初の位置を示すものはない。玄室内では右袖部隅から馬具の出土があったが、尾銃および鏡金具と推定される一部のみであり、副葬時馬具のすべてを示すものではなかろう。また左側壁の奥壁よりのところに床面敷石の間隙から落ち込んだものであろうか、栗石上より鉄製スキ先の出土があった。床面上擾乱層中よりは須恵器、土師器および鐵鏃の破片が認められた。

羨道部中からは遺物は検出されなかったが閉塞石前面には床面上に黑色土の堆積があり、その上面にも若干の須恵器片が検出された。

西南墳丘コーナーには土器溜めと言いうような状態で須恵器大甕・壺、土師器高壺等が出土した。大甕についてはおおよそ6個体分の破片が混在しているが、いずれも破損状態からして、埋葬時墓前祭に關係し意識的な破碎がなされたものと推定される。この大甕を復

原したところ、2個体について焼成後の底部穿孔が認められることからも、一定の祭祀用器として転用されたことが知られる。また墳丘前面の北側列石中より土師器高杯が出上し(図版18-2)墳丘中位あるいは墳頂部に須恵器、土師器等の配置が想定される。

出土した遺物を列記するとつぎのとおりである。括弧内のナンバーは石室内より出土したものを示す。

それ以外の遺物は墳丘裾部、大半は西南隅付近より出土したものである。

容器 須恵器(第48図15、16、17) 土師器(第52図1、2、3)

武具 鉄鎌(第53図4、5、6)

馬具 尾銃(第53図1) 鐵金具(第53図2) 不明品(第53図3)

農具 鉄製スキ先(第53図7)

(5) 出土遺物

須恵器(第48・49・50・51図)

壺 蓋 I類(1) 口径13.5cm、器高3.9cmを測る。口縁部は1.5cmほどの高さにゆるい棱をもち外反する。口縁部は横ナデによって外に突きだすように丸くおさめられる。天井部は丁寧なヘラ削り調整が行なわれヘラ記号をもつ。色調は黒色を呈し、胎土に細砂を含む。焼成は良好、堅緻である。

II類(3~6) 3は口径12.6cm、4~6は12.1~12.3cm、器高3.4~3.6cmを測り同様な作りである。天井部は凹凸であり、口縁部との境は不明瞭であるが、いずれも弱い棱線をもちやや外反ぎみに聞く。口縁部は高いもの(4・5)と低いもの(3・6)に分けられるがその差5mmほどである。3を除いて天井部はヘラ切り離し後のヘラ調整が施され、平坦に形づくられる。4~6は位置に多少の違いが認められるが、全く同様のヘラ記号をもつ。器形および焼成がともに不充分で、いわゆる生焼けの状態であることから、同一工人の手による同一窯の製作と考えられる。口縁部は横ナデ、天井部内面にはナデ調整が行なわれている。3は灰色を呈し、焼成は良好、堅緻な上りをみせるが、他は暗褐色を呈し焼成は不充分である。胎土は細粒を含む。

III類(15) 身受けの内面のかえりをもつものである。口縁部のみの破片であり全体を知りえない。復原径14.9cm、かえりの口径12.4cm天井部には凝宝珠状のつまみがつくものであろう。かえり基部はするどく沈線状を呈し、内傾ぎみに直立し先端は尖って、口縁部より下にかかる。内外面とも横ナデ調整され、薄手の仕上げである。暗褐色を呈し、堅緻である。

壺 身 I類(2) 口縁部の破片である。復原最大径14.2cm、たちあがりは1.1cmを測る。口縁部は横ナデ調整、外湾ぎみに直立し先端は尖る。たちあがり基部下はくぼみ棱線が入る。体部はヘラ削り調整がみられ、全体にシャープなつくりでありII類以下とは区別される。灰褐色を呈し、胎土に細粒を含む。焼成は良好堅緻である。

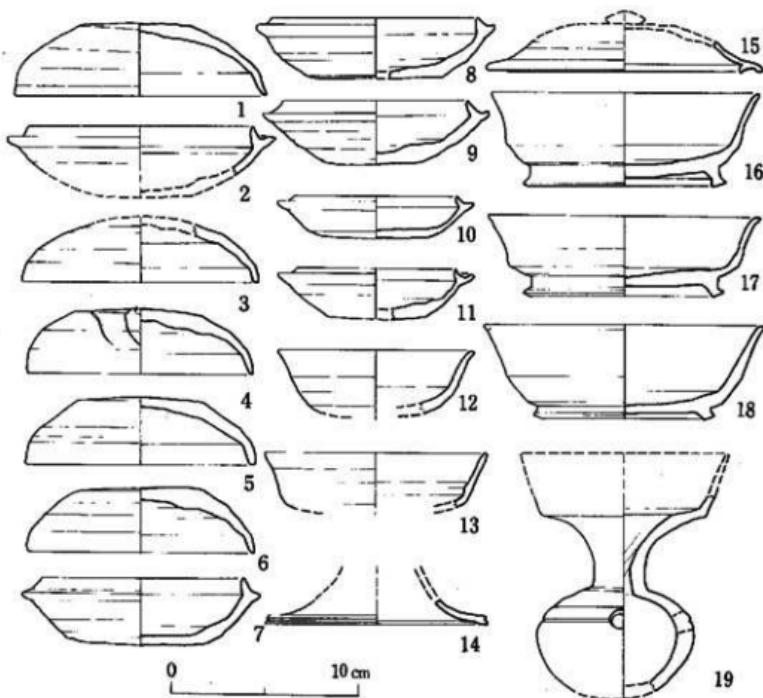
II a 類 (7~9) 最大径12.1~12.7cm、器高 3.5~ 3.6cmを測り、たちあがり高は9mm程度である。たちあがり基部がゆるいカーブをしめし綾線の入らないもの(8)がある。7、8は断面三角形、直立し先端を尖らせている。9は内傾し基部綾線はするどく、蓋受け部には沈綫が続る。7の蓋受けは下外方に向きダレた感を与えている。底部のつくりはそれぞれ異なり、9はヘラ切り離しのままであり、8は若干のヘラ調整を、7は丁寧なヘラ調整が施されヘラ切り離しの痕跡を留めない。7は赤褐色を示し赤焼き須恵器と称されるもの、8は灰褐色で焼成不充分、9はねずみ色を呈し焼成は良好、堅緻である。胎土には小砂粒を含み、8に著しい。8、9は底部にヘラ記号をもつ。8は坏蓋Ⅱ類と同じ記号でありセットになる。

II b 類 (10~11) 最大径10.4cm、口径 8.4~ 8.8cm、器高 2.3~ 2.7cmを測る。全体に扁平な感を呈し、きわめて小形である。たちあがりは4mm程、細身で外湾ぎみに内傾する。先端部は尖らせている。蓋受け部は上外方に鋭く延びる。口縁部、体部は内外面とも横ナデ調整による仕上げである。底部はヘラ切り離しのまま未調整であり、内面にはナデ調整がみられる。色調はねずみ色、胎土は小砂粒を含んでおり、焼成は充分である。10には先端の丸い器具によってヘラ記号が付されている。

III a 類 (12~13) 平底のものである。ともに底部は一部を除いて消失する。体・底部の境は丸くカーブし不明瞭である。12は口径11.9cm、口縁は外反し、先端は上外方に引きだされ丸みをもつ。13は口径10.5cm、体部内面に段をつくる。口縁部は直線的に外反し先端は尖りぎみである。口縁部は内外両とも横ナデ、底部内面はナデ調整が行なわれる。底部は手持ちのヘラ調整である。13は灰褐色で焼成は充分、12は赤褐色を呈し、甘い。

III b 類 (16~18) 高台をもつものである。口径14.3~14.9cm、器高 4.3~ 5.0cmを測る。高台径は10.5~10.6cmと同様な大きさであるが、高さは0.6~ 1.1cmと違いがある。高台はその位置によって、体部、底部の境に貼付されたもの(16)と境より内側のもの(17~18)と異なるが外方へ広がり安定感をもつ。高台のつくりはいずれも先端部が上外方に跳ね上がるよう延伸されているが、16はその度合が弱い。坏底部との接合は内外側ともに横ナデによって行なわれ、16では接合面の一部を残す。底部と体部の境は明瞭に画され、17は体部下位に、16、18では中位に綾線が入り口縁部につづいている。口縁部は外反し、いずれも横ナデ調整を行ない、先端を外方に引き延ばしやや丸みをもっておさめられる。底部はヘラ削り調整が、底部内面には荒いナデ調整が施されている。18は灰褐色を呈し焼成は不充分16、17はねずみ色で、焼成は良好で堅緻な焼き上がりをしめす。胎土中には細粒のほか、径2mm位の小石を含む。なお16、17の底部にはヘラ記号をもつが、同じものではない。

高 坏 (14) 脚端部のみの破片である。推定直径11.9cm、ゆるく延びる裾は退化したかえりをもち、一条の沈綫を繞らせる。内外面とも横ナデ調整である。色調は灰色を呈し焼成は充分である。胎土には小砂粒を含む。



第48図 第8号墳出土須恵器実測図 I(1/3)

肆 (19) 口縁上端および胴下部を欠失する。口径11cm、器高13cm前後を推定する。頸部はゆるく折れ曲がり、やや内湾ぎみに外反する口縁部につづく。内面はくぼむ程度で鋸く線は入らない。胴部は最大径8.4cmを測り、中位やや上のところに沈線を繞らす。頸部から胴部はゆるくカーブを描き、肩部に弱い段が付される。沈線と段の間にはカキ目が施されている。頸部内面にはしばり手法による胎上の圧縮移動痕がみられるが、外面は横ナデである。胴中位より下はヘラ削り（ヘラ研磨に近い）が行なわれている。色調は灰褐色を呈し胎土に小砂粒を含む。焼成は良好、堅緻である。

肆 (第49図20～第51図25) I類 (20) 小形品であり、底部には焼成後に穿孔されている。口径12.6cm、胴部最大径31.4cmを測る。底部孔は径8.5cm前後の楕円形で、穿孔後に綿密な

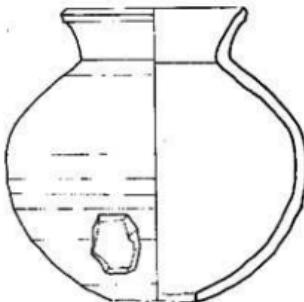
高対打によって割れ目の凹凸を整えている。頸部は外反し、口縁端は内湾ぎみに尖る。外面は段をつくる。頸部下はくの字状に折れ、ゆるいカーブを描いて球形の胴部を形づくる。口縁部から頸部は横ナデ、頸部下から胴部下位まではカキ目調整が行なわれている。以下はヘラ削り調整が施されているが難である。胴部内面は横ナデ下部にはナデが施され叩文は認められない。色調灰色であるが器面の半分近くに褐色の自然釉の付着がある。胎土は小砂粒を含み、焼成は充分である。なお胴下部の器面に同心円叩文の施された他の土器の付着があり、これは窯内焼成の際の配置ミスによって生じた結果によるものであろう。

II a 類 (22・23) 口径は20cm前後で、22の器高は37cm、23は40cmを超す。頸部は他例に比して短かく、やや外反している。口縁部外面は肥厚してゆるい段をつくる。胴部最大径の位置によって胴部の形態はわずかな違いをしめしている。仕上げの調整手法は類似している。22は頸部下より荒い平行条線叩文を胴下位まで施こし、その上面に更にカキ目調整を行っている。以下はカキ目に一部重複しながら平行条線叩文が施されるが、底部近くでは横位あるいは斜行に行なわれる。内面叩文は密であり、横位に揃え平行している。施文方向は左→右で、ずらしながら施される。23は強い叩きしめが窺える。外面の調整は、頸部直下にカキ目を行なわないこと以外は22に等しい。内面の同心円叩文は荒くアト・ランダムのようであるが、接合部付近はより密の傾向がある。22、は底部穿孔が行われている。23は不明。22は灰色を呈し焼成は充分であるが、23は甘く灰褐色である。胎土には小砂粒を含む。

II b 類 (24) 頸部のみの破片であるが、頸部径、高からみて相当の大形品のようである。頸部はやや外反ぎみに直立し、ヘラ描きの沈線が2本続く。頸、胴部の接合の仕方は、胴部の上に頸部を置き、内側から指頭による押圧が加えられている。灰色を呈し頸部外面に黒色の自然釉がみられる。なお頸・胴部の胎土には歴然とした違いが認められる。頸部は精選され緻密であるに比し、胴部には砂粒の含有が多い。

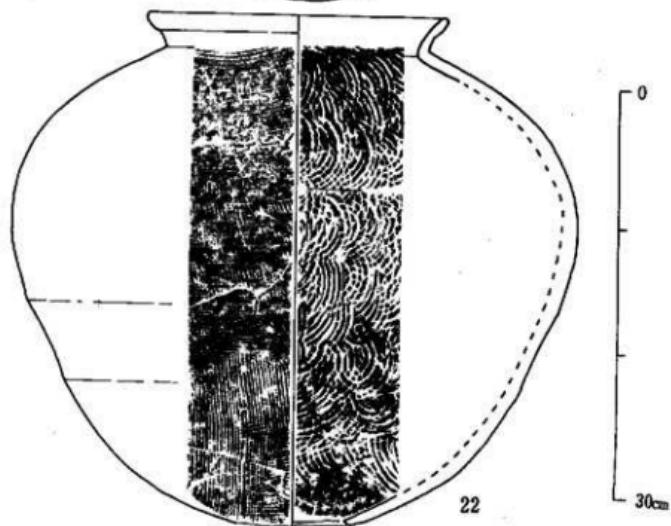
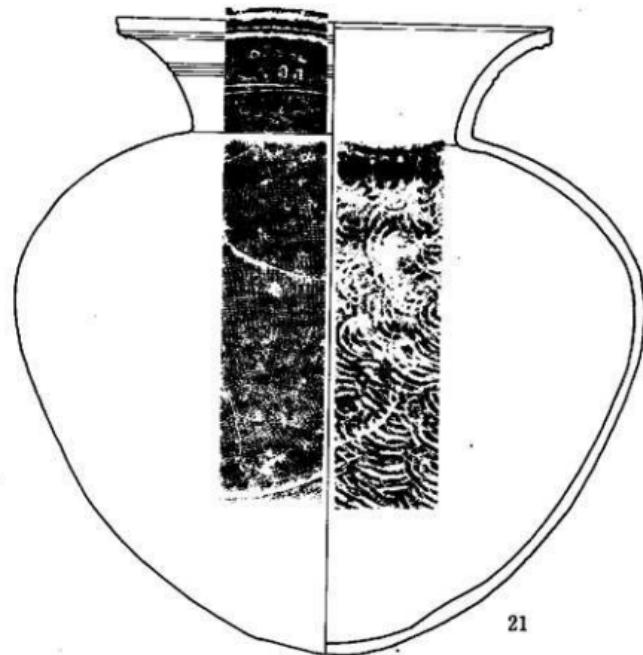
II c 類 (25) 胴部を欠失する。a 類よりも頸部は直立に近くなり、肩は強く張る。口径18cm、口縁部は肥厚し、下端を引き延ばして突堤状につくっている。胴部・頸部の接合の仕方は、互に端を合わせ、その間に粘土を挿入して安定を計ったようである。色調暗赤褐色を呈し、焼成は充分である。頸部外面には黒色の自然釉の付着がある。

II d 類 (21) 口径31.2cm、頸部径20cm、器高45cmの大形品である。頸部は大きく外反し、



20

第49図 第8号墳出土須恵器実測図II(1/4)



第50圖 第8号出土須恵器実測図Ⅲ(1/4)

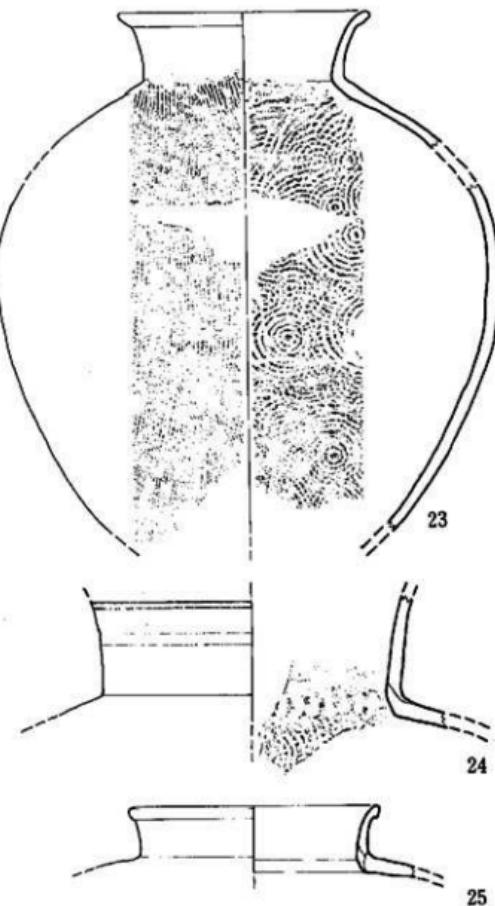
口縁部端は引き上げることによって突帯状に尖らせる。外面は肥厚し、下部に沈線が繞る。頸部にも2条の沈線が入るが、その間は無文。胸部最大径は50cmほどで胴部のやや上位にあり、底部に強く狭まる形態である。胸部外面は目の細い格子目印文を水平位に施すが、下部は乱れる。内面の同心円印文は密である。色調は黒褐色で焼成は充分、堅緻な焼き上りである。胎上には小砂粒を含む。底部は完存し、穿孔はみられない。

土師器（第52図）

坏蓋 I類（1） 口径12.3cm、器高3.9cmで、天井部は手持ちのヘラ調整が施され丸みをもつ。口縁部天井部との境に弱い棱を付し外反ぎみに直立する。先端部は横ナデによって内側を削りとるようにするどく尖りぎみにおさめる。口縁部内外面及び体部外面は横ナデ後にヘラ研磨が施されている。赤褐色を呈し、胎土は緻密であるが小砂粒を含み、焼成は充分である。外面には

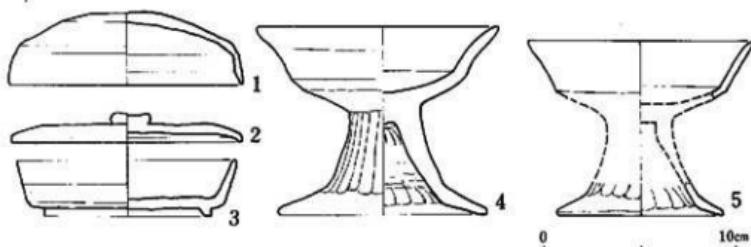
丹の付着があり、丹塗されたことがしられ、天井部にはヘラ記号をもつ。

II類（2） 口径12.2cm、器高2.5cmを測る。坏身（3）とはセットをなす。天井部凝縮珠状つまみは上面がくぼみボタン状を呈する。口縁部は扁平な天井部の端を下方に引き延ばし先端は丸くおさめられている。天井部にはヘラ調整が、口縁部は内外面とも横ナデ調整後



第51図 第8号墳出土須恵器実測図IV(1/4)

にヘラ研磨が施されている。茶褐色を呈し、胎土は緻密である。焼成は充分になされ良好、緻密な焼き上りである。



第52図 第8号出土土器実測図(1/3)

坏身

(3)の蓋Ⅱ類の身にあたる。口径11.6cm、器高3.0cm、高台径8.8cm、高5.5cmを測る。底部・体部の境はヘラによる面取りが行なわれやや丸みをもつ。口縁部は外反し先端は丸くおさめられている。高台は付高台であり、底部のやや内側に付されて、断面は丸みをもち直立する。接合面は横ナデによって整えられている。口縁部内外面は横ナデ調整後横位方向のヘラ研磨が、底部内面もナデの後にヘラ研磨が施されている。底部はやや荒く、ヘラ切り離しに若干のヘラ調整が行なわれている。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

高坏(4・5)4は口径12.3cm、器高10.1cm、厚手である。坏部中位に綫を付し口縁は大きく外反する。脚部は外反し、脚端にカーブを変えて外下方に折れ上がる。坏部は内外部ともヘラ研磨、脚部は内面斜めの、外面は継位のヘラ削りが施されている。

5は坏部上半と脚端部であるが胎土・焼成からみて同一個体と推定される。口径12cm、脚端径9.0cmを測り、器高は4よりやや小さめのようである。器形および整形手法は4と同じであり薄手の仕上げである。4・5ともに赤褐色を呈し胎土には小砂粒を含む。4は焼成は充分であるが5は甘く器面の剝離がみられる。

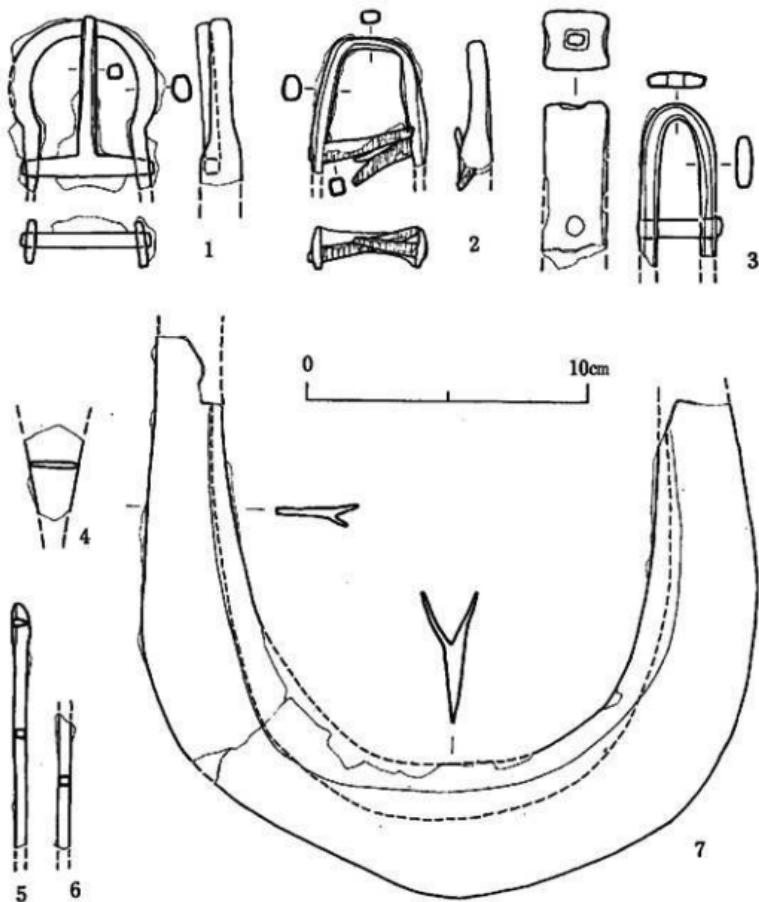
武具(第53図4~6)

鐵鎌(4~6)3点とも玄室内擾乱層中からの出土である。I類(4)身の破片である。刃部は円、方形どちらとも知れないが広根斧箭式に属し、平造りである。

II類(5)片小瓜両丸造である。範被下を失する。身背辺は幾分外に膨みをもち、鋒は尖らず丸みを帯びる。6は断面形より4あるいは5とは同一個体のものとは考えられない。

馬具(第53図1~3)

尾錐(1)どの部分に付属するかは不明である。梢円棒状のものを挿状に折りまげ基部は打ち広げ形づくる。刺金は断面四角形をしめし横軸に付属せられたもの。帶を通す部分はC



第53図 第8号墳出土武具・馬具・農具実測図(1/2)

字形を呈し、基部はややハの字状に広がるようである。

鍍金具(2)鍍木製部の上端について力革に連絡させるものである。梢円棒状のものをコの字状に折りまげ形づくる。端部は完存しないが打ち広げられ、その広がりをみせるところに両側より銅が打ち込まれ木質部との固定を計っている。挿図左側からは一本の、右側からはやや

短かめの鉄が2本接して打たれている。

不明品(3)巾2.5cmの扁平な鉄材を1.5cmの巾に両側の平行するように折りまげ形づくったものであるが完存の形は不明である。折りまげた先端部には3×6mmの孔が穿たれ、また端より4cmのところに両側板に貫通する鉄が打たれ、木質が付着する。その形状からして鏡板立耳に接続して面蒙革帶との間に付する金具に似るが、鉄に木質が残ることから無理でまた、上述の鏡金具ともみられるがいかなるものであろうか。

農具(第53図-7)

鉄製スキ先(7)耳部先端を欠失し完存ではない。刃部巾21.5cm、耳部現存長20cmを測る大型品である。

先端部がやや尖るもの全体的にはU字形を呈する。現存する耳部はほどなく端部を形づくるものと考えられ、したがって耳部、刃部にはほぼ同じ長さをとるものであろう。内側は耳部端に向って斜々にその巾を減じつつ二股に分かれ、その間にスキ木質部を挿入する。二股の間には木質の残存を認め、木質との固定にあたっては二股に分れた側面を打ち込むことによって造作されたものと推定される。側面は挿団中に付きなかったが湾曲ではなく直線を呈する。器厚は刃部・耳部とも一定しており、刃部は多少の膨みを感じるが先端はするどく尖る。木質本体の厚さは接合部断面の観察から1.8cm以上を推定する。

(6) 小結

本墳は鳥越C支群の南端に築造され、両袖型横穴式石室を内部主体にもつ。墳丘の構築にあたっては、斜面の高い側を削りとり、また低い側も削りだすことによって大略を決定する地割方法がとられている。石室は墓塗内に配置され、小型であるが整然とした平面四角形をしめし、企画にあたっては高麗兜使用がなされたと考えられる。玄室奥巾・長とも5尺、狭道入口部巾3巾、袖巾2尺、狭道長15尺をそれぞれ割りつけている。また墳丘築造にあたっても任意な構成によるものではなく、石室同様に企画性が窺える。

出土遺物は、石室内は著しい破壊のため副葬状態は知りえない。玄室よりは、馬具および鉄製スキ先が出土した。スキ先は内巾20cmを超す大型品で、福岡平野内の類例は少ない。^(註1) 墳丘西南隅からの須恵器の出土は墓前祭の一端をしめすものとして示唆的である。甕は大小6個体ほど認められたが、うち2個体については底部に孔が穿たれており、容器本来の性格を失ない、仮器として供獻されたものであろう。また出土した須恵器甕は、形態・整形のちがいから3類に分類された。I類は口径13cmを超え、身のたちあがりは高く、整形にも底部・蓋天井部にはヘラ削りの両調整が行なわれる。II類は口径12cm前後と、9cm前後のものと2分される。切り離し後の再調整には必ずしもクロ回転のヘラ削り調整は行なわれず、未調整あるいは手持ちのヘラ削りなどの手法をとる。III類は平底、付高台のものである。高台甕は口径15cmほどで、高台のつくりから藤原京出土のIIb類に相当しよう。一應I類はIII期^(註2)

II類はIII期～IV期、III類はVI～VII期に比定されよう。また土師器（1・2）は薦輿⁽¹⁾遺跡に類例があり7世紀後～8世紀の所産と考えられる。従って本墳の造営はIII期6世紀後半代に求められ、ひきつづきVII期8世紀前半代まで追葬等によって使用されたと考えられる。

（註1）他に高崎2号墳（「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会1970）倉瀬戸7号墳（1971年別府大・福岡市教委調査）、大平田2号墳（1969年調査・三島による）がある。

（註2）「藤原宮」奈良県教育委員会1964

（註3）「薦輿」遺跡、「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会1970

IX 第6号～第8号墳（鳥越C支群）のまとめ

（7）第6号～第8号墳（鳥越C支群）のまとめ

はじめに各占墳の造営時代は、6号墳と8号墳がはそれぞれ6世紀後半代それも末葉に相前後して築造され、7号墳は遅れて7世紀前半代に6・8号墳の間に築造された。

各古墳出土の須恵器は2～3型式にわたり、それぞれ数次にわたって追葬等に利用されたことが知られる。6、7号墳は7世紀のおわり頃まで、8号はやや遅れて8世紀代まで使用されている。

第2に、墳丘裾を相接するように3基並列する立地のあり方は、3基に葬られた集団の近密さに示唆的である。いずれも内部主体は横穴式石室であり、また墳丘形態、築造方法も同一に類しており、立地上の違いあるいは石室規模等からの古墳そのものの性格の違いは見いだしえない。また副葬遺物も大半を欠いているとはいへ後期群集墳に通有のものであり、その優劣を分ちがたい。ただ7号墳は後出しながらも6、8号間の狭い空隙を占地したため、墳丘規模・石室規模において一まわり小さめである。むしろ問題はこのような無理ともいえる占地の仕方であろう。この様な状況は造営年代がほぼ一世代の差をもつことから6あるいは8号墳当初被葬者との血縁的な連がりを想定することもできる。佐田茂氏は後期群集墳の追葬にあたって同一古墳内へは、主被葬者（家父長制的世帯共同体の家父長）の同郷戸内で戸主との関係の強い人々を推定されているが、経上⁽²⁾7号墳の新たな造営の要因を6・8号墳被葬者の直系家族に求めることができないだろうか。

第3に墳丘の築造にあたっては、いずれも斜面（高い側）の地山を削りとてその内側に墳丘封土の盛り上げを行っている。かかる造作は時間平行的に他の部分の削りとり、あるいは墓広の設定、掘鑿過程を伴うものであり、削りとられた大きさはそのまま墳丘の大きさそのものを規定する相乗的な関係にあることから、地割制作の一過程に孕められよう。その形状は主に墳丘斜面側（高い側）に半円するよう認められることから馬蹄状溝という名称が与えられている。また一概に地割的意味に限定されず、封土盛り上げ後に視覚に訴える要素

も十分勘案されていたことも推定される。このような手法は斜面に墳丘を築造する場合には通有なものと思われ、墳丘を全面露出させる調査が多い今日、類例は増えつつある。

第4に石室は短形の玄室に狹長な羨道部を付設するが、6、8号墳は高麗瓦を使用し、石室の平面岡形構成の企画は大略一致する。

更に主軸方位が一致する。

また出土遺物は3基とも盗掘を受け当初の副葬品を刷うことはできない。玄室内からの遺物は装身具は耳環・玉類のみであり、8号墳より馬具および鉄製スキ先が出土している。

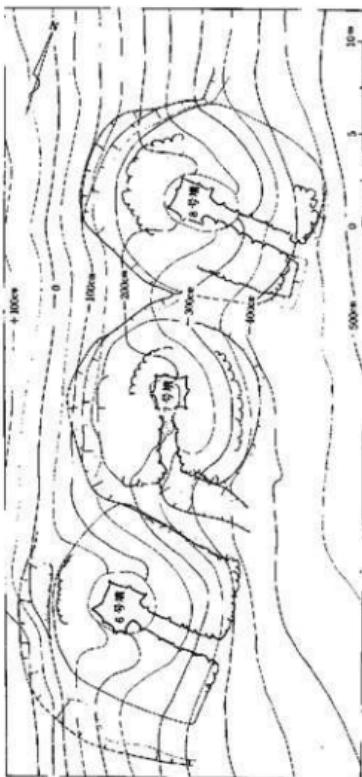
6・7号墳からは馬具の出土はない。また3基共通して直刀の出土ではなく、わずかに刀子と鉄鎌が認められる程度である。各墳共通して6・8号墳丘西南隅の裾部より多量の須恵器・土師器が出土した。6号墳では2個体の須恵器、甕が8号墳では6個体分ほどの同様な甕が意識的な破碎を受けたと推測される出土状況をしめしている。7号墳も同じく石室入り口から続く石組みの端、ちょうど西南隅のところから土師器の甕が3個体分ほど出土し、また裾に堆積する黒色土中からは須恵器甕が4個体出土している。これらの甕についてみると、7号墳と8号墳のものに底部を内側より穿孔し、更には割れ口を研磨しているものがあり、遺物出土状態等合わせて墓前祭に使用されたものであろう。また7号墳より手捏ね、および土玉の出土も同様の祭紀に間連しえよう。

(註1)

第54図 第6号～第8号墳(鳥越C支群)関係図(縮尺1/300)

佐川茂「群集墳の形成とその被葬者について」

『考古学雑誌』58-2 1972



第4章 片江古墳群をめぐる問題点

I 古墳の築造について

横穴式古墳の築造諸過程は技術的側面に限れば次の如く推定しえよう。即ち、立地の選択、墳丘地割開始、および造作（濠・墳被の削りだし、墓塚掘鑿等）、石室の径始、石室壁体構築（封土盛り上げに併行）、天井石の架構、封土の盛り上げ、墳丘整備と装飾（葺石・埴輪等）に及ぶ体糸的な作業であって、築造にあたっては周到な企画を予想しうる。前方後円墳の企画については先学諸氏によって明らかにされてきたが、本古墳群の如き群集墳には一定の企画については予想されつつも未だ具体的な分析を見ていません。幸い今次調査において6～8号墳の3基について全掘しえたので、それらを資料としつつ若干の分析を試みておきたい（各古墳については第3章VI～VIIIに詳述したので参照されたい）。

第55図は墳丘プランの方眼による操作結果である。方眼1単位は玄室巾・長に各墳共通する5高麗尺（7号墳については疑問があり後述する）をあてた。これは尾崎喜左雄氏によつて推定されている大化二年のいわゆる薄葬令にいう墳丘を測るに用いた「尋」なる尺度を、1尋は5高麗尺を置き替えたものとされた尺度に一致し、1方眼1尋ともしえよう。

トレースした墳丘図に綫上の方眼を重ね合わせスライドしながらその適合関係を検討すると、石室主軸方向は方眼横線と平行しておりまた墳丘各部も予想以上に方眼網に一致することを知りえた。以下詳述する。

6号墳は裾部プランは必ずしも円形ではないが、縱6単位、横6単位の中にはば周縁され、かつ墓塚の位置も横線に一致し2単位をとっている。石室の主軸は横線の中央のものにはば一致し、石室と墳丘企画の関係を示している。また地割造作と推定される馬蹄状溝の上端は墳丘裾より更に西に1単位延長した輻線に一致している。後道入口部からに配置された列石は、南側は線上に一致するものの北側は線外に突出している。これは左壁では石室全長20高麗尺にあてたものを右壁で1尺引き延ばしたことによって生じたものでいささか理解しにくいところであるが、墳丘西側に配置されている列石との間がちょうど30高麗尺（6単位）にあたっており、列石配置上の配慮によるものとも考えられる。

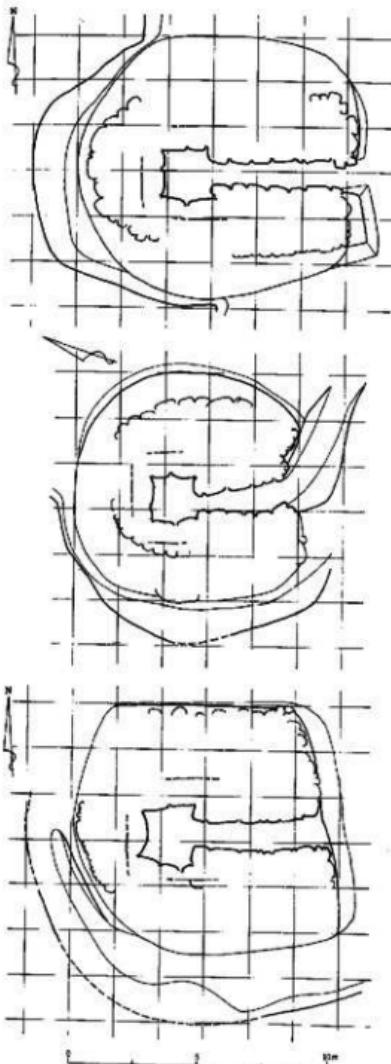
8号墳は裾プランに著しい歪みがあつてはたしてかかるものについても企画がなされているかと疑がわれたが、方眼操作によって一定の企画に基くことが知られた。即ち石室の開口する東側裾部の歪みは、墳丘東南隅と東北隅を緯線を1単位ずらしてあててみると石室主軸方向は横線に平行し、かつ各隅も5単位をとつて横線上に一致する。従つてこの歪みは、後道中程から北にゆるくカーブする後道入口部に対して直角にとるべく造作されたものと考えられよう。このように地割方向が求められることによって石室主軸方向（地割横線）での墳丘長は6号墳と同様6単位となる。しかし緯線方向での長さは6単位とするには差が大き

すぎる。石室および墓塚の位置は墳丘の中央にあるので、この部分の長さは当初から5.5単位と企画されていたと考えるべきであろうか。馬蹄状溝は斜面の高い西側だけでなく南側にも残っており、その上端の位置は墳裾よりそれぞれ1、1.5単位の線上に一致する。従って本古墳の地割は、7×7単位の正方形を基軸にして各部を配したものと考えられる。

7号墳は、6・8号墳の間隙に築造され、時間的に後出することから当初よりその規模は限定されていたことになる。墳丘裾は他に比してより円形を呈し、 5×5 単位の中に周縁され、また馬蹄状溝の上端は1単位の延長と考えてよく、まさしく6号墳のそれより縦・横1単位づつ減じたものと一致することになろう。しかし次節で詳述するが、本墳石室の企画にあたっての使用尺度は高麗尺、唐尺のいずれとも決めがたいことから、仮りに高麗尺を想定すれば上述のように考えられる。逆に唐尺を考えると、6号墳と全く同一の地割比率となり、唐尺使用にあたって、高麗尺比を置き替えたと考えることができる。

以上さきやかな分析を通して、かかる小形墳の無定型にみえる墳丘も、築造にあたっては方格地割を基礎とした企画が行なわれ、企画には尺度を使用したと考えられるのである。
 註(1) 石室配置が墓塚内に行なわれない横穴式古墳はこの限りでない。

(2) 尾崎喜左雄「墳丘と石室」『上野国八幡観音塚古墳調査報告書』1963



第55図 墳丘地割図（縮尺1/200）
上より6・7・8号墳方眼1単位は5高麗尺

II. 石室の構造

- 片江古墳群は全て両袖型单室の横穴式石室を内部主体とする。
- 2~4号墳は丘陵頂部に墓域を選定し、6~8号墳は斜面を削り出して墓域を決定している。古地、石室規模から2~4号墳は類似し、6~8号墳は共通し各3基で一群を構成している。
- 石室は南、東、西へ開口するものがあり、主軸の方位は必ずしも一定していない。
- 石室の石材は全て花崗岩で、敷石は偏平な角礫、小円礫を利用している。
- 玄室の腰石は奥壁に二石並石するものが多く、側壁は二石を横へ配置している。
- 玄室の平面プランは3、4号墳が整然と規格性を持つのに対し6~8号墳はやや不正な形状を呈しているが、規格性の範囲を越えるものではない。石室の平面構成については後述する。

		3号墳	4号墳	6号墳	7号墳	8号墳
占地		丘陵頂部	丘陵頂部	丘陵斜面	丘陵斜面	丘陵斜面
主軸方位		S 81°W	S 43°W	S 88°W	S 16°W	S 89°E
		計測値	換算値	計測値	換算値	計測値
石室	右	—	—	—	742cm	21尺+7寸
全长	左	—	—	—	700	20尺
玄室	右	303cm	9尺-12cm	285?	8尺+5cm	183
	左	308	9-77cm	280?	8尺	178
腰石	奥	215	6尺+5cm	231	6尺+21cm	166
	前	210	6尺	217	6尺+7cm	171
側石	右大	220	6尺+10cm	—	193	—
	左側石	—	—	—	190	—
床面積	奥壁	—	石	—	石並立	—
	左側石	—	二石横列	—	二石横列	—
底面積	右側石	—	二石横列	—	二石横列	—
	床面積	6.51m ²	6.02m ²	3.04m ²	2.81m ²	3.68m ²
高さ	床面標高	45.05m	45.60m	37.38m	37.60m	38.46m
	幅:長さ	1:1.5	1:1.3	1:1	1:1	1:1
横	右	—	—	—	565	16尺+6寸
	左	—	—	—	515	15尺+10寸
道幅	輪石	109	3尺+4cm	—	75	2尺+5cm
	入込	—	—	—	105	3尺
奥壁~腰石	石	351	10尺	—	—	195
	奥壁壁~腰石	—	—	—	490	14尺

第2表 石室各部計測値(単位はcm、換算値は7号墳唐尺を除いて高麗尺による)

III 石室平面图形の企画について

横穴式石室は規模において巨石使用の巨石墳から、遺体一体埋葬も不可能かと思えるほど小形のものもあり、多様な形態とともに構成においても精巧が認められ、一見アトランダムな構造を示すように見える。しかし石を素材としての死者埋葬を目的とした空間構築は、石材の選択・加工に始まり、往々、石室隔壁の配置、石組み積み上げ、そして巨石を用いた天井部架構にいたる極めて一貫した技術的体系を必要とし、まさに現代建築に匹敵する建造物といえよう。⁽¹⁾

こうした石室構築に一定の企画がなされ、その企画にあたっては尺度使用が行なわれたことは充分に想されよう。尾崎喜左雄博士は群馬県内の200基以上の横穴式石室の調査によって得られた資料の緻密な分析から、石室平面图形には厳とした企画が認められるときれた。そして石室各部の計測値の最大公約数が大略35cmと30cmの二種に集約されることを介して、前者を高麗尺、後者を唐尺にあたるものとして、石室構築に古代尺の使用を推定している。上田恵範氏は前方後円墳の地割企画を介して、大阪府金山古墳・奈良県赤坂天王山古墳の地割分析から後期古墳構築の高麗尺使用を認め、更に天王山古墳では玄室・長は地割単位に一致し、市1、長2をとるとされている。また甘柏健・森浩一両氏は前方後円墳の構成比、規模の分析から六朝系尺(一尺25cm)と晋尺(一尺24cm)を折出された。更に甘柏氏は千葉県安孫子古墳群では、6~7世紀墳道の後期古墳にも六朝系尺の使用が繼續されるとしている。⁽²⁾

本稿で分析対象とする資料は今次調査で得られた5基のみであり、結論的に尺度使用を問題にするには早急の余りに独断の恐れもある。しかし横穴式石室の構築は、当時の技術的体系を止詰めきった位置にある建造物と考えられ、巨人なるいは整った石室のみならず、たとえ10mにも満たない石室においてもその体系なしでの構築是不可能であると考えるに他ならない。

まず資料操作の第1段階として石室各部の計測値の最大公約数を割りだし、その結果おおむね一尺35cm前後とする高麗尺使用を推定した。次に横穴式石室の平面图形の企画にあたっては矩形あるいはその倍数を基準とすることから、高麗尺一尺を35cmとした矩形版を作製し、トレースした石室プランを重ね合わせリストイドさせつつ連合関係を検討し、各部の使用尺度の換算値を求め、合わせて石室構成の各部比を考えた。⁽³⁾

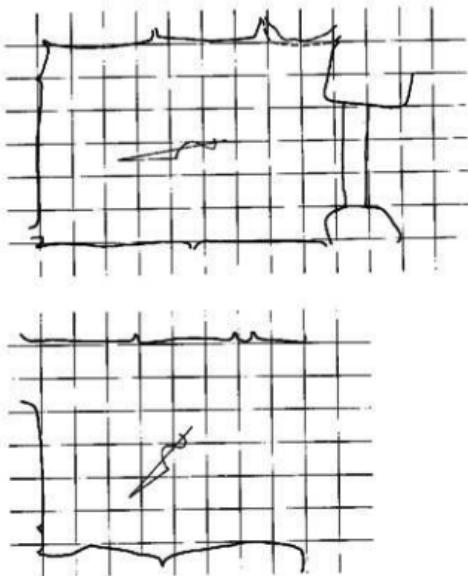
(1) 3・4号墳石室の平面图形

3・4号墳は早苗田C支群に属し、同一稜線上に築造している。同時に調査した2号墳は石室の使用石材が抜き取られプランを知りえなかったのでここでは対象から除外する。3・4号墳ともに羨道部は既に石材を抜き取られ原形を留めていない。ために石室全体の比較は不可能であるが、奥壁・玄室側壁の配備、また使用石材の加工方法等に類似した手法を用いている。即ち、奥壁は二段積みと推定され、右側壁は腰石三石、左側壁は二石で構成しており、使用石材はすべて花崗岩であるが山石転石の様面および上面を平坦に加工したものと転石末加工のものとの組み合わせである。

両石室の各部計測値(第2表参照)は大略高麗尺に換算できる。しかし細部においてはいささか換算値との差が大きいものも認められる。こうした場合、石室構築の素材が未加工に近い転石であって、面に凹凸のあるもの、隅の丸いものなど様々で規格サイズに統一されたものではないことによる接合部の技術的限界、更に使用尺度の誤差の問題等を勘案する必要があると指摘されている。換算値との差は4号墳により大きく認められるが、これは玄室プラン作製を、床面下まで及んだ擾乱のために墓底全面のレヴェルで行ったことによるものと

考える。3・4号墳石室の側壁壁体は10°～20°の内傾を示している。この強い内傾角度は後に天井石を除去された結果生じたものではなく当初よりのものであり、従って4号墳石室の床面レヴェルは実測したレヴェルより20cmほどの高さに推定されることから、玄室内にみられる換尺値との差は、床面との間に生じたものと諒解することができよう。とすれば一歩進めて、石室構成の企画にあたっての径始は当初より床面レヴェルを想定しており、壁体に強い内傾を与える際には角度を配慮した床面の設定が行なわれたという可能性もある。

上述の諸前提を踏まえ、高麗尺方眼を操作して得られた結果が56図である。3号墳玄室は



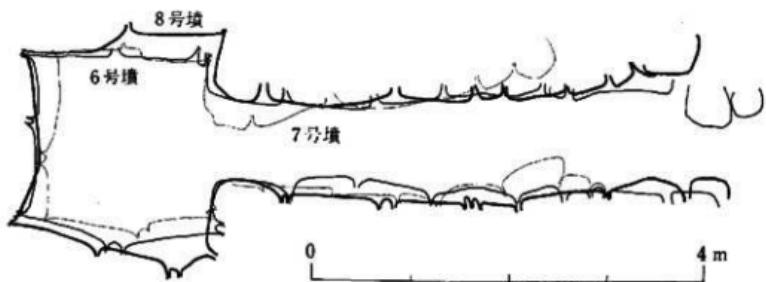
第56図 3・4号墳石室プランの方眼による操作結果（縮尺1/60）
(方眼・1単位は1高麗尺35cm・上3号・下4号)

方眼6×9コマにはほぼ周縁する。奥壁は隅角が玄室内にやや張りだしているが左右側壁は美事に方眼線上に一致する。袖部巾は3高麗尺をあて、左壁より1尺、右壁より2尺をとることによって巾を求めたと考えられる。袖石間には切石の樋石が配設されており、奥壁より10尺の位置に前面をあてている。4号墳の石室は袖石も既に失なわれているが、第3章で推定したように現存する側壁端に接続したものと考える。また左右側壁は各々上下端の横線よりもわずかに外にでているが、理由に

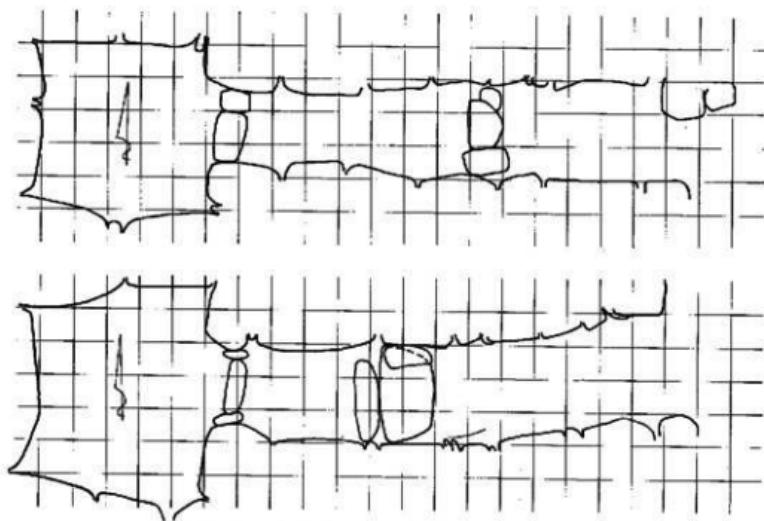
ついては前述した如くである。従って4号墳石室は玄室巾6高麗尺・長8高麗尺を玄室プランにあてたといえよう。

(2) 6・8号墳石室の平面図形

6・8号墳は7号墳と共に鳥越B支群を形成する。各石室はいずれも花崗岩の未加工転石



第57図 6・7・8号墳石室平面比較図(縮尺1/60)



第58図 6・8号墳石室プランの方眼による操作結果(縮尺1/60)
(方眼1単位は1高麗尺35cm、上6号、下8号)

を使用した乱石積の両袖型横穴式石室である。造営年代は第3章でみたように6世紀後半～7世紀前半代に求められ、6・8→7号墳の順が推定される。ここでは石室の類似上6・8号墳を扱い、7号墳は後述する。

6・8号墳は玄室プランおよび羨道人口部に多少の違いを見るが、石室全長に対する玄室長比、袖巾、羨道入り部巾等に同一の尺度をあてている。(57図は6・7・8号墳石室を比

較したものであるが、6、8号墳間に一致するところは多い。) 58岡は高麗尺一尺を35cmとした方眼操作によって得られたものである。

石室全長は20高麗尺をとるが、両石室とも羨道入口部の壁体構成が不安定なつくりを示し、その長さに違いがある。6号墳は左側壁が1尺ほど長く21尺をあて、また逆に8号墳の場合には短く19尺をあてている。どちらを石室全長の基準としたかは不明であるが、両墳に共通して20尺が求められること、また20尺は玄室長5尺の4倍にあたることから20尺を石室全長と考えてよいと思う。

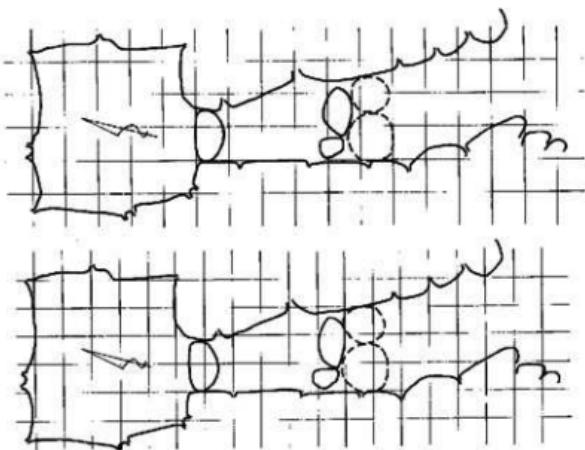
6号墳玄室は奥壁巾166cmで5高麗尺には誤差が大きく疑問であるが、壁線は 5×5 コマの線上に一致する。左壁に外へ張りだす広がりがあるが、奥壁巾の修正と考えられないだろうか。袖巾には2尺をあてており、その巾は左右側壁から1.5尺づつとて求めたようである。羨道部は除々に巾を広げ、羨道入口部に相対して位置する大ぶりの腰石間に巾3尺をあてて羨道巾を収めている。床面施設には袖石間に玄室と羨道床石を分けるように配された仕切石が奥壁より6コマ目の縦線上に、また羨道部敷石先端部の上り樋状の配石は14コマ目の線に一致している。

8号墳玄室は奥巾・長にそれぞれ5高麗尺をあてている。しかし前山は5尺をとらずに6.5尺をあてているが、他の計測値がおおむね完尺値をしめすことから若干疑問視される。袖巾は2尺をあて、8号同様の上り樋状配石の先端面は奥壁より12コマ目の線に一致し、8号墳のそれよりも2尺ほど短く配置している。

袖石の間には狭長な転石を置き、袖石との間隙には縦長の転石で充填した樋石が据えられているが、その位置は奥壁より6コマ目の線上に中心を置いている。この樋石下は第3章の図で述べたように、袖石間に浅い溝が穿たれている。さて羨道部は入口部まで直線に延びず中程で屈折し、主軸に11°の角度をとりつつ北にカーブしている。この屈折する位置には左右側壁に相対して三角形の小ぶりの根石が両横の腰石よりも15cmほど高く配されており、その巾3尺をあてている。従って羨道入口部の屈折は当初より企画された如くであり、羨道入口部右壁端が奥壁から延びる横線に一致し、カーブしている部分の羨道巾も3尺巾に一定していることは決って偶然ではないと考える。

6・8号墳石室は上述したように、単に形が似ているということではなく、石室総体の企画に一致点が多い。すなわち全長20尺、玄室奥巾5尺、長5尺、袖巾2尺、羨道入り部門（径始の基準に配せられた腰石部）3尺をそれぞれあてている。上り樋状配石は奥壁より6号では14尺、8号では12尺をあてているが14尺は $10\sqrt{2}$ にほぼ一致し、また8号の12尺は玄室部長を差し引けば $7\text{尺} = 5\sqrt{2}$ にあたる。

従って両墳の位置の違いは奥壁より $2 \times 5\sqrt{2}$ をあてた場合と、袖部より $5\sqrt{2}$ をあてた場合との違いにすぎず、かかる造作には $5\sqrt{2}$ を共通して使用したことが推定される。また主



第59図 7号墳石室プランの方眼による操作結果(縮尺1/60)

{ 上図 方眼1単位は1高麗尺35cmとする。

下図 方眼1単位は1唐尺30cmとする

軸方位も 2° の差があるにすぎない。

(3) 7号墳石室の平面图形

前述したように本墳は6・8号墳に後出し、両墳間に占地するため、墳丘規模は当初より限定され、石室についても墳丘に従って小形化している。

石室は花崗岩転石を使用した乱石積み両袖型横穴式石室である。玄室プランは矩形を呈し、羨道部は左側壁が主軸に平行に延びるのに対して右壁は袖部より入口部まで主軸に 11° の角度をとつて直線的に曲げている。石室各部の計測値は第2表に示した如くであり、使用尺度に二種類推定しうる。しかしながら両者とも確実視することはできないが、本墳の造営年代を7世紀前半代とすれば、唐尺使用は日本伝来前後で、たとえ伝来されていたとしても、実施使用については疑問視されざるをえない。しかし袖巾55cm、羨道入口部より3石目に置かれていた立石の巾90cmという計測値は唐尺換算尺値2尺、3尺に近い。従って唐尺使用の可能性も一応勘案しておくべきと考える。まず石室全長は羨道入口部にそれぞれ長短があって同一値をとっていない。壁線が主軸に平行する左壁は5.20mを測り、15高麗尺に近いが、また17唐尺とも考えられる。

玄室は奥巾・前巾とも完尺値には差が大きいが、高麗尺の場合はそれぞれ5尺、4.5尺、唐尺の場合は5.5尺、5尺を推定しうる。また側壁長も左右異なり、高麗尺では右壁4.5尺、

左壁5尺、唐尺では5尺、5.5尺を推定できよう。玄室はいずれの尺をとるとしても5寸単位で使用されたとしなければならない。袖石・狭道入口部立石巾は前述したように唐尺2尺・3尺にほぼ一致する。しかし玄室にみたように5寸単位に使用されたとすれば、それぞれ高麗尺1.5尺、2.5尺と考えられる。また床面施設として袖石間に樋石、狭道中程に下り樋状の配行が認められる。まず唐尺に換算すると樋石は奥壁より6コマ目線上をその中心に置き、下り樋は10コマ目の線に一致する。高麗尺の場合、樋石は奥より5コマ・6コマ間に收まり、下り樋は9コマ目の線におおむね一致するようである。

以上を要約すると次のようになる。即ち唐尺使用を想定した場合は、石室全長17尺はやや中途な感があるが、これは高麗尺15尺を読み替えたものとすれば、他は玄室巾5.5~5尺・長5~4.5尺、袖巾2尺、狭道入口部立石巾3尺となり、6・8号墳石室の高麗尺の値を唐尺にそのまま読み替えたと考えられる。また高麗尺使用を推定すれば、石室全長15尺は、6・8号墳のそれを5尺、即ち玄室1単位分減じた値となり、玄室巾は5~4.5尺・長5~4.5尺をあて、袖巾には1.5尺、狭道部入口立石巾には2.5尺が推定しえよう。従って各値は6・8号墳のそれより0.5尺(5寸)を差し引いたものとなり、石室全長を除いての全体構成比は一致する。結局どちらとも決めかねる由縁である。前項の墳丘の地割の場合でも府尺使用の場合は6・8号墳地割単位の置き替え、高麗尺使用では一単位減じたものとなって、やはりどちらを使用尺とするかにわからぬ決めがたい。現段階では両尺の使用がともに推定されるとし、以後の資料の増加と既調査資料の再検討に結論を俟ちたい。

(4)まとめ

以上、今回の調査によって得られた5基の石室にささやかな分析を試みた。その結果上述のように7号墳を除いてはいずれも高麗尺を使用した平面图形の企画が認められ、群集墳中の小形の石室においても厳密な企画と尺度使がなされたことを知りえた。また単純な石室各部の計測値の分解操作では、石室平面图形企画の問題が欠落し、各部分の並みあるいは自然石利用によるための技術的限界から生ずる誤差に対して無防備に過ぎるようである。本稿で試みた方眼の操作による各部適合関係の検討は、こうした欠点を充分補い、かつ当初の原企画を復原し、企画を具体化するに際しての技術運用にまで推測可能であり、その射程とする領域は更に拡大されよう。

註1) 石川正之助「野殿天王塚古墳の石室平面構成について」共愛学園論集第1集1967

本稿で試みた方眼を使用しての石室各部の分析方法は氏よりの教示によるものである。また本稿執筆にあたって数々の教訓を賜った。記して謝意を表する。

2) 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」1966

本稿での石室分析の基本的な視点は同書よりの借用である。誤解・誤説等によって博士の意とすることに反することを憚れる。

3) 上田宏範「土木技術」「日本の考古学」1966

4) 甘柏健「墳丘の形態と構造」「安孫子15墳群」1969

- 5) 森浩一「古墳の発掘」1965
- 6) 尾崎喜左雄 前掲書、「横穴式石室平面图形の企画」考古学雑誌48-4 1962
- 7) 石川正之助 前掲書、「総社二子山古墳前方部石室の平面構成について」考古学雑誌54-4 1968
- 8) 尾崎喜左雄、石川正之助 前掲書
- 9) 第1回遣使傳朝は632年であり唐尺伝来はそれ以降になる。また大化の詔にいう落轡令にみる規定尺度については旧尺の高麗尺かあるいは新尺（唐尺）によるか、現段階では一致をみていない。文献上の初出は大宝律令雜令にある「凡度十分為寸、十寸為尺」、令集解本注の「一尺二寸為大尺一尺」などで8世紀初頭とされているが、山ノ上碑と山ノ上古墳の関係から7世紀後半には実施使用しているという（尾崎博士「横穴式古墳の研究」第三編第二章第三節）

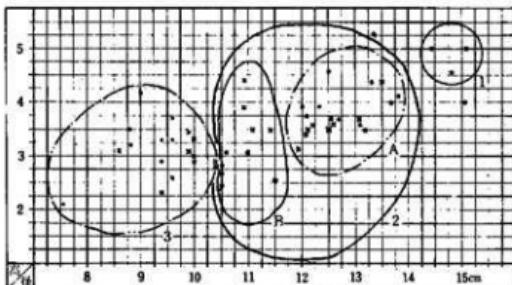
IV. 須恵器一环にみられる形態的変化

古墳は盗掘を受け遺物の残存状態は良好ではなかったが、6～8号墳出土の須恵器のうち年代決定の指標となる环を抽出し、口径と器高との関係を図式化することにより形態的推移の傾向をとらえることに努めた。第3章で図示した环62点（身35、蓋27）のうち器高の計測できないものを除き51点を選んで、本項の資料とした。

环は口径と高さにより3つに分類できる。1は口径が14cmを超えるもので8号墳出土の高台付环がこれにあたる。2は10.5cm～14.0cmの中におさまるもの、3は10.5cm以下となり、7号墳出土のセットになるものを主とする。時期差としてみれば1はⅢ期、2はⅢb期、3はⅣ期となり、Ⅲ→Ⅴ期は大形から小形化への移行として図式化できる。2は二つに細分でき、10.5～11.5cmとした2-Bでは身と蓋が器高の相違として区別でき、3では身と蓋の関係は逆転する。环の身と蓋が逆転する時期をこの前後に求めることができよう。

2と3は整形技法の相違としても区別できる。2-Aの径の大きいものには天井部、底部のヘラ削り調整が顕著で、小形のものになると整形に変化があらわれ、荒くヘラ削り痕の残る未調整のもの、手持ちヘラ調整のものなどがあらわれ、口径に比して器高の高い塊を伏せた形状のものから、天井部、底部が平坦となり、扁平な器形への推移を見る。

2類中にも典型的なⅢb期とされるものは2-Aの中でも数は少なく、ヘラ削り痕の未調



第3表 片江古墳出土須恵器法量表（単位cm）・は环蓋をしめす

整なものなど整形が難となり、Ⅳ期への過渡的形態と考えることができよう。本項の資料は数が少ないと、大形→小形化への形態的変化を流動的な傾向としてとらえることはできる。

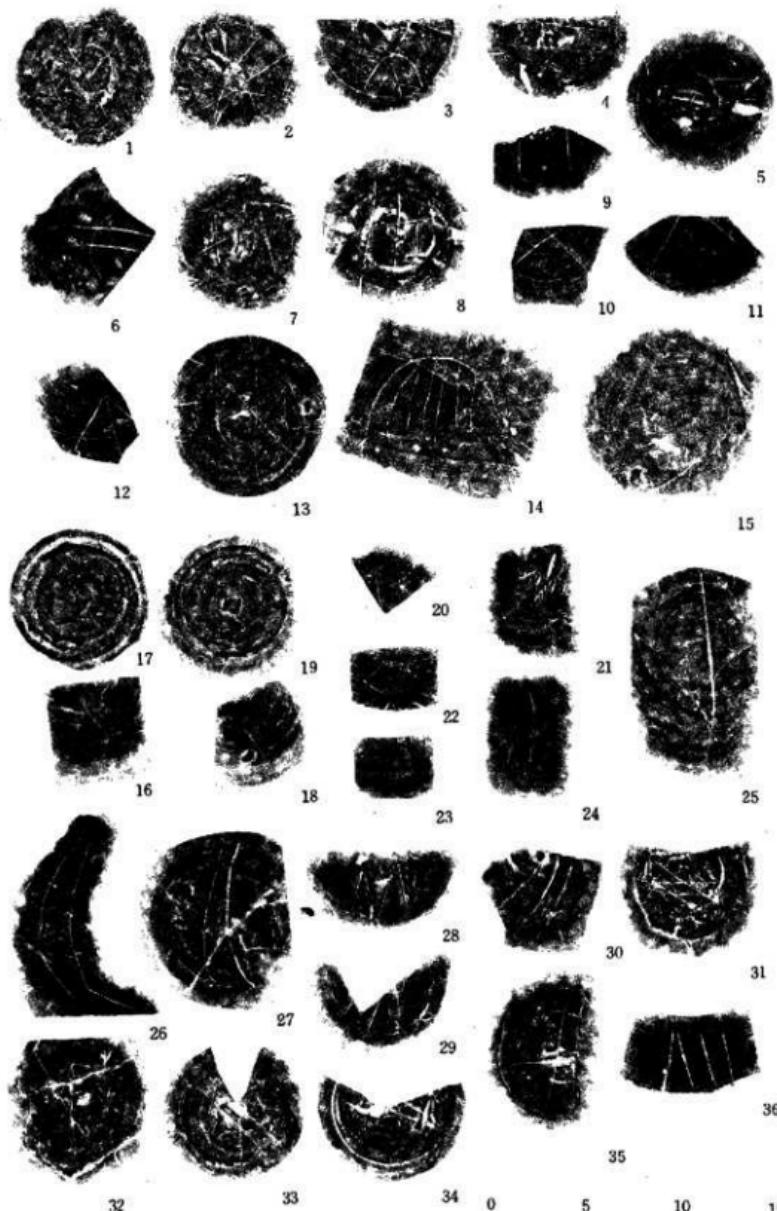
V ヘラ記号について

第60図にヘラ記号として図示したものは須恵器34点、土師器1点である。他に土師器（糸切底）の拓影図がある。須恵器のうち器種別にみると杯29（蓋14、身15）、壺2、壺2、平瓶1となり、杯に付されたものが大部分を占める。第2号墳出土の2点を除けば、第6号墳14、第7号墳9、第8号墳9と6号墳～8号墳出土のものに限られる。

ヘラ記号には直線状に印されるもの、曲線で描くもの、直線と曲線を組み合わせるものに分けられるが、細分すれば一本の線で印されるもの（25）から、最高7本の線で構成される14まで17種類に類別できる。特に2～4本の線で構成される簡略なものが14種類32点と大半を占める。この中で4と5、27と30は同一ヘラ記号によるもので、前者は6号墳、後者は8号墳から出土した。また7と8（6号墳）、16と17、18と19（7号墳）はそれぞれセットになり、33と34（8号墳）は同一ヘラ記号によっている。同一記号として類型化した中には同一古墳だけでなく、隣接する古墳出土のものもあるが、ヘラ記号の付し方にはそれ相異が認められ、同一手法によると断定できるものは特に見あたらず、同一ヘラ記号を有しセットになるものおよび同一ヘラ記号によるものは同一古墳出土のものに限られるようである。

第60図と本文挿図を対照させると下のとおりである。

第60図	記号	名	第60図	記号	名
1	第26回	13	杯身	19	14号18とセット
2	23	杯身	20	表示できないもの	14
3	12	杯身	21	第37回	2
4	11	杯身	22	30	杯
5	10	杯身	23	31	杯
6	7	杯身	24	29	手形
7	29	杯身	25	第8回	1
8	21	杯蓋	26	第48回	4
9	4	杯蓋	27	5	手形
10		杯蓋	28	16	手身
11	表示できないもの	杯蓋	29	1	手形
12		杯蓋	30	8	手身
13	第26回	17	杯蓋	31	9
14	30	長瓶身	32	第52回	1
15	第38回	4	土師器(糸切底)	33	表示できないもの
16	第37回	9		34	第48回
17	8	身		10	手身
18		セット		35	15
				36	第8回
				4	短瓶蓋



第60図 片江古墳出土上須恵器ヘラ記号拓影図（縮尺1/3）

第5章 総括

今回調査した古墳は全て内部主体に横穴式石室をもち、古墳時代後期群集墳の一般的な様相を呈すものである。

2～4号墳は通称サナボリ山と呼ばれる油山から派生する低丘の棱線頂部に築造されている。いずれも地形変形が著しく、また石室においても石材を抜きとられプラン全体を知りうるものはなかった。わずかに残存する遺物から造営時期をⅢ期、6世紀後半代に求めることができるが、追葬等による使用時期は不明である。残された石室の規模、地形、石材加工の手法等から共通する要素を見いだすことができる。石材を全て抜き取られた2号墳も玄室腰石下の窪みによって3号墳同様の石室プランを推定し、3基共通して玄室巾6高麗尺の長方形プランをとっていることが知られた。2～4号墳は一つの丘陵上に築造せられたもので、小谷を狹んだ西側丘陵上および谷の基部にも2～3基を単位とする古墳群の存在が知られ、また東南の丘陵にも同様な古墳群のまとまりがある。それぞれ古墳の立地に相違があり、密度の濃いまとまりを示すことから、かかるまとまりを一単位群として認め、それらに早苗田A・B・D支群の名称を付し、サナボリ山上の3基は早苗田C支群とした。6～8号墳は同様に鳥越B支群とした3基からなる一単位群で、丘陵斜面に並列して築造されている。B支群は第3章Ⅳ、第4章Ⅰ～Ⅲで明らかにされたように、各墳築造にあっては方格地割を基礎とした各部の割り付けが行なわれおり、その単位には大化二年三月の詔（薄暮令）にいう尋に一致すると考えられる5高麗尺をあて、3基とも極めて類似した比率構成をもつていて。石室の平面構成も6・8号墳は全長・玄室巾・袖巾・羨道入口部等に一致をみている。7号墳においては高麗尺、唐尺いずれとも決めがたく、7世紀中葉前後造営の諸古墳の資料増加を俟ち、府尺使用開始時期をめぐって再度検討されるべきであろう。

各墳の造営年代は盗掘を受けて出土遺物が少ないと定めたためその比定に困難な面もあるが、6・8号墳は6世紀後半代に相前後して築造され、7号墳は少し遅れて7世紀前半代に築造されたと考えられる。6・7号墳は7世紀後半まで、8号墳は8世紀代まで追葬が行なわれたとみることができよう。玄室は原形をとどめるものではなく、被葬者の埋葬状況については、6号墳・7号墳における装身具の出土位置を手がかりとする他はないが、出土状態から有力な根拠とするには不十分である。6号墳にあっては少くとも3回以上、7号墳は2回以上、8号墳は3回以上の追葬を考えることができよう。

出土遺物についてみると、既に盗掘を受けているとはいへ全体的に副葬品は量的に少なかったと考えられる。その中で鉄器としては3基共通して鉄鎌、刀子がみられ、ほかに8号墳には馬具、スキ先が副葬されていた。直刀を典型とする実用武具の副葬は当初からなかったと考えると、鉄鎌を除けば工具、馬具、農具に限られており、そこに被葬者の性格を農業生

産に基く集団の突出した部分を想定し、あわせて地方軍事機構の一端を示すものと考えることはできないであろうか。

出土土器については、7号墳羨道部より出土した須恵器群は同一時の副葬品と考えられ從來資料の少なかったV期の壺（蓋・身）、高壺、壺、平瓶の組み合せ資料として良好なものであろう。6、8号墳出土の土師器類は高壺を主体とするものであるが、須恵器B～VI期の須恵器との組み合わせを検討する上で重要な資料となる。とりわけ8号墳より出土した土師器高台付壺と蓋のセットは他に類例の少ないものである。6～8号墳にはいづれも埴丘西南隅裾部、列石の間に須恵器・土師器が供獻された状態で確認され、墓前祭としての祭祀的様相を知ることができた。須恵器の大形甕は破砕され、底部を穿孔する実用的でないものが含まれており、7号墳裾部からは手捏ねによるミニチュア土器も出土した。

2～8号墳の石室平面構成に高麗尺を使用した綿密な企画を認めたが、同様に高麗尺使用の古墳は、既に報告書が刊行されている上和白古墳群、大谷古墳群の各古墳にも認められる。また片袖型石室（影塚1号墳）や、より一層複雑な形態をもつ複室墳（影塚2号墳）においても同様の高麗尺使用による企画が求められ、その中には裏尺（ $\sqrt{2}\text{パ}$ ）の使用の例もある。こうした方法は、本地域における石室構造の比較検討を一步進め、古代尺度に基づく企画の抽出を可能ならしめる試みとして先学諸賢の批判・教示を仰ぎたい。

片江古墳群は東南に展開する低平な丘陵、水田を眺望する丘陵上に位置している。周辺部には多くの後期古墳が群集し、隣接する倉瀬戸古墳群、瀬戸口古墳群も同様な立地条件下にあり、西油山山麓部に集中している大谷、駄ヶ原、霧ヶ池等の各古墳群では、一部に標高140mを超える高所の築造を含め、中腹尾根や開析された谷に群集するものが多く、対照的な立地の違いを認めることができる。油山の東西を分ける如くその中央を北に突出して延びる支丘の丘陵頂部に、七隈古墳群が存在している。調査の結果II～III A期の須恵器を出土していることから、本地域における後期群集墳の初現的な位相にあると考えられ、かつ油山山麓の古墳群を二分する位置にあり、III B期以降急激に増加する古墳の造営、山麓部への平面的な展開は、一定の社会構造の変容過程を示していると考えられる。上述したように油山山麓部に展開する古墳群は七隈古墳によって二分される如き様相を呈しているといえよう。

さて片江古墳群の被葬者についてみておこう。

級上の七隈古墳群を乗せる丘陵以東は樋井川とそれにそそぐ諸支流によって狭隘な低湿地が広がり、現在は水田として利用されている。これらの地域は下長尾丘陵によって更に二分され農業生産地としては決して広大な面積をもつものではない。西油山の諸古墳群が数十基の単位の密集度の強い傾向をもつのに対し、樋井川流域の各古墳群はその東端に位置する大牟田古墳群が50基近い群集を示すのみで、他はいずれも10基に満たない小古墳群にすぎない。かかる傾向は早良平野という広大な生産地をひいた集団と、樋井川流域のように各支流に

そつてわずかな生産地を求めるを得ない集団とのその性格の違いに求めることはできないだろうか。片江古墳群もこうした古墳群の一つであり、眼下に片江川に沿った生産地を望む位置にある。また瀬戸口古墳群は一本松川に、井手古墳群は駄が原川にそれぞれ面している。こうした古墳群の立地と支群単位のあり方は樋井川各支流域を生産単位とする諸集団の墓地を、それぞれの支流に望む丘陵上に選ばせたことを示してはいないだろうか。三島格・藤田和裕氏は西油山山麓に群集する諸古墳を和名抄にいう「能解」郷の人々の墳墓群に推定されている。和名抄筑前国・早良郡の条には「昆伊」郷の名が見え、「昆伊」郷は現在の樋井川流域におおむね比定されているようである。郷の成立は大化改新後であり、和名抄記載の郡名は9世紀代に存在したものであつて、和名抄郡名をもって7世紀前後をおすことはできない。(註1)しかし上述したように東・西油山の各古墳群は七隈古墳群によって大きな差異を指摘することができ、これをもって「能解」郷と「昆伊」郷との境に求めることはできないであろうか。とすれば片江古墳群の被葬者を後の「昆伊」郷にあたる地域に生産基盤を置いた人々に想定することもまた大過なしといえよう。

以上今度の調査からいくつかの可能性を想定したが、なお今後の資料の充実を待って検討すべき点が多い。片江古墳群をとりまく環境の中で、早苗田C支群と鳥越B支群の占地する丘陵の間には、更に一段低く水田に面した低丘陵があり、住居址の包含地としての可能性を秘めている。また神松寺遺跡と片江カメ棺遺跡間の水田面は、当時の生産基盤となった水田址と想定しうる。これらの地域は区画整理事業の対象地域内にあり、本年度の継続事業として来年度以降発掘調査を継続することにより、漸次明らかにしてゆきたい。

(註1) 池辺弥『和名類聚抄郷名考証』1966

編集後記

片江古墳群の調査にあたっては関係当局である教育委員会のみならずそれ以外の多くの人々の尽力により遂行された。

区画整理課には図面の貸出や地元との接渉をお願いし、地元片江区画整理組合準備委員会（会長広田長登）の役員の方々には調査対象区域の伐採作業を依頼した。発掘作業の遂行にあたって地元片江地区の方々の応援を得た。調査期間中花田文徳氏には調査事務所兼宿舎として同氏宅の使用を快く承諾いただいた。6～8号墳の調査にあたっては鳥越C支群に近接する田住仁作方に器材の保管をお願いし、田住久幸方や河野忠義にも何かとお世話をいたいた。合せて感謝の意を表するものである。

発掘調査された6基のうち6～8号墳については区画整理組合準備委員会役員の方々の配慮により造成計画を設計変更し、緑地公園の中に組み入れて保存整備することが検討されている。開発で失われてゆく現状の中で、地元の努力により一つの単位群を構成する古墳3基が保存整備されることを一つの郎報として特記するものである。

図 版



図版 1



(1) 片江古墳群遠景

油山中腹(南)から



(2) 第2号墳—第4号墳遠景

(北から)

図版 2



(1) 第2号墳遠景

(南から)



(2) 第2号墳全景

(南から)

図版 3



(1) 第3号墳近景

(西から)



(2) 第3号墳全景

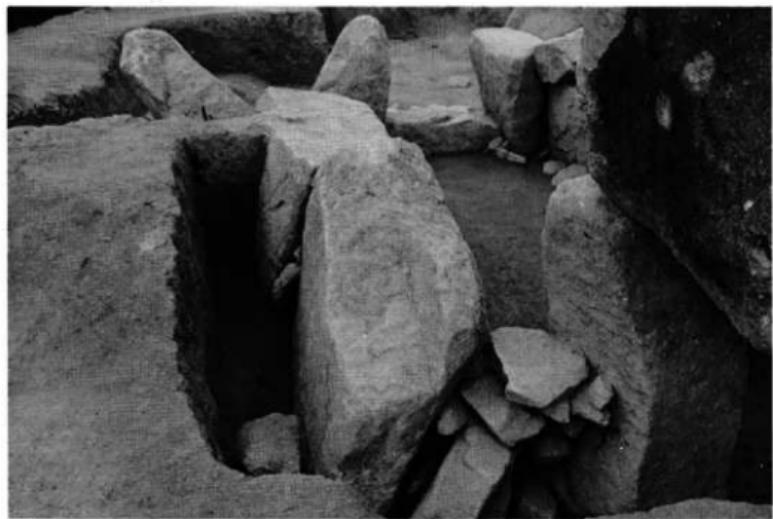
(西から)

図版 4



(1) 第3号墳袖石及び樋石

(西から)



(2) 第3号墳玄室と墓塚の関係

(東から)

図版 5



(1) 第4号墳近景

(東から)



(2) 第4号墳全景

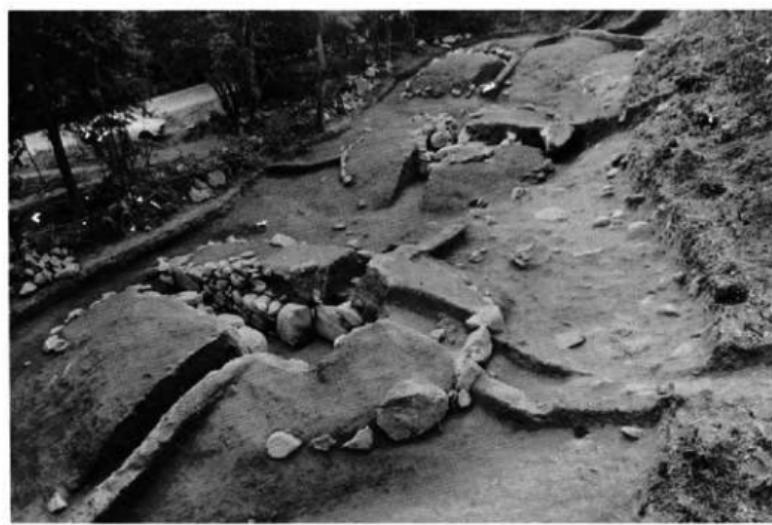
(南から)

図版 6



(1) 第6号墳～第8号墳全景（発掘後）

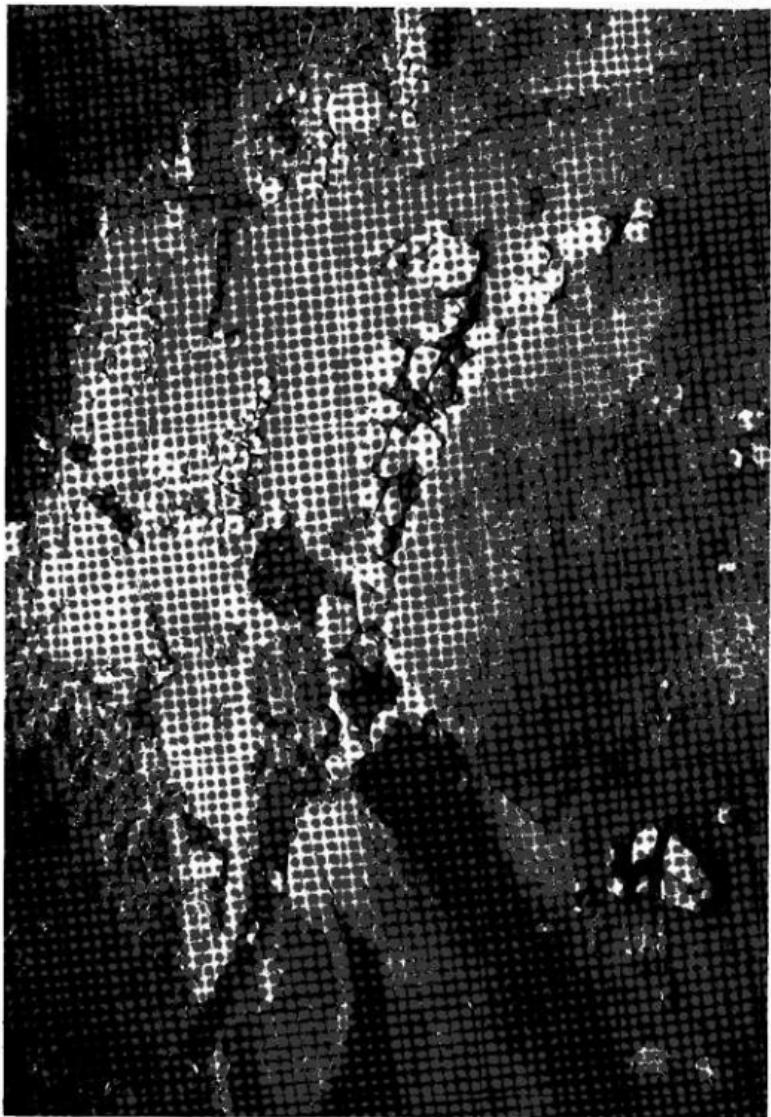
（北から）



(2) 第6号墳～第8号墳全景（発掘後）

（北から）

図版 7



第6方塊～第8方塊全景（範囲後）

(南から)



(1) 第6号墳近景

(東南から)



(2) 第6号墳全景

(東から)

図版 9



(1) 第6号墳玄室及び狭道部

(西から)



(2) 第6号墳全景（発掘前）

(東から)

図版10



(1) 第6号墳玄室遺物出土状態



(2) 第6号墳前庭部遺物出土状態

図版11



(1) 第6号墳埴丘と列石の関係

(西から)



(2) 第6号墳埴丘と列石の関係

(東南から)

図版12



(1) 第7号墳近景

(東から)



(2) 第7号墳全景

(東から)



(1) 第7号墳羨道部

(南から)



(2) 第7号墳玄室及び羨道部

(南から)



(1) 第7号墳羨道部遺物出土状態

(玄室から羨道部を見る)



(2) 第7号墳羨道部遺物出土状態

(羨道部から玄室を見る)



(1) 第7号墳埴丘と列石の関係

(南から)



(2) 第7号墳埴丘と列石の関係

(北から)

図版 16



(1) 第8号墳近景

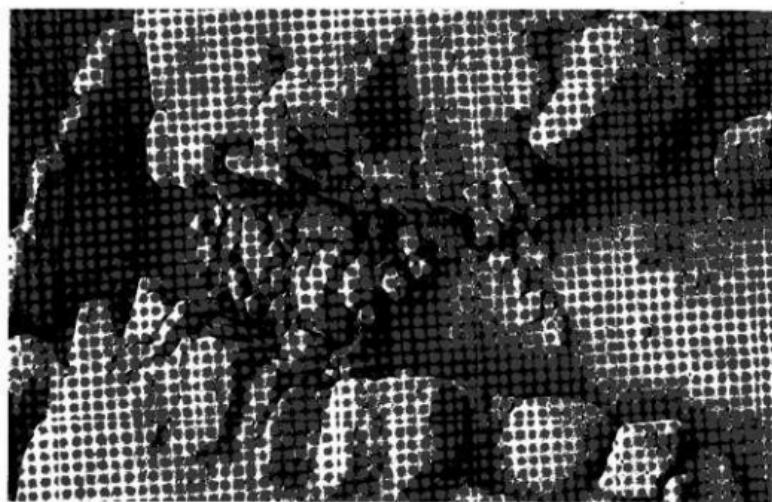
(東から)



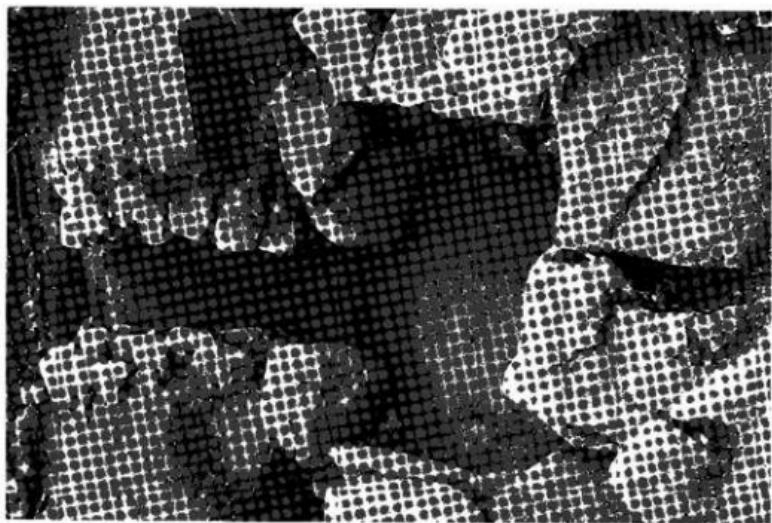
(2) 第8号墳全景

(東から)

図版17



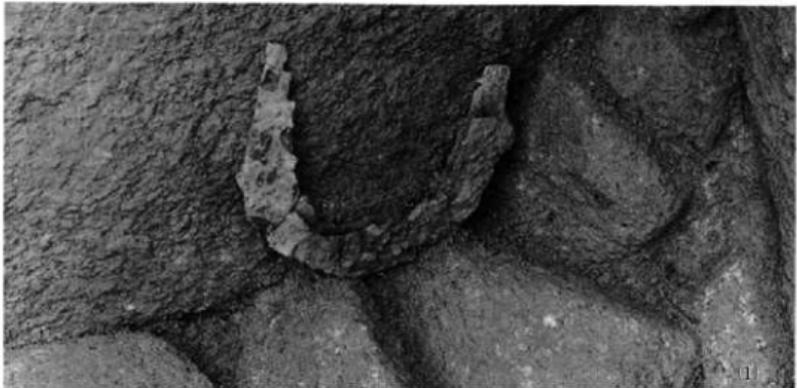
(東から)



第8号頃 玄室及び底道部

(西から)

第8号頃 玄室及び底道部



第 8 号 墓 遺物出土状態 (1) 玄室 (2)(3) 前庭部



(1) 第8号墳墳丘と列石の関係

(北東から)



(2) 第8号墳墳丘と溝の関係

(南から)

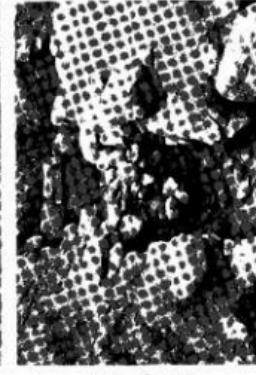
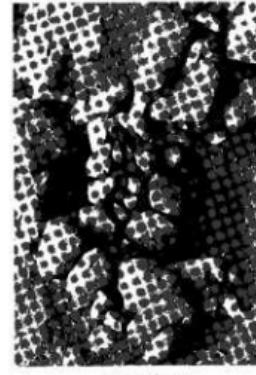
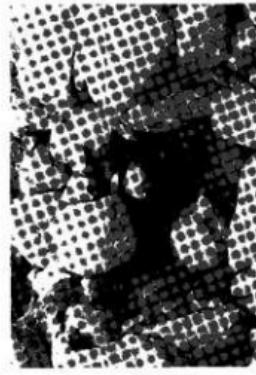
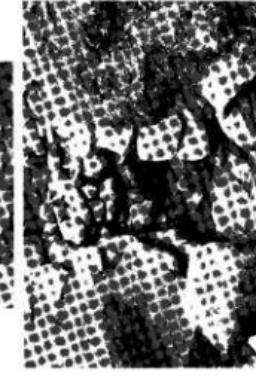
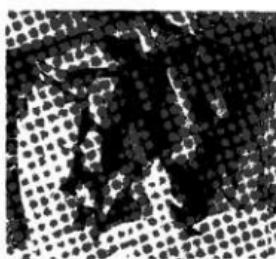
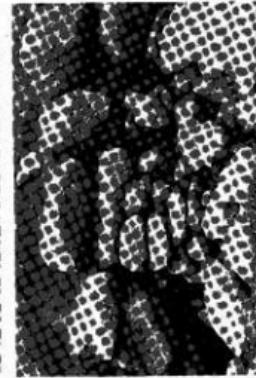
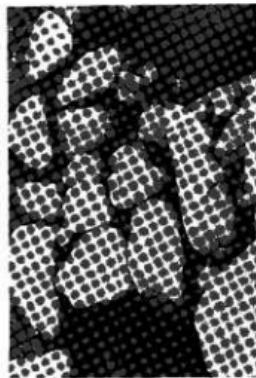
図版20

上から見る

玄室から奥部方向を見る

奥部から玄室方向を見る

石室の構造(Ⅰ) 開塞石の状態



8 号 塞

7 号 塞

6 号 塞



- (1) 3号墳
- (2) 4号墳
- (3) 6号墳
- (4) 7号墳
- (5) 8号墳

石室の構造 (II) 奥壁

図版22



- (1) 3号墳 左
(2) 4号墳 左 右
(3) 6号墳 左 右
(4) 8号墳 左 右
(狭道部から玄室をみた方向)

(1)



(2)



(3)



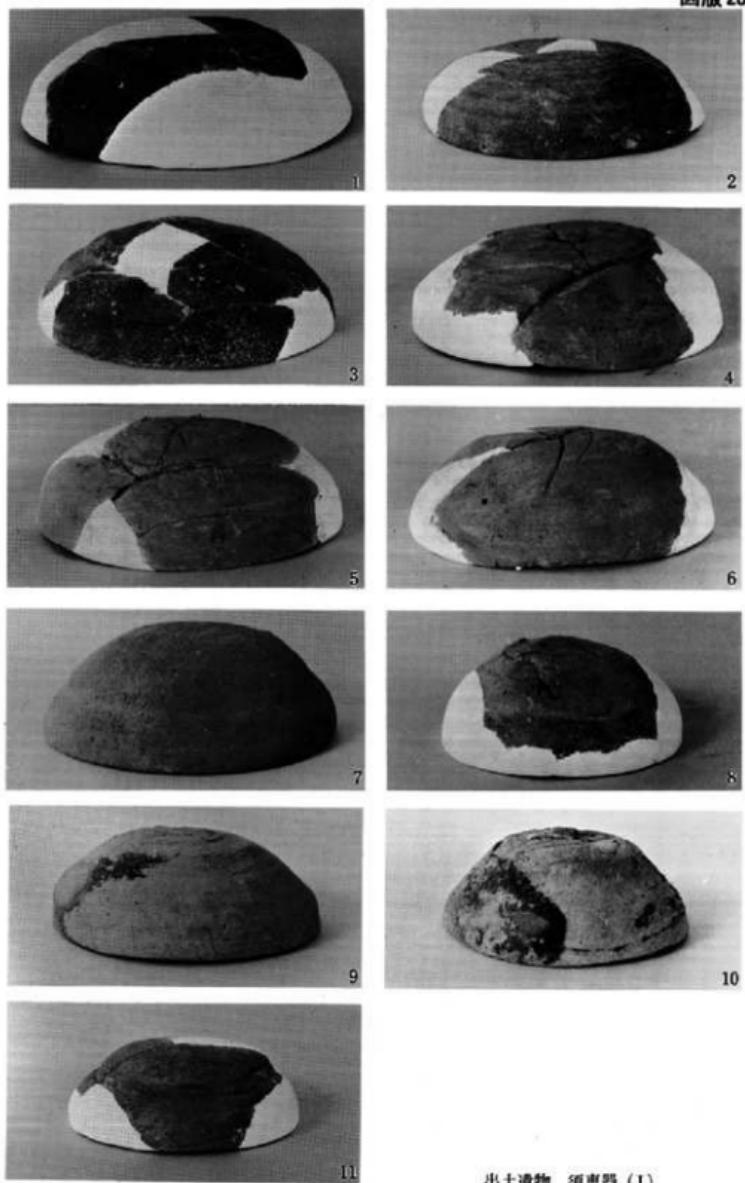
(4)

石室の構造（Ⅲ）側壁

P L. 23

- | | |
|----|----------------|
| 1 | 第48図1(第8号墳出土) |
| 2 | 第8図1(第2号墳出土) |
| 3 | 第37図2(第7号墳出土) |
| 4 | 第48図6(第8号墳出土) |
| 5 | 第48図5(第8号墳出土) |
| 6 | 第48図4(第8号墳出土) |
| 7 | 第26図18(第6号墳出土) |
| 8 | 第26図14(第6号墳出土) |
| 9 | 第26図17(第6号墳出土) |
| 10 | 第26図20(第6号墳出土) |
| 11 | 第26図15(第6号墳出土) |

図版 23

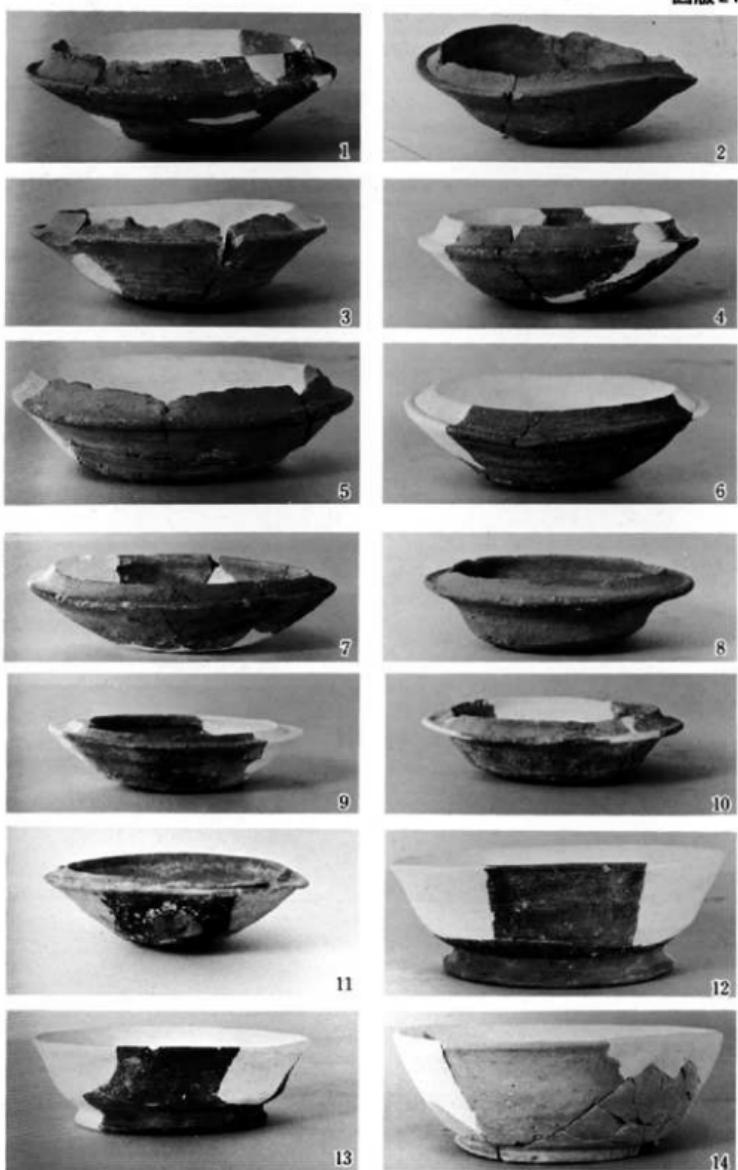


出土遺物 須恵器 (I)

P.L. 24

- 1 第26図7(第6号墳出土)
- 2 第26図10(第6号墳出土)
- 3 第26図12(第6号墳出土)
- 4 第26図13(第6号墳出土)
- 5 第48図7(第8号墳出土)
- 6 第48図9(第8号墳出土)
- 7 第48図8(第8号墳出土)
- 8 第26図22(第6号墳出土)
- 9 第26図23(第6号墳出土)
- 10 第26図24(第6号墳出土)
- 11 第26図21(第6号墳出土)
- 12 第48図16(第8号墳出土)
- 13 第48図17(第8号墳出土)
- 14 第48図18(第8号墳出土)

図版24

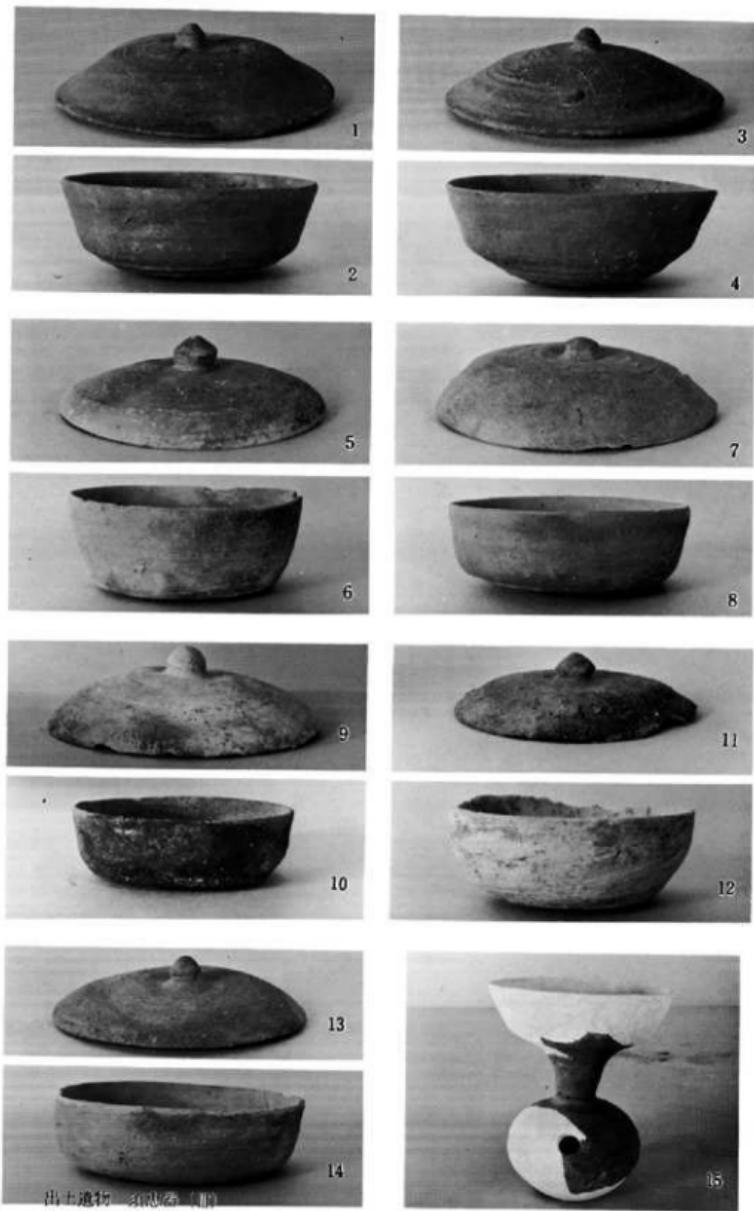


出土遺物 須恵器(II)

P L . 25

- 1 第37図8(第7号墳出土)
- 2 第37図9(第7号墳出土)
- 3 第37図10(第7号墳出土)
- 4 第37図11(第7号墳出土)
- 5 第37図16(第7号墳出土)
- 6 第37図17(第7号墳出土)
- 7 第37図20(第7号墳出土)
- 8 第37図21(第7号墳出土)
- 9 第37図18(第7号墳出土)
- 10 第37図19(第7号墳出土)
- 11 第37図14(第7号墳出土)
- 12 第37図15(第7号墳出土)
- 13 第37図12(第7号墳出土)
- 14 第37図13(第7号墳出土)
- 15 第48図19(第8号墳出土)

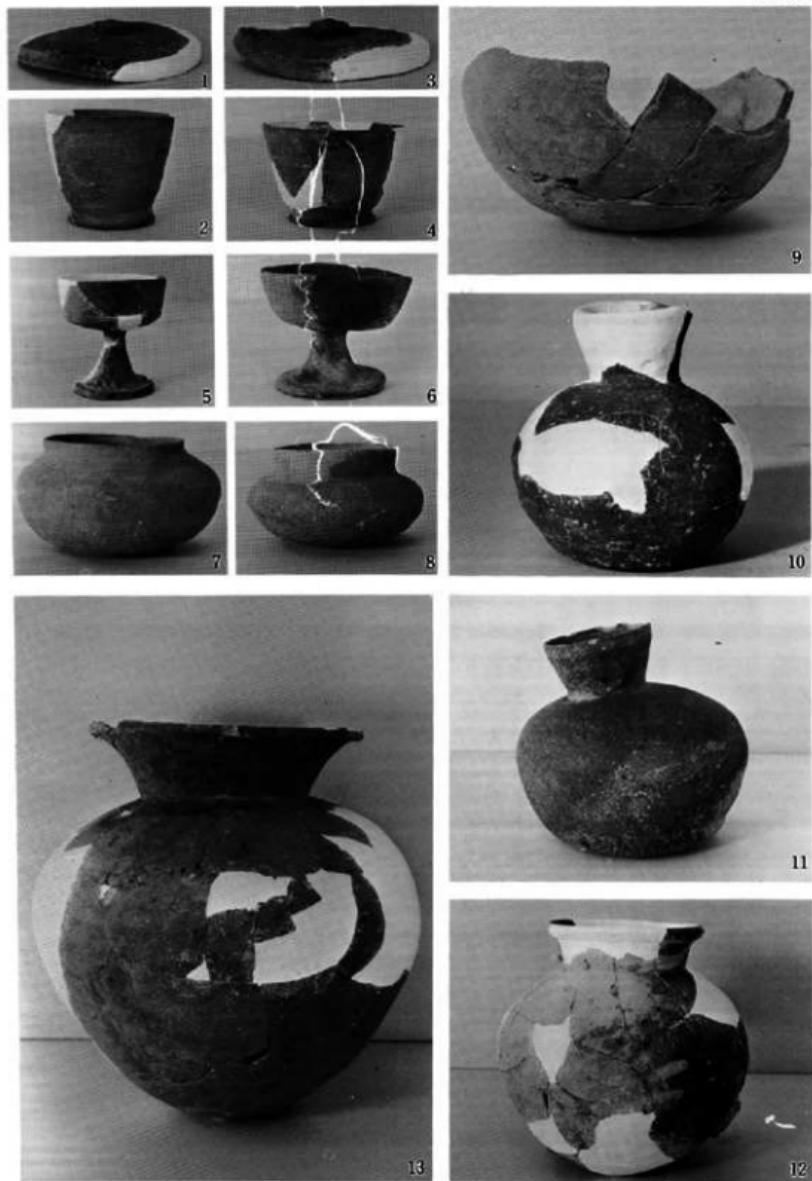
図版25



出土遺物 類器形(陶)

P L . 26

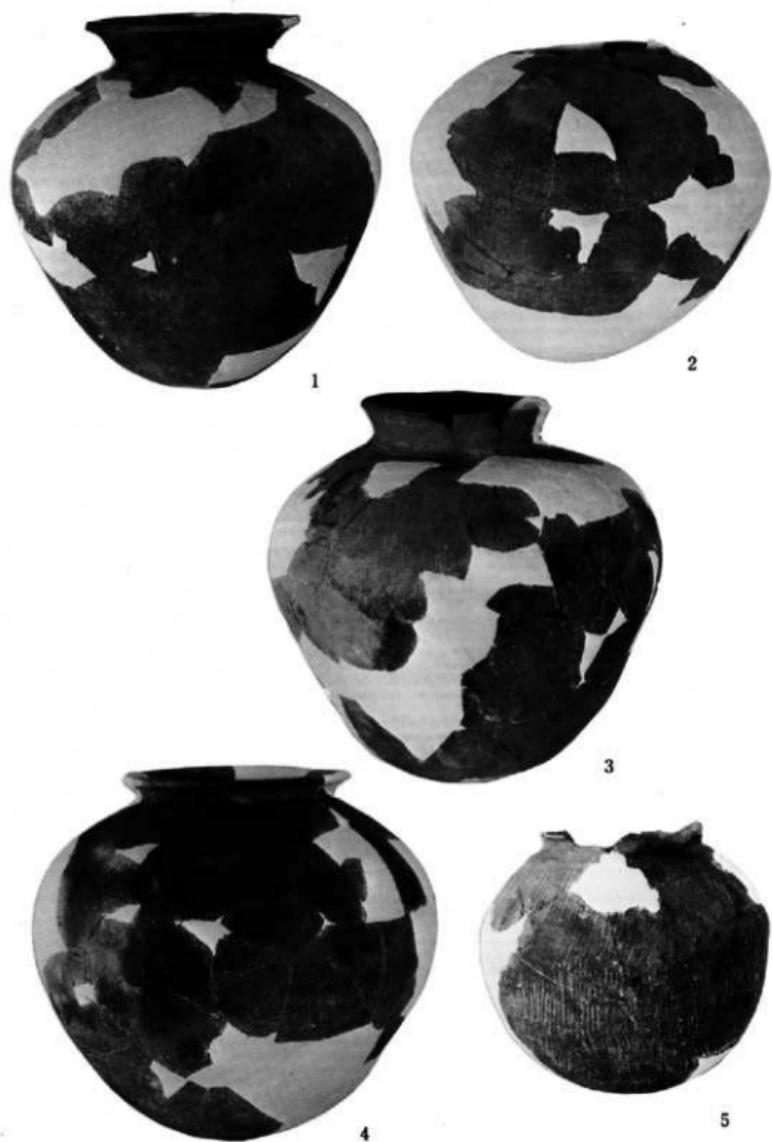
- | | |
|----|-------------------|
| 1 | 第37 422 (第7号墳出土) |
| 2 | 第37 425 (第7号墳出土) |
| 3 | 第37 425 (第7号墳出土上) |
| 4 | 第37 426 (第7号墳出土) |
| 5 | 第26 426 (第6号墳出土) |
| 6 | 第37 427 (第7号墳出土) |
| 7 | 第37 431 (第7号墳出土) |
| 8 | 第37 430 (第7号墳出土) |
| 9 | 第26 429 (第6号墳出土上) |
| 10 | 第26 430 (第6号墳出土) |
| 11 | 第37 429 (第7号墳出土) |
| 12 | 第49 41 (第8号墳出土) |
| 13 | 第50 421 (第8号墳出土) |



出土遺物 猶惠器 (N)

P L . 27

- 1 第 27 図31(第 6 号墳出土)
- 2 第 27 図32(第 6 号墳出土)
- 3 第 38 図33(第 7 号墳出土)
- 4 第 39 図34(第 7 号墳出土)
- 5 第 38 図32(第 7 号墳出土)



出土遺物 須恵器 (V)

P.L. 28

- | | |
|----|----------------|
| 1 | 第52図2(第8号墳出土) |
| 2 | 第52図3(第8号墳出土) |
| 3 | 第28図16(第6号墳出土) |
| 4 | 第40図5(第7号墳出土) |
| 5 | 第28図4(第6号墳出土) |
| 6 | 第40図3(第7号墳出土) |
| 7 | 第28図9(第6号墳出土) |
| 8 | 第52図4(第8号墳出土) |
| 9 | 第28図5(第6号墳出土) |
| 10 | 第28図6(第6号墳出土) |
| 11 | 第28図7(第6号墳出土) |
| 12 | 第28図1(第6号墳出土) |
| 13 | 第28図2(第6号墳出土) |
| 14 | 第28図3(第6号墳出土) |

図版28



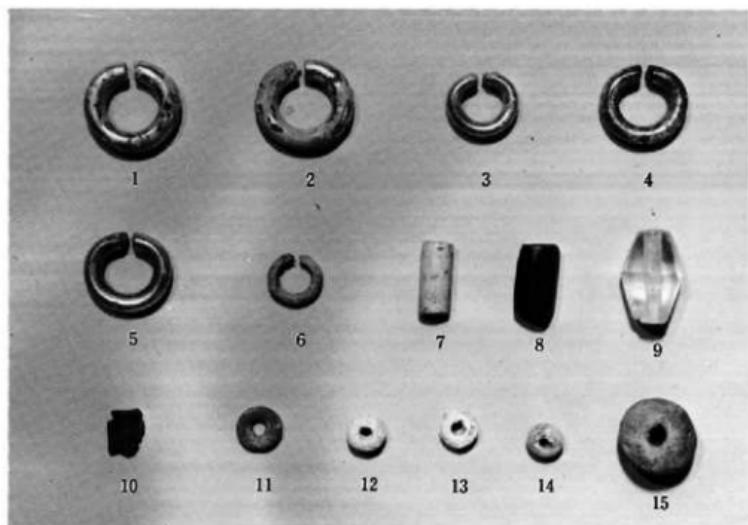
出土遺物 土器

P L . 29 (1)

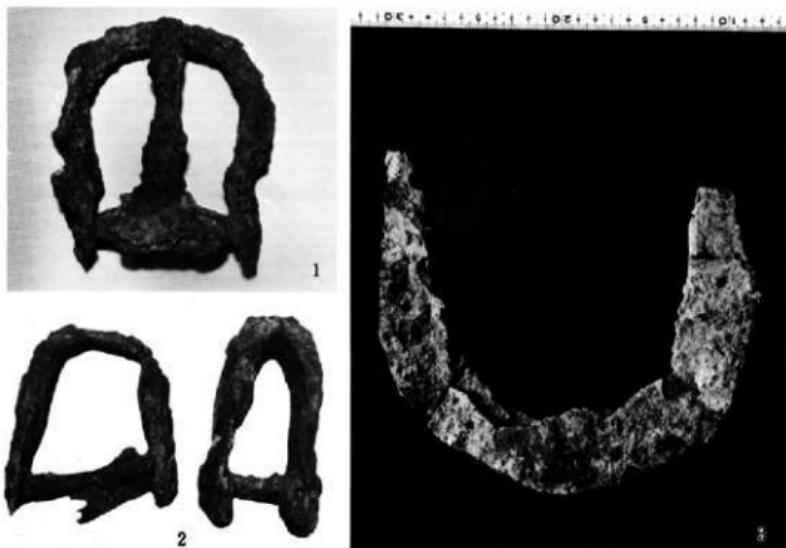
- 1 第30図3(第6号墳出土)
- 2 第30図4(第6号墳出土)
- 3 第30図1(第6号墳出土)
- 4 第30図2(第6号墳出土)
- 5 第41図10(第7号墳出土)
- 6 第41図11(第7号墳出土)
- 7 第30図6(第6号墳出土)
- 8 第30図7(第6号墳出土)
- 9 第30図5(第6号墳出土)
- 10 第30図12(第6号墳出土)
- 11 第30図8(第6号墳出土)
- 12 第30図9(第6号墳出土)
- 13 第30図10(第6号墳出土)
- 14 第30図11(第6号墳出土)
- 15 第40図6(第7号墳出土)

P L . 29 (2)

- 1 第53図1(第8号墳出土)
- 2 第53図2(第8号墳出土)
- 3 第53図7(第8号墳出土)



(1) 装身具



(2) 馬具及び農具

P.L. 30 [1]

- | | |
|----|--------------------|
| 1 | 第 14 図 2(第 3 号墳出土) |
| 2 | 第 29 図 2(第 6 号墳出土) |
| 3 | 第 14 図 1(第 3 号墳出土) |
| 4 | 第 14 図 3(第 3 号墳出土) |
| 5 | 第 14 図 4(第 3 号墳出土) |
| 6 | 第 41 図 1(第 7 号墳出土) |
| 7 | 第 14 図 6(第 3 号墳出土) |
| 8 | 第 14 図 7(第 3 号墳出土) |
| 9 | 第 14 図 8(第 3 号墳出土) |
| 10 | 第 14 図 9(第 3 号墳出土) |
| 11 | 第 41 図 2(第 7 号墳出土) |
| 12 | 第 53 図 5(第 8 号墳出土) |

P.L. 30 [2]

- | | |
|---|---------------------|
| 1 | 第 29 図 1(第 6 号墳出土) |
| 2 | 第 41 図 8(第 7 号墳出土) |
| 3 | 第 41 図 9(第 7 号墳出土) |
| 4 | 第 14 図 16(第 3 号墳出土) |
| 5 | 第 14 図 15(第 3 号墳出土) |
| 6 | 第 14 図 14(第 3 号墳出土) |

図版30



(1) 武具



(2) 馬具及び工具

調査関係者

地元協力者 片江区画整理組合設立準備委員会
(広田長登・磯山茂十郎・大穂亮一・鶴田源太郎
鶴田忠・松隈和実・八尋勇)、
田角仁作・田角久幸・河野忠義・田角仁作
花田文徳

調査協力者 岡本孝之(慶應大学大学院)
都市開発局 区画整理課・古田義行・富崎勝政・平田靖憲
教育委員会 正木利輔・結城一義・青木崇・三島格
石橋博・三宅安吉・福田征一・柳田純季
柳沢一男・島津義昭・山崎純男・後藤直
五坂田チサヨ・深川洋子

福岡市 片江古墳群 発掘調査報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書第24報 昭和48年3月31日 発行 福岡市教育委員会 印刷 チューエツ

